

協働・循環型「やまがた創生」人材育成事業
平成30年度 成果報告書

協働・循環型「やまがた創生」人材育成事業
平成30年度 成果報告書

協働・循環型「やまがた創生」人材育成事業
平成30年度 成果報告書

目 次

室長あいさつ

1	事業の概要	2
2	事業目標と実績	3
3	地域創生教育カリキュラムの編成・実施	4
4	地域志向科目授業推進（バス等借り上げ助成）	11
5	キャリア Café による地元企業の魅力発信	13
6	地域課題への取組	
6.1	最上地域の取組	20
6.2	地域創生関連授業による地域課題への取組	28
7	大学生と高校生との協働活動（高大連携事業）	40
8	やまがた創生戦略協議会	
8.1	やまがた創生戦略協議会	46
8.2	教育プログラム開発委員会	49
8.3	協働人材育成部会	50
8.4	若者定着推進部会	53
9	シンポジウム	55
10	広報紙「やまがた創生便り」	59
11	調査	
11.1	山形大学就職調査	61
11.2	就職意識調査	65
12	アドバイザーボード	72

室長あいさつ

若者の地域定着と雇用創出の具体化を目指して



山形大学COC+推進室長
(副学長・地域教育文化学部長) 出口 毅

我が国では地域が抱える様々な課題、特に山形県では少子高齢化社会がもたらす諸問題の解決に取り組む人材を育成することが急務となっています。これらに取り組むために山形大学では平成25年から地域貢献の柱として、地域志向科目の増加と地域志向の研究・社会貢献事業の展開により、昨年度までCOC事業として学生の地域理解の増進に取り組んで参りました。さらに、平成27年度に採択されたCOC+事業は、県内の高等教育機関、自治体、企業、民間団体、NPO等と連携組織を構築して県全体で課題解決の明確化と具体的な解決策の策定、実行を行うものです。

具体的には、地域連携科目の必修化、学外研修科目（インターンシップなど）と課題解決科目、協働研究科目（卒業研究や修士特別研究）による学生の地域理解の増進と主体的な課題解決人材の育成により、山形県内への就職人数の増加を最大の目標としています。また、具体的には卒業生の地元就職率の10%向上を目指します。

また、新たな雇用創出を目的として、ベンチャー企業等による新規雇用150人の創出も掲げています。これらはあくまでも数値目標であり、最終的には多くの若者が自ら地域の課題を的確に理解し、解決策を策定・実行していくたくましい人材に育つことにあります。

地域社会の将来を担う、たくましい若者が、世代や立場を超えて多くの人々を巻き込んで地域の活性化に取り組み、その結果として、県内での若者の地域定着率の向上と新規雇用創出が継続的に生み出される社会へと転換することをめざします。その基盤を形成することが今回のCOC+事業に参画する大学や自治体、NPO等の連携する組織に共通した課題です。

平成29年度より、山形大学では地域教育文化学部が中心となって事業を進める体制になりました。本事業では同じ方向に向かって意識を共有し、継続的に取り組むことが求められています。未来の山形県に資するということは、地域教育文化学部の使命とも重なります。今後の学部のあり方を模索する上で重要となる本事業に継続して取り組みたいと存じます。

さらに、今年度は、2つの大きな出来事がありました。一つは、低学年・地域密着型インターンシップの取り組みが文部科学省から高く評価され、山形大学のインターンシップが第1回目の全国最優秀賞を獲得したことです。もう一つは、「オールやまがたによる若者定着を目指して」をテーマに1月10日に開催したシンポジウムにおいて、吉村美栄子知事、清野伸昭県商工会議所連合会長、小山清人学長が鼎談し、危機意識を共有し、産学官が連携して若者定着に取り組むとするメッセージを取りまとめて発信したことです。来年度が、事業の最終年度となりますが、目標達成に向けて、メッセージを具体的な連携事業として展開できるようにしていく所存です。皆様のご理解とご協力、ご支援を心からお願い申し上げます。

1 事業の概要

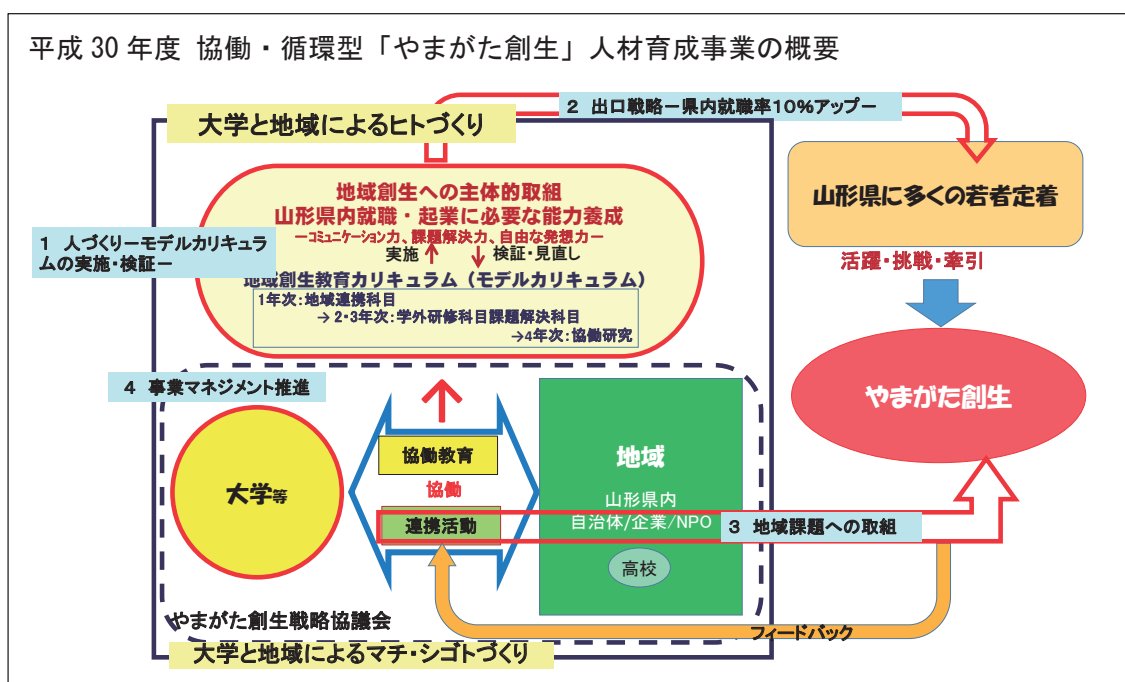
(1) 事業名称

協働・循環型「やまがた創生」人材育成

(2) 事業の目的[申請書版]

- ・若者の県内定着に向けて、1年次から卒業年次まで一貫して地域理解が深められる教育カリキュラムを整備する。養成される人材像は、「コミュニケーション力、課題解決力、自由な発想力」を備えた人材。
- ・産学官金連携で、既存企業の事業拡大、起業促進などによる雇用創出を進める。

(3) 平成30年度事業の取組



1) 人づくりモデルカリキュラムの実施・検証—

① 地域創生教育カリキュラムの編成・実施

教育カリキュラム構築の責任学部を地域教育文化学部として、山形大学のモデル教育カリキュラムを平成29年度に構築し、平成30年度から実施する。

② 地域志向科目授業推進 (バス等借り上げ助成)

2) 出口戦略—県内就職者率10%アップ—

① キャリアCafé

県内就職率の低い工学部及び農学部において、県内企業の魅力を伝えるための県内企業に就職したOB・OGと学生とのキャリアCaféを開催。

② 低学年インターンシップの推進

3) 地域課題への取組

① 最上地域の取組

高等教育機関のない最上地域における、地域・企業と協働した地元の魅力を知る多彩な取組。

- ② 地域創生関連授業による地域課題への取組
- ③ 大学生と高校生との協働活動—高大連携—

4) 事業マネジメント推進

- ① やまがた創生戦略協議会
 - ・やまがた創生戦略協議会
 - ・教育プログラム開発委員会
 - ・協働人材育成部会
 - ・若者定着推進部会
- ② 広報
 - ・シンポジウムの開催
 - ・「やまがた創生便り」による広報
- ③ 調査
 - ・山形大学就職調査
 - ・就職意識調査

2 事業目標と実績

目標と実績 目標項目 (単位)	H26	H27		H28		H29		H30		H31
	実績	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	目標
山形県内企業等就職率 (%)	36.8	38.3	37	34.3	38	34.3	41		43	47.4
うち山形大学 (%)	25	28.7	25	28.8	27	28.3	29		32	37
山形県内企業等へのインターンシップ参加者数 (人)	389	484	400	455	450	534	506	550	657	858
うち山形大学 (人)	166	226	170	222	200	223	250	203	350	500
寄附講座数 (講座)	1	3	1	6	4	6	5		6	8
うち山形大学 (講座)	1	2	1	2	1	2	1		2	3

・「山形県内企業等就職率」及び「山形県内企業等へのインターンシップ参加者数」は目標と実績の乖離が大きくなっている。

・学生の就職要因として、就職意識、入学率、大学教育（インターンシップの実施、キャリア形成、地域志向科目の受講等）、企業の採用力、地域の産業構造、景気の動向等があげられる。しかしながら、それらがどのように関係して県内就職を形成するかについては、未知の領域である。このような就職構造について解明されたからといって実態として県内就職者数の増大は難しいかもしれないが、効果的な事業に取り組むためにも就職構造の調査・分析は待たれるところである。

・インターンシップの参加者数については、単位とまらないインターンシップの把握ができていない。先行研究^(注)を基にして仮にその参加者を含めるとすると、参加者数は現在の約2倍と想定される。

(注) 松坂暢浩 2017、「山形県内大学に通う大学生のインターンシップ参加状況の調査」『自立分散型（地域）社会システムを構築し、運営する人材の育成 平成29年度報告書』49-50

3 地域創生教育カリキュラムの編成・実施

山形大学ではCOC+の責任学部である地域教育文化学部をモデルに「地域創生カリキュラム」を展開している。そこでは、平成30年度から定められた地域連携に関する科目を9科目:18単位(必修3科目:6単位、選択6科目:12単位)以上を履修して単位を取得した学生に履修認定証を与え、地域貢献の実践力を高める学びを深めたことを大学として認めている。

【地域創生カリキュラム科目一覧】

	開講時期	科目区分	授業科目	授業形式	開講単位	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期
地域創生・必修科目	1年	基幹科目	「山形から考える」科目群	-	2	2					
	3年前期	中心科目	フィールドプロジェクト	実習	2					集中	
	3年前期	発展科目	社会体験(インターンシップ)	実習	2					集中	
地域創生・選択科目	1年前期	基礎科目	地域芸術文化実践論	講義	2	2					
		基礎科目	心身健康支援実践論	講義	2	2					
	1年後期	基礎科目	ライフステージとスポーツ	講義	2		2				
		基礎科目	食と健康	講義	2		2				
	2年前期	基礎科目	ライフステージと食	講義	2			2			
		基礎科目	食育論	講義	2			2			
		基礎科目	社会教育論	講義	2			2			
	2年後期	基礎科目	地域文化創生演習	演習	2				2		
		専門科目	舞台表現演習	演習	2				2		
		専門科目	衛生・公衆衛生学	講義	2				2		
		専門科目	食と疾病	講義	2				2		
		中心科目	地域社会とファシリテーション	講義	2				2		
		中心科目	生涯学習論	講義	2				2		
		発展科目	キャリア教育	演習	2				2		
		基礎科目	芸術アウトリーチ基礎	講義	2				集中		
		専門科目	地域ファシリテート実践論(芸術文化)	講義	2						2
		専門科目	武道文化論	講義	2						2
	3年後期	専門科目	地域ファシリテート実践演習(芸術文化)	演習	2						2
		専門科目	コミュニティ心理学	講義	2						2
	専門科目	スポーツマネジメント	講義	2						2	

地域創生・必修科目:本履修認定にあたり必修とする。

地域創生・選択科目:6科目以上履修し12単位以上の取得が求められる。

カリキュラムでは、基盤教育課程の「山形から考える」科目および地域教育文化学部3年次のフィールドプロジェクト(地域体験型科目)や社会体験(インターンシップ科目)を必修科目とし、地域教育文化学部・文化創生コースの既存科目を中心に選択科目を展開している。

今年度、COC+コーディネーターを中心に「山形から考える」科目において新たな地域志向科目「地域体験スタートアップ」を実施し、より幅広い地域志向科目の展開をはかった。本報告書では、この新規科目について学習内容や成果について報告する。

「山形から考える」科目（新規開講）

地域体験スタートアップ

【授業の目的】

- 日本及び山形の現状と課題、山形固有の魅力を講義で学びつつ、地域活動を通じて地域の現状を体験的に理解する。
- 日本全体及び山形を中心とした地方の現状と将来的課題を講義により学習します。そこでは、グループワークも行い、多様な考え方とともに理解を深める。
- 山形の魅力的な歴史・文化・自然・人物・企業などを学習し、地域創生に繋がる地方の可能性を理解する。
- 大学周辺の地域活動に参加する地域体験により、地域の現状と課題を知る。
- 地域体験における地域の方々や学生との協働では、年齢や背景の異なる人々の組織で活動する楽しみに出会い、社会人を向上させる。
- そして地域の現状と魅力を知った学生が、山形や自身の故郷において次世代を担う存在として活躍してくれることを究極的な目標とする。

【授業の方法】

地域に関連する講義（12回）+地域体験（1日程度）を行った。

講義：地域の現状と課題、山形の魅力を専門の異なる教員のリレー形式により実施する。

地域体験：4～5名のグループにわかれ、小白川キャンパス周辺の地域活動に参加する。

【地域に関連する講義】

1. ガイダンス
2. 日本の人口動態① + グループワーク
3. " ② + グループワーク
4. 山形の人口動態① + グループワーク
5. " ② + グループワーク
6. 地域学習にむけた心得 + グループワーク
7. 山形の魅力ある自然 (地域教育文化学部・八木浩司先生)
8. 山形の魅力ある人物 (地域教育文化学部・三上英司先生)
9. 山形の魅力ある歴史 (学士課程基盤教育機構・阿部宇洋先生)
10. 山形の魅力ある企業 (学士課程基盤教育機構・松坂暢浩先生)
11. 山形の魅力ある文化 (阿部先生)
12. 山形の魅力ある農業



第8回 山形の魅力ある人物

【地域体験】

7つの地域活動へ各4～5名、合計30名が参加した。

	活動名	活動日	時間	活動場所	活動内容	受入団体	参加学生数
①	地域維持活動（公園清掃）	6/10・7/22	6：30～7：30 （周辺清掃8：30まで）	緑町公園 （山大から5分）	緑町公園の除草・清掃	緑町藤森自治会	4
②	地域維持活動（公園清掃）	6/24・7/8・7/22	6：00～7：00 （周辺清掃8：00まで）	小白川公園 （山大から3分）	小白川公園の除草・清掃	小白川町第二区自治会	5
③	地域活動（滝壺清掃）	7/14	8：00～12：00	平清水（清明寮近く）	不動尊滝壺活動	平清水町内会	5
④	地域イベント（夏祭り）	7/21	13：30～17：00	第八小学校 （北門すぐ）	地域の子どもたちとの活動イベント補助	うめばち青少年育成会	4
⑤	地域イベント（魚つかみ）	7/28	7：00～14：00	馬見ヶ崎河原（山大から10分）	地域の子どもたちとの活動イベント補助	うめばち青少年育成会	4
⑥	地域イベント（子どもまつり）	7/29	16：00～20：00	あこや公園 （裏門すぐ）	地域の子どもたちとの活動イベント補助	小白川第二区南自治会	4
⑦	地域行事（夏まつり）	8/15	10：00～21：00	第五小学校 （正門すぐ）	地域の子どもたちとの活動イベント補助	第五地区子ども育成連合会	4



平清水地区 ③
（学生寮）



① 緑町公園清掃



② 小白川公園清掃



③ 滝壺清掃



⑦ 地域行事（夏まつり）

【教育効果】

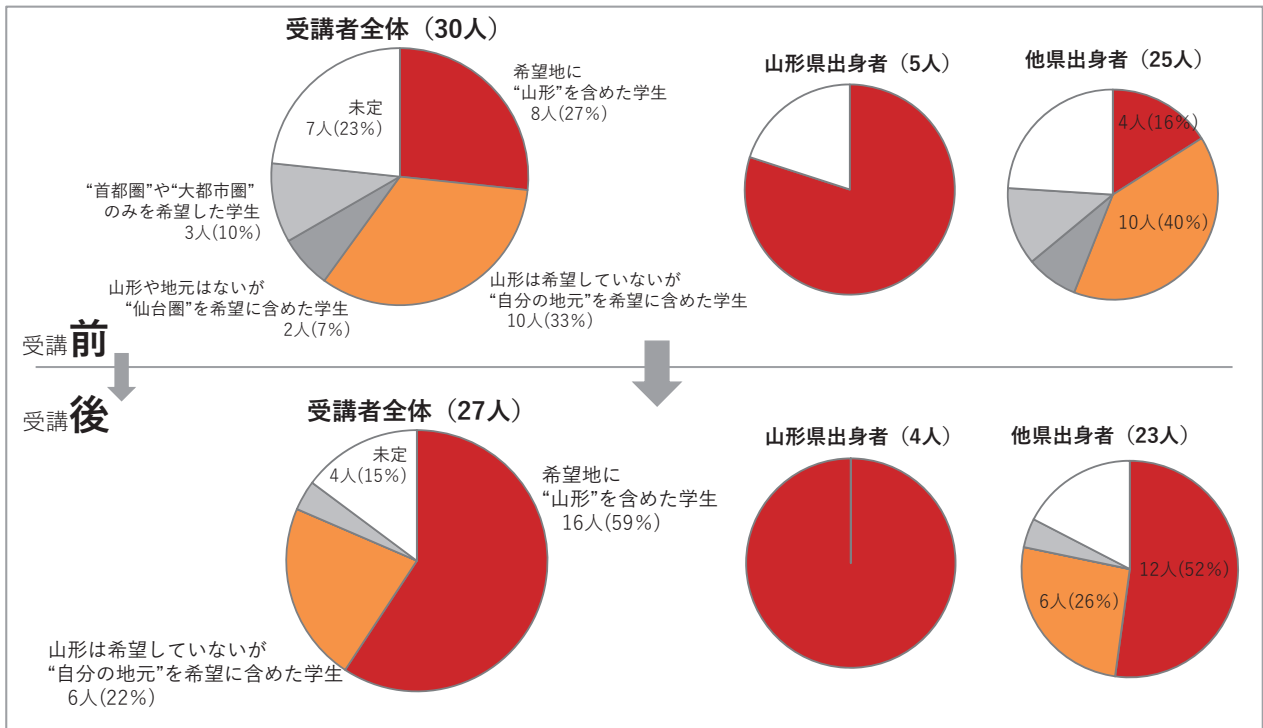
概要

- ① 本科目では「地域の現状・課題、その解決策としての地域の魅力を深く知ること」を目的に、
1) 人口動態を中心とした地方の現状と課題および山形県の魅力的な事象に関する講義、2)
大学周辺の地域活動への参加を通じた体験型学習を行った。
- ② その結果として
 - (1) 学生の就労希望地が変化し、地域志向（山形及び自身の地元）が強くなっていた。
 - (2) 地域への関心が高まり、地域の魅力や現状を理解できた、と多くの学生が回答した。
- ③ 受講者の8割以上が県外出身であったなかで、地域の理解を深め、就労地志向まで変化が見られており、科目の目的は概ね達成できたと思われる。

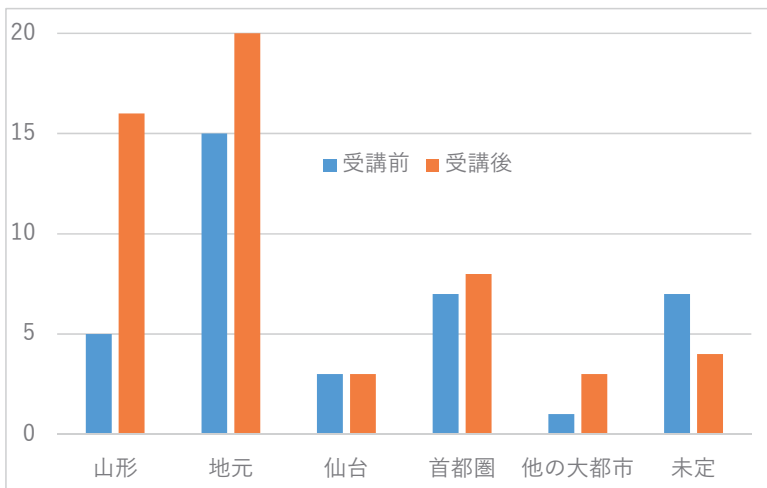
<就労地志向の変化>（調査に用いたアンケートは後述）

- ・山形への就労意向が強くなった。 →地域志向科目として効果がみられた。
- ・自分の地元への就労意向も強くなった。 →地域志向科目として効果がみられた。
- ・“未定”の学生が減少した。 →キャリア教育としても効果がみられた。

地域志向の傾向：就労希望地の複数回答中に“山形”や“地元”を含めた学生の割合



各就労地の希望人数



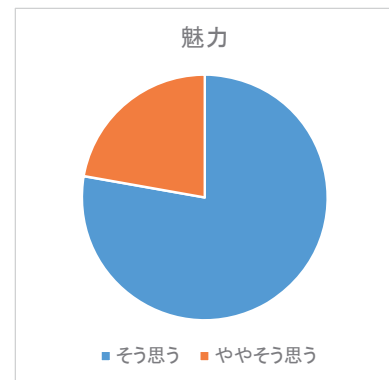
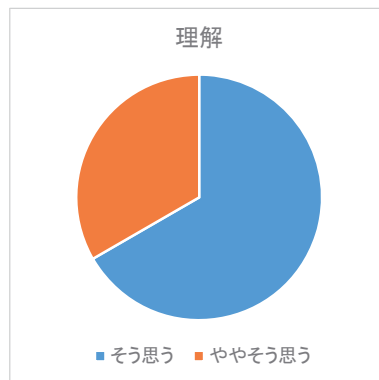
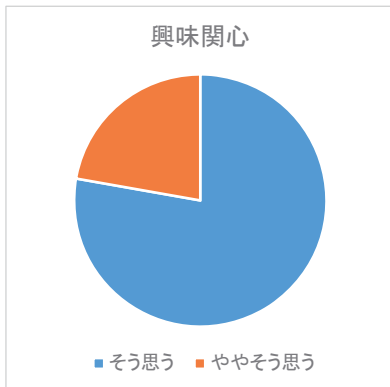
“山形”や“地元”と回答した学生が増えているが、仙台圏や首都圏への希望が減少しているわけではなく、志向の幅が広がり「山形(地元)も良い」と考え始めたことがうかがえる。

<地域学習としての効果> (調査に用いたアンケートは次ページ)

Q：(山形の) 地域への社会的な興味関心が深まりましたか。 →多くの学生が肯定的

Q：(山形の) 地域の現状をよく理解できましたか。 → //

Q：(山形の) 地域の魅力に出会うことはできましたか。 → //



いずれも調査にも多くの学生が肯定的であり、講義や地域での体験を通じて、地域への興味関心、現状や魅力の理解が進んだことがうかがえる。

<調査アンケート>

受講前 名前 _____ 学籍番号 _____ 受講プログラム _____

授業の成績評価には一切影響しません。

Q：出身地 (都道府県 or 国) ()

Q：受講理由を教えてください。()

①山形への興味・関心 ②自分の地元への興味・関心 ③日本の将来への興味・関心
④時間割の都合 ⑤単位が取りやすそう ⑥地域での活動への興味・関心
⑦その他 (記述して下さい) ()

Q：将来、働きたい地域を教えてください。(複数回答可)

山形県 自分の地元 仙台圏 首都圏 他の大都市圏 未定

その理由：

名前 _____ 学籍番号 _____

授業の成績評価には一切影響しません。

Q：（山形の）地域への社会的な興味関心が深まりましたか。

そう思う ややそう思う どちらとも言えない あまりそう思わない そう思わない

Q：（山形の）地域の現状をよく理解できましたか。

そう思う ややそう思う どちらとも言えない あまりそう思わない そう思わない

Q：（山形の）地域の魅力に出会うことはできましたか。

そう思う ややそう思う どちらとも言えない あまりそう思わない そう思わない

Q：将来、働きたい地域を教えてください。（複数回答可 ☑）

山形県 自分の地元 仙台圏 首都圏 他の大都市圏 未定

その理由：

4 地域志向科目授業推進（バス等借り上げ助成）

地域志向科目は、地域魅力の理解、アクティブラーニング等授業効果が高いことから、COC 事業から力を入れて取り組んできました。本事業でも、その授業推進のために学生の地域への移動を支援するバス等借り上げ助成を行っています。その市町村別訪問状況については以下のようになっていますが、30 市町村で約 3000 人の学生が授業に臨んでいます。

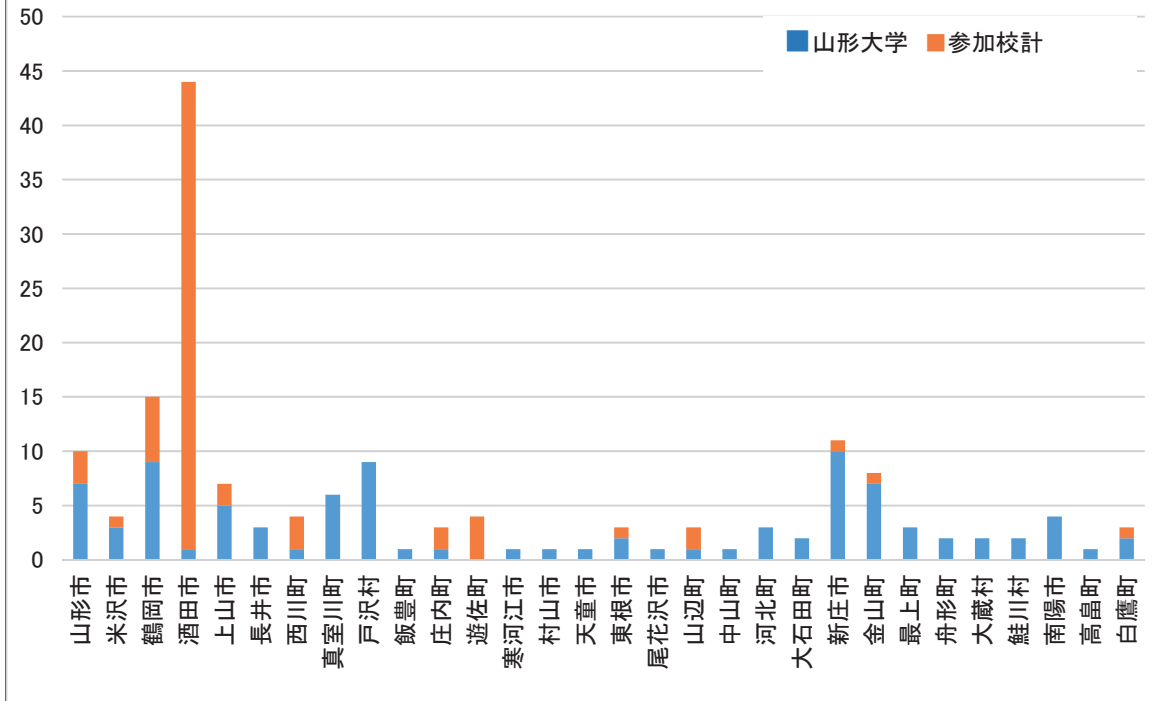
○市町村別訪問先

市町村	件 数					計
	山形大	米沢 栄養大	東北公 益文科 大	東北 文教大	東北文 教短大	
山形市	7	1			2	10
米沢市	3	1				4
鶴岡市	9		5			14
酒田市	1		40			41
上山市	5			2		7
長井市	3					3
西川町	1			2	1	4
真室川町	6					6
戸沢村	9					9
飯豊町	1					1
庄内町	1		2			3
遊佐町	0		2			2
寒河江市	1					1
村山市	1					1
天童市	1					1
東根市	2				1	3
尾花沢市	1					1
山辺町	1			2		3
中山町	1					1
河北町	3					3
大石田町	2					2
新庄市	10				1	11
金山町	7				1	8
最上町	3					3
舟形町	2					2
大蔵村	2					2
鮭川村	2					2
南陽市	4					4
高畠町	1					1
白鷹町	2			1		3
合計	92	2	49	7	6	156

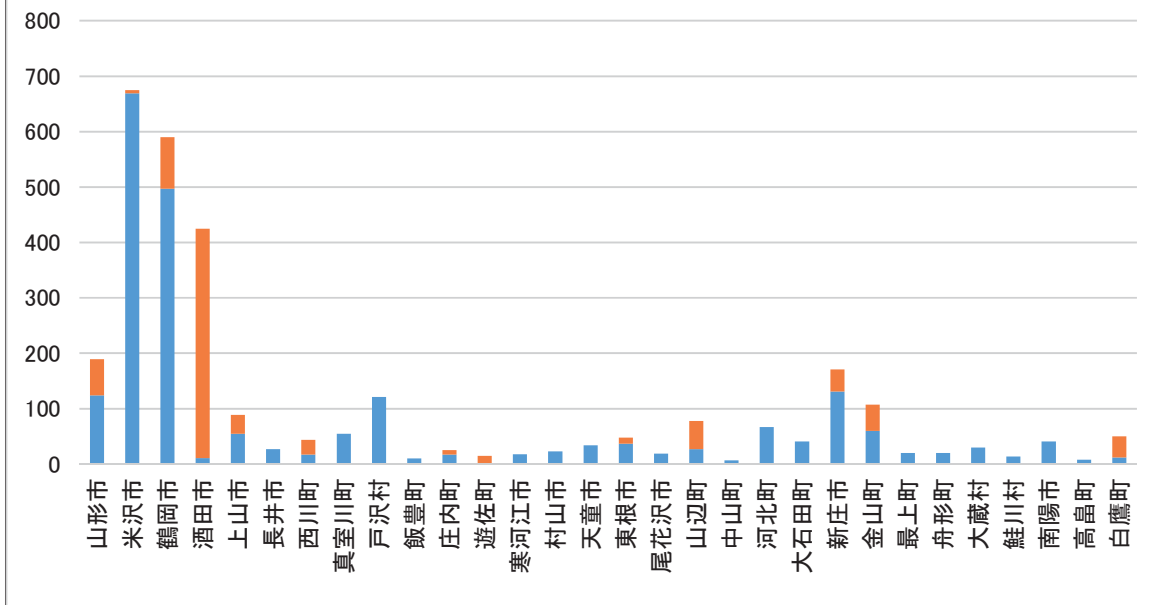
○市町村別訪問学生数(延べ人数)

市町村	件 数					計
	山形大	米沢 栄養大	東北公 益文科 大	東北 文教大	東北文 教短大	
山形市	124	14			51	189
米沢市	669	6				675
鶴岡市	497		76			573
酒田市	11		382			393
上山市	55			34		89
長井市	27					27
西川町	17			12	15	44
真室川町	55					55
戸沢村	121					121
飯豊町	10					10
庄内町	17		8			25
遊佐町	0		8			8
寒河江市	18					18
村山市	23					23
天童市	34					34
東根市	37				11	48
尾花沢市	19					19
山辺町	27			51		78
中山町	7					7
河北町	67					67
大石田町	41					41
新庄市	131				40	171
金山町	60				47	107
最上町	20					20
舟形町	20					20
大蔵村	30					30
鮭川村	14					14
南陽市	41					41
高畠町	8					8
白鷹町	12			38		50
合計	2,212	20	474	135	164	3,005

市町村別訪問先



市町村別訪問学生数(延べ人数)



5 キャリア Café による地元企業の魅力発信

—学生に県内企業の魅力を知る機会を増やす—

1. 工学部および農学部におけるキャリア Café

山形大学の卒業生全体の県内定着率は 27–28%であるのに対し、農学部および工学部の学生の県内定着率は 15–16%程度と他学部に比べて顕著に低い。学生にとっては就職先の選択は重要である。学生は大学で学んだ専門分野に関係した企業に就職しなければいけないという先入観を持ち、県内には希望する職種の企業がないと思い込んでいるとすれば、学生にとっても県内企業にとっても望ましいことではない。県内企業が学生に魅力を直接伝える機会は個別の会社説明会あるいは大学主催の合同企業説明会などである。しかしながら企業名が学生側に認識されていなければ説明会のブースに立ち寄り寄る機会はない。山形県内出身の学生やその家族にとって、魅力があり社会に貢献している県内企業の存在を知らなければ、県外の有名企業に目がいつてしまうことになる。

県内に定着して活躍する有為な人材を確保するためには、学生に地元企業の魅力を伝え、学生が地域企業を見直す場を構築することが必要である。場づくりの一つとして、「学生と OB・OG との対話会（キャリア Café）」を開催している。キャリア Café は山形県内の企業に大学のサポータになってもらい、サポータ企業に在籍する若手の OB・OG 社員を派遣してもらって、学生と OB とが直接対話する場である。工学部では 2017 年度にキャリア Café を 2 回実施し、学生に対して地元企業の知名度を向上させ、ものづくり企業の魅力を発信する場となるだけでなく、OB・OG の助言により、学生の就職活動における不安を解消する場にもなっていることがアンケートからも明らかになっている。2018 年度は工学部でのキャリア Café に加え、農学部でのキャリア Café を企画した。

2. 2018 年度キャリア Café の概略

農学部あるいは工学部の卒業生が在籍する県内企業を個別に訪問し、採用担当者との面談を行って工学部サポータ登録とキャリア Café への山形大学の 20～30 歳台の OB・OG の派遣を依頼した。OB が在籍していない企業の場合には他大学卒業生でも可とした。COC+推進室コーディネータが農学部および工学部の学務担当職員、マイナビ社担当者と連携して、山形大学校友会の支援を受けて実施した。参加企業紹介のチラシを学生に配布して学生の参加を促すとともに、就職担当教員からの周知、学務担当からの LINE による周知を行った。合同企業説明会の直前に開催される 2 月の Café は春季休業期間に開催されることから、時間的余裕があり、OB と学生の対話の Café 終了後に、OB と学生、OB 同士、人事担当者同士の情報交換ができるように懇談会を設定した。

表 1 2018 年度キャリア Café の実施状況

月	農学部	工学部
11 月		22 日第 1 回キャリア Café (16 時～17 時半) 参加企業 9 社、学生 9 名
12 月	14 日第 1 回キャリア Café (16 時～17 時半) 参加企業 5 社、学生 19 名	13 日第 2 回キャリア Café (16 時～17 時半) 参加企業 13 社、学生 19 名
2 月	15 日第 2 回キャリア Café (13 時～15 時) 参加企業 5 社、学生 22 名 情報交換会 (学生、OB、人事担当者) (15 時～16 時半)	13 日第 3 回キャリア Café (13 時～16 時) 参加企業 23 社、学生 29 名 (予定) 情報交換会 (学生、OB、人事担当者) (16 時～17 時半)

表2 キャリア Café の関係者の役割と波及効果

関係者	役割	効果
企業	OB・OG をキャリアアドバイザーとして派遣	企業の魅力発信 企業説明会・見学会へのつながり
OB・OG	キャリアアドバイザーとして助言	気楽に大学を訪問 大学と卒業生との関係の再構築
学生	友人を誘う	地域の魅力のある企業を知る 地元で働くことの意味を知る 地域就職の契機
大学校友会	キャリア Café の支援	OB・OG との関係強化
学務担当	教室の確保、学生への通知・連絡	教員との関係強化 学部 OB 会との連携強化
マイナビ	企業への日程案内	企業や学生との新たなつながり
COC+推進室	企業への参加勧誘、学生、学部教員・事務担当者、山形大学校友会と連携ポスター、チラシ印刷	学生のやる気を後押し 地域人材の育成への寄与 COC+事業の意義の周知

3. 工学部キャリア Café

(1) 概要

サポータ企業として登録している企業宛に 2018 年度の Café 開催日程を提示し、第 1 回目か 2 回目のいずれかと第 3 回目の Café への参加をお願いした。第 1 回は 9 社、第 2 回は 13 社、第 3 回は 24 社からの希望があり、この企業で実施することとした。第 3 回については、当初 21 社が参加を予定していたが、12 月に入って企業担当者が工学部の就職担当教員と面談した折に、キャリア Café の存在を知り、参加を希望した企業が 3 社あった。

キャリア Café は、山形県や東北地方出身の 3 年生や大学院 1 年生を主な対象としているが、学年、出身地を問わず工学部に在籍する学生全員に周知するとともに、株式会社マイナビの運営協力を得て、米沢キャンパス学務課と連携して実施した。

第 1 回目の Café は平成 30 年 11 月 22 日(木)16 時 15 分～18 時に工学部 4 号館 2 階ゼミ室において、9 社が参加して行われた。参加した学生は 9 名であった。4 グループに別れ、1 グループあたり 2～3 社からの OB と学生 2～3 人がお茶を飲みながら対話を進め、25 分ごとに学生はグループの机を変わり、最後の時間は制限を加えないで話を聞きたい企業の席に行くこととして、できるだけ多くの企業の話が聞けるようにした。

第 2 回目は 12 月 13 日(木)、16 時 15 分～18 時に工学部 4 号館 2 階ゼミ室において、参加企業 13 社、19 名の学生の参加で行われた。6 グループに分かれて、OB 2～3 名と学生 2～3 名が対話できるようにした。



(a) 4グループに分かれてOBと学生との対話



(b) 壁側では人事担当者同士の交流

図1 第1回工学部キャリアCafé（平成30年11月22日）の様子



(a) 6グループに分かれてOBと対話



(b) 女性技術者の話を聞く



(c) OBと学生との対話



(d) 窓側では人事担当者同士の交流

図2 第2回工学部キャリアCafé（平成30年12月13日）の様子

第3回のキャリアCaféは、学期末試験終了後に設定し、13時～16時までの3時間を充てた。参加企業数は24社うち1社は社内事情で不参加となった。企業を11グループに分け、参加した学生22名を2名ずつが座れるようにして開始した。



(a) 受付での学務担当者とCafé手伝いの学生



(b) 紙で作るタワーコンテスト



(c) 学生とOGとの対話



(d) 学生とOBとの対話



(e) 全体風景



(f) OB, 人事担当者および学生との情報交換会

図3 第3回工学部キャリアCafé（平成31年2月13日）の様子

(2)キャリア Café に参加した感想

【学生】

- ・若い方からのリアルな仕事に対する側面が知れて良かった。また、より上の立場からの言葉も聴きたいなと思いました。
- ・自分の学科では無理と決めつけていた職種にも就職することができることがわかった。また、どの企業の方々もやりがいを大事にしていることを知って今後の就活の指標になった。
- ・様々な業界の理解が深まった。
- ・パンフレットも頂き、さらに色々なお話を頂いたので、良い情報収集になりました。
- ・仕事以外の就活についてや仕事をしながらの生活についてなど社会人のよくわからない部分が聞けた。
- ・会社で働いている人に直接お話を聞いて質問が出来て不安が少なくなった。

【OB・OG】

- ・昨年より学生からの質問が多く、有意義な時間になったと思う。次回は、もっと自社に興味を持ってもらえるように資料・を準備したい。
- ・キャリア Café は、県内企業と学生を繋げる良い機会なので非常に有意義な活動だと思う。地道に実施していく事により、徐々に山形の企業にも目を向けてもらえる事を期待したい。
- ・学生と話すことがなかなか無い機会であり、県内企業の魅力を知ってもらえるチャンス。良い取り組みだと思う。
- ・久しぶりに学生の方と話ができて楽しかったです。楽しみながら会社のこと等を説明させていただきました。
- ・学生も意欲を持って参加していたので、やりがいを感じた。
- ・参加企業に対して、参加学生がエントリーした、インターンシップに応募したなどの情報を統計し、有効性を公開してもらえると、OB・OGのやりがいに通じ、参加企業数のupも見込めるのではないのでしょうか。
- ・学生に当社をアピールするいい機会だと感じた。

【人事担当者】

- ・また次回も参加させていただきたいです。ありがとうございました。
- ・初めて参加しましたが、人数もほどよくいい会でした。ありがとうございました。
- ・良い意味で企業の広報活動が制限されているので、学生も落ち着いて素直にキャリアや就活の質問ができていたと思いました。OBならではの信頼感も学生さんから感じました。
- ・学生との接点を持てる良いイベントだと思いますので、今後も継続していただきたいと思います。

【参考】平成 30 年度工学部キャリア Café への参加企業(五十音順)

アイジー工業、ASE ジャパン、NEC エンベデッドプロダクツ、ND ソフトウェア、オリエンタルモーター、かわでん、小森マシンナリ、鈴木製作所、チノー山形事業所、データシステム米沢、デンソーFA 山形、トプコン山形、ナブテスコオートモーティブ、ニクニアサヒ、ニクニ白鷹、日立建機カミーノ、フジクラ電装、マーレーエンジンコンポーネンツ、ミクロン精密、ミツミ電機山形事業所、YCC 情報システム、山形共和電業、山形航空電子、山形パナソニック、山本製作所、米沢浜理薬品工業

4. 農学部キャリア Café

(1) 概要

農学部キャンパスでのキャリア Café は、12月22日および2月15日にそれぞれ19名、12名の学生が参加した。第1回目は16時30分～18時の予定で、5社の参加を得て19名の学生が参加して、実施した。OB 5名を2社、2社および1社の3グループに分け、1回25分の対話を3回行った。1社だけのグループでは対話というより、会社説明会の様相を呈することになり、改善の余地を残し

を残した。Café 終了後も学生と OB との対話は会場の教室から廊下に出て継続するものもあり、終了したのは 19 時となった。

第 2 回目の Café では参加企業 5 社を 2 社と 3 社の 2 グループに分け、45 分の対話を 2 回行った。対話の後には、食べ物と飲み物で談笑しながらの情報交換会に移行した。



(a) OB は自己紹介をしてから席に着く



(b) OB と学生との対話

図 4 第 1 回農学部キャリア Café (平成 30 年 12 月 22 日) の様子



(a) マイナビ担当者から Café の説明



(b) 紙タワーコンテスト



(c) OB と学生との対話



(d) OB と学生との懇談会

図 5 第 2 回農学部キャリア Café (平成 31 年 2 月 15 日) の様子

【参考】平成 30 年度農学部キャリア Café への参加企業(五十音順)

アオハタ、カトーコーポレーション、東北ハム、日新製薬、前田製管、丸善食品工業、山本製作所

5. 今後の課題

山形県内出身の学生は確かに参加しており、地元就職を希望する学生にとってはこのキャリア Café は企業理解の良い機会である。しかしながら、米沢キャンパスでは大学2年生から大学院1年生まで300名を超える県内出身学生数と比較して参加者が少ないように見える。農学部キャンパスでも同様で、県内学生よりも圧倒的に県外の学生の参加が多い。この実態は、県内に定着する企業にとっては、今後は、引き続き県内出身者へのアピールを進めるとともに、東北地方全域や近隣地域の出身者にキャリア Café への参加を促し、山形県の魅力ある企業の存在を知らせるだけでなく、就職すること、仕事をするこの意味を知ってもらうことが必要である。

学生の感想で印象深いものは、農学部の女子学生の「OBの話聞いて、自分の専門とは関係がない企業の就職してもよいということが分かった」である。農学部に限らず、学生は現在大学で学んでいる専門を生かす場として、専攻した分野に関係した企業に目が行きやすい。このキャリア Café とは別に、これまで大学に訪れたOBからは「会社では大学で勉強したことを生かすことは殆どない」、「あまりない」、「あまり役に立たない」、「使わない」という声を、よく聞いていた。確かにそのような一面はあるにしても、そのような意味で、専攻や学部と関係のない分野の企業にも目を向けるという意味ではなく、仕事は多様であるということを理解してもらうことが重要であろう。いろいろな分野の企業、いろいろな専門分野で学んだ多様なOBにCaféに参加してもらうことで、学生にとっても得られるものが大きいと考えられる。

最後に、キャリア Café ではOB・OGから学生が学ぶことの大きさ、社会の実態を学生に知らせる役割の重要性を、大学の教員が理解したうえで、学生に参加を促してもらえるようになることが望ましい。

6. 1 最上地域の取組

1 「オールもがみ若者定着・人材確保推進会議」の立ち上げ

COC+のサテライトを設置した最上地域は、置賜、村山、庄内、最上の4つ地域の中で唯一“高等教育機関”の無い空白地域となっています。

最上地域の高校生は1学年、約700名、内、県内就職が24%、県外就職11%合わせて35%を占めます。進学を考えた場合は高校生の選択肢は一つ、必ず地域の外へ出ていくしかありません。65%の進学者のうち、42%が県外に就職、約700名の高校生の内、結果県内に残る高校生は5割以下となります。

最上地域は特に女性の流出率が高くなっており、県内の他の地域と比較し早いペースで人口減少が進んでいる地域であります。

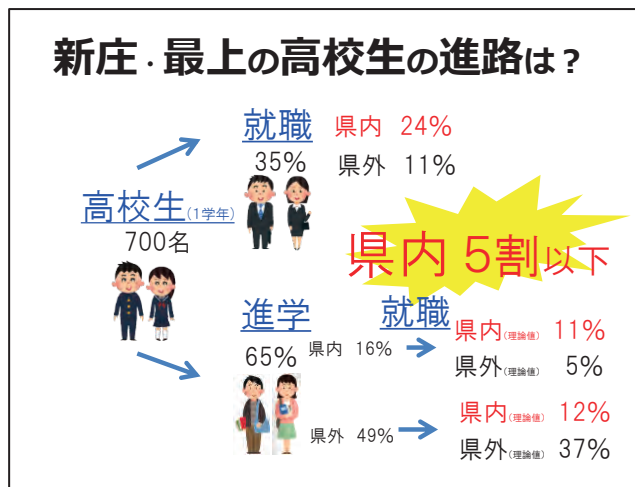


図1 最上地域の高校生の進路

高校卒業後5割を超える県外流出の現実に対して、若者定着に対するアプローチがなされていない、または、十分でないことが分かります。

COC+が開始したときに各種団体を対象としたアンケート調査によると、「地元でどのような働く場があるのか?」、進学で地域から離れた学生は地元企業のことをほとんど知らずに地域から出ていく事になり、地域で仕事をすることを意識する機会が無いことが現状です。

最上地域では一昨年「最上地域人材育成・定着推進会議」を設置し、様々な機関が連携し問題の解決につなげる取り組みを推進してきました。今年度、全県による「オール山形人材確保・生産性向上推進会議」の設立を受け、新たに「オールもがみ若者定着・人材確保推進会議」を立ち上げ、より一層若者の定着に向けた取り組みを推進しています。

2 「オールもがみ若者定着・人材確保」に向けた取り組み

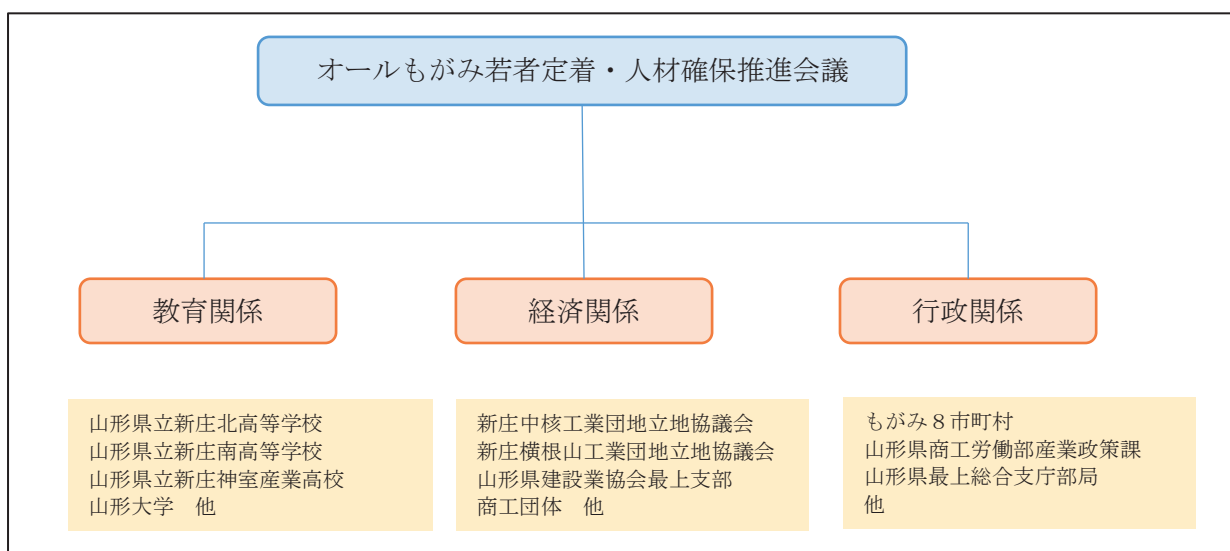


図2 オールもがみ若者定着・人材確保推進会議組織図

若者の定着・回帰を目的とし連携機関が情報を共有し、一丸となった取り組みです。「1 機運醸成」、「2 情報発信」、「3 次世代人材確保」、「4 経済支援」を柱に小学生、中学生、高校生、大学生、社会人まで「漏れなく・ダブリなく」オール最上の推進体制で13プログラムを進め、人材の確保・育成・定着の好循環を目指しています。

オールもがみ による 若者定着・人材確保 に向けた取組み

最上地域では、総合支庁、市町村、学校、企業などの機関が、また農林業、建設業、製造業、医療、福祉などの業種が、若者の地元定着に向けた取組みを行っています。5月24日、行政・教育・経済界による「オールもがみ若者定着・人材確保推進会議」を設立し、若者定着・人材確保に向け、情報共有、連携方策の検討を進めています。

【今後の取組みの視点】

- 1 市町村、総合支庁などの取組みの共有化・連携
- 2 若いときからのキャリア教育の充実
- 3 保護者の地元企業に対する理解の促進
- 4 企業の情報発信力強化・職場体験等の受入体制の充実
- 5 住宅など、若者が住みやすい・回帰しやすい環境の整備促進

1 気運醸成

高校生の保護者向けの就職セミナー

最上総合支庁・高校
✓ 学生の就職・進路決定にあたり、保護者の役割が大きいことから、保護者に対して、セミナーを通じて、最近の就活事情、子どもの接し方、地元企業の情報等を提供しました。



小中学校教員向けの企業見学・従業員等との交流会

最上総合支庁
✓ 小中学校等の教員対象に、製造業、福祉、建設業などの地元企業を回る見学会を開催しました。
✓ また、「よりよい職場体験に向けて」と題して、企業の従業員とのワークショップを行い、認識の共有を行っています。



2 情報発信

もがみ仕事の魅力ガイド 配付・活用

最上総合支庁
✓ 最上地域の企業・事業所 80 社の経営者や若手社員の地域や仕事への思い等を紹介した冊子を管内高校を中心に配付、HP に公開しました。
✓ 併せて教員向けの活用集も配付して、進路指導等で活用いただいています。



オーダーメイド工場見学会

新庄中核工業団地企業協議会
✓ 児童生徒、学校が工業団地の企業を容易に見学できるよう、事務局がワンストップ窓口となり、積極的に見学を受け入れています。



しんじよう商工見本市

新庄商工会議所
✓ 最上地域の企業などが「ゆめりあ」に集まり、自社の技術力・魅力など、住民等に広く紹介しています。



3 次世代人材育成・人材確保

Shin-job

新庄市ほか
新庄市の5中学校で企業を一同に集め、生徒に様々な職業体験を実施。生徒、教員の関心が高く、新庄市以外にも、金山町、舟形町、建設業でも実施している。



女性従業員と女子高生とのトークセッション

最上総合支庁
最上地域の女子高生は卒業後、県外移動する割合が大きい。地元で暮らしイメージの醸成のため、年齢が近い女性若手社員が、地元就職のメリットや、日頃の暮らしについてアドバイスをを行う。



もがみを元気にする意見交換会（農業、建設業）

農業士会
建設業協会
最上総合支庁
将来、農業や建設業を目指す高校生、農林大学校生と若手農家、建設会社社員と意見交換を実施。就職後の将来イメージの醸成を図る。



ジモト大学（もがみ地域理解プログラム）

最上8市町村、最上総合支庁等
高校生が地域との関わりの大切さを学ぶことができる。地域の大人との「対話」の場を21プログラム準備。高校生が当事者意識を身に付け、地域への貢献意識を育み、将来なりたい姿、それに向けて勉強する理由をみつめる。



看護・介護人材確保に向けた協議会

最上地域の看護師・介護職員の不足を解消するため、最上地域の関係機関が連携し、地域全体で確保・育成及び定着を推進。



高校生対象医療福祉座談会 進路を考える学習会 高校生対象医療現場見学会

最上総合支庁
小学校から高校まで、医療や介護職を志す子どもを育むための学習会、体験学習会、現場見学会等を開催する。



4 経済支援

看護師育成最上地域修学資金

最上8市町村
看護師を育成・確保するため、最上地域の市町村が統一して、一定の条件により全額返還免除とする修学資金制度を設けている。



学生トライアル雇用奨励金

新庄市、舟形町
大学生、高等専門学校生が夏休み等を利用して、地域の企業で働く場合、企業に資金の2分の1を支払し、企業での就労体験を促す。

図3 オールもがみ若者定着・人材確保に向けたプログラム一覧

様々な取り組みの中で「ジモト大学」、「オーダーメイド工場見学会」2つの事例を報告します。

①ジモト大学 基本コンセプト

「最上地域の高校性を対象に地域課題等に関する住民等との対話や共同等を通じて高校生の主体的に取り組む態度を育成する」

新庄・最上地域の高校生を対象に地元の大人が「先生」となり、地域の魅力を伝え、まちづくりの課題について話し合います。学校では学べない「地元の話」について一緒に考えることで、地域で暮らす、当事者意識を育み、若者の地元定着につなげる事を目指しています。

SHINJO・MOGAMI 地域理解プログラム運営委員会を立ち上げ、企画した「地元（ジモト）大学」は昨年度 11 プログラムが開催され延べ 244 人の高校生が参加しました。

今年度は先生となる大人たちがジモト大学のポロシャツ作る等、意気込みが違います。全 21 プログラムと内容もさらにグレードアップしたことで、延べ 418 名を超える参加者となりました。



図4 SHINJO・MOGAMI 地域理解プログラム運営委員会企画「地元（ジモト）大学」



図5 「ジモト大学」全21プログラム

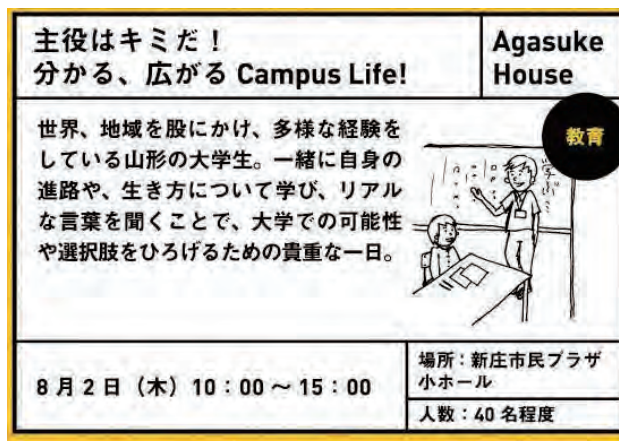


図6 Agasuke House プログラム

◆トピックスとしAgasuke Houseプログラム「主役はキミだ！ わかる・広がるCampus Life!」を紹介しします。※図6参照

開催日時 平成30年8月2日 10:00～17:00

主催 最上地域理解プログラム運営委員会 事務局一般社団法人とらいや
山形大学 COC+推進室「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」協働人材育成部会

参加者 高校生 15名
Agasuke House 6名（山形大学3名、東北芸術工科大学2名、東北公益文科大学1名）
運営スタッフ 9名

概要

Agasuke Houseが中心となり山形大学、東北芸術工科大学、東北公益文科大学の学生がファシリテーターとなり運営しました。進路について考えると共に大学生活の紹介と交流から大学生活に見える化し将来の不安を取り除くためのプログラムです。

世界や地域をまたにかけ、多様な経験をしている山形の大学生。一緒に自身の進路や生き方について学び、リアルな言葉を聞くことで大学での可能性や自身の進路について選択肢をひろげるための貴重な一日を体験しました。

受講の様子



図1 「ジモト大学」基本ルール
地元のことをよく知ろう！
もっと自分から積極的に語ろう！
共に本気で学ぼう！

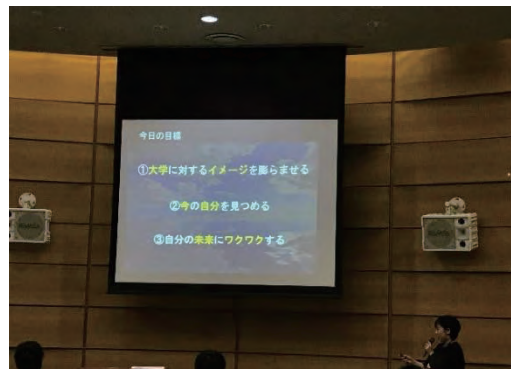


図2 今日の目標
①大学に対するイメージを膨らませる。
②今の自分を見つめる。
③自分の未来にワクワクする。



図3 大学生の自己紹介



図4 学生ブースインタビュー



図5 学生生活のイメージワーク
自分が想像している大学のイメージは？



図6 大学イメージの発表



図7 これからの目標や高校生活について振り返り

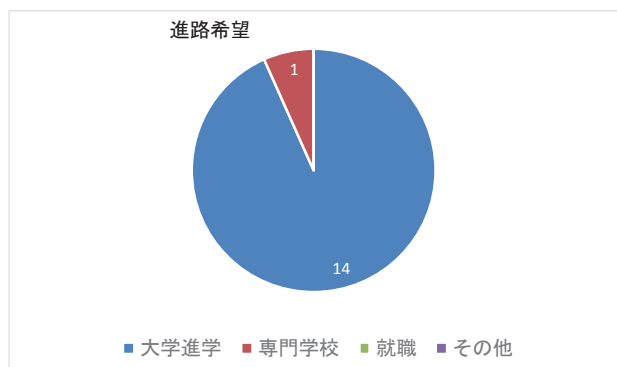
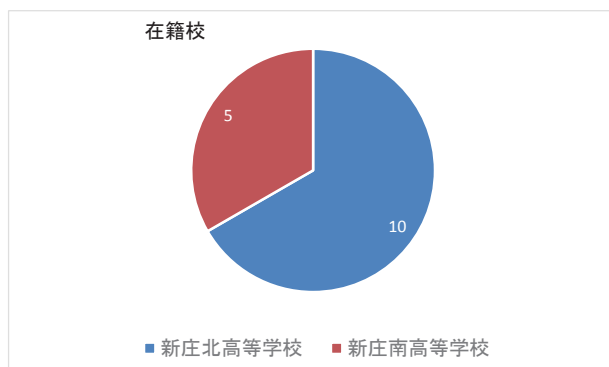


図8 集合写真

参加者アンケート

ジモト大学Agasuke Houseプログラム「主役はキミだ！ わかる・広がる Campuslife！」の参加者に対する事前アンケートと受講後のアンケート結果です。

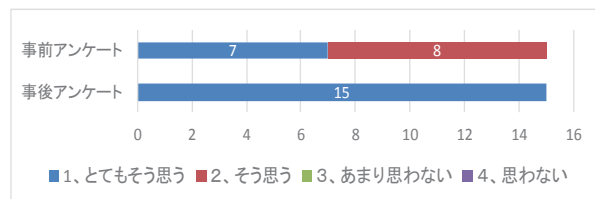
1) 参加者情報



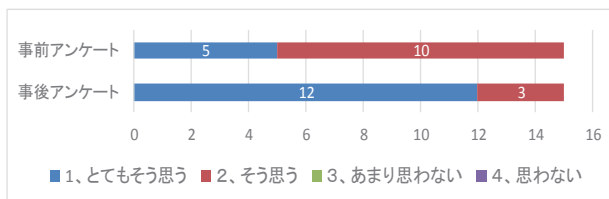
2) アンケート調査結果

(1) プログラム自体に対する評価

① 地域の大人との関わりが、自分の成長につながると思う。

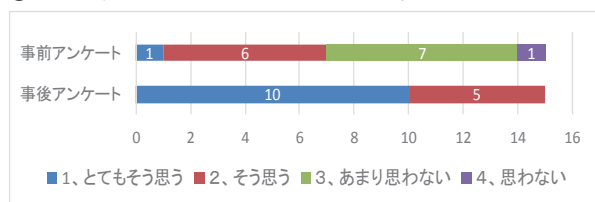


② 地域の大人との関わりが、自分の考えを大きく変えると思う。

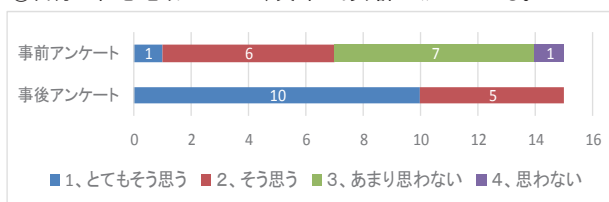


(2) 地域社会への興味と進路決定に対する評価

① 自分の卒業後の進路について、明確な目標・目的がある。

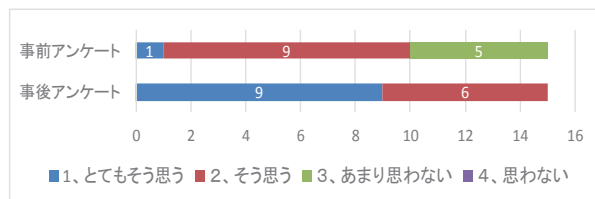


② 自分が住む地域について、興味があり詳しく知っている。

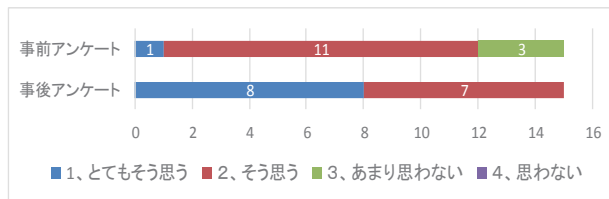


(3) 学校での学びに対する評価

① 自分が高校で学ぶ目的をしっかりと持っている。

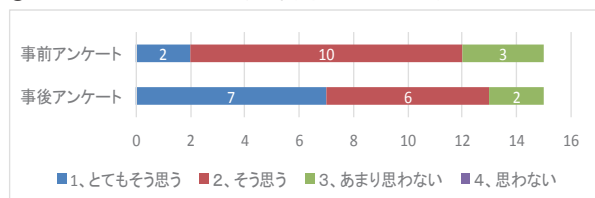


② 自分は高校での学びに意欲的に取り組んでいる。

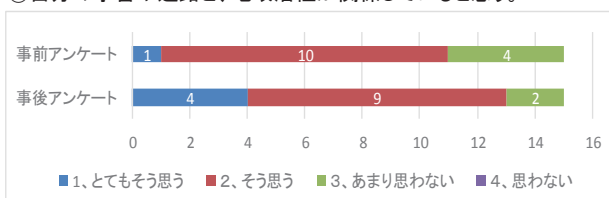


(4) 自己と社会の繋がりに対する評価

① 自分の生活と地域の活動が関係していると思う。



② 自分の学習や進路と、地域活性が関係していると思う。



3) 参加者の声

プログラムを通して学んだこと感じた事 (自由記載)

- ・自分の住んでいる地域をもっと好きになることが大切だと思いました。
- ・大学生がどんな形で地域と関わる活動をしているかを学んだ。
- ・大学生の生活はどんなものか、どんな勉強をしているのかを学んだ。
- ・人との交流が自分を成長させること。
- ・大学では勉強以外の面で学ぶことができること。
- ・人のために尽くし助け合う心が大切であること。
- ・もっと自分の住んでいる地域を理解することが大切だと思いました。
- ・自分の住んでいる地域に自信がもてました。
- ・今回のプログラムを通じて、将来(自分の事)についてもっと深く考えたいと思った。
- ・大学生と関わる貴重な体験を通して自分はどういう人になりたいか考えるきっかけとなりました。
- ・とても良いプログラムでした。
- ・今まで大学や進路についてあまり考えてこなかったのが、大学生の声を聞いてとても参考になりました。

- した。
- ・大学生の意見を実際にきくことができる貴重な場だと思うので今後も続けていくべきだと思う。
 - ・改めて自分の将来を考える事ができました。大学のイメージを膨らませる事、好きなことを大切にすることを学びました。

4) 参加した大学生より

高校生に「リアル」な「大学・大学生」の姿を届けたい、自分の「可能性」を感じて「未来」にワクワクして欲しい。そんな思いから始まったこの企画、参加してくれた高校生の心に何か少しでも響いてくれれば！

高校生へ向けた大学生による熱いトーク、自己理解を深め自分の未来を考えるワークショップなど、内容盛り沢山の一日となりました。今回の目的である「大学・大学生」のイメージを広げることが出来たのではと思います。参加する前と後で自分の成長を感じられた価値のある一日を過ごしてくれたと思います。次年度はさらにパワーアップしたプログラムをお届けします。

②オーダーマイド工場見学会

大学生の就職先の選択は学生にとって重要ですが、就職先を決める情報が限られており、特に、多くの県内企業は学生やその家族にとって知る機会が少ないため、結果として県内企業に興味を持つ機会もなく、特徴ある県内企業の魅力が伝わっていないのが現状です。

この状況を打開し、学生に県内企業の魅力を伝えて頂くために、新庄中核工業団地と連携し、小学生、中学生、高校生、大学生と幅広い世代に、また、少人数からワンストップで対応可能な体制整備を行いました。

概 要

開催日時 平成30年9月27日

主 催 山形県最上総合支庁、㈱フィディア総合研究所 山形大学COC+推進室
経済産業省 東北経済産業局

「平成30年度東北地域中小企業・小規模事業者人材確保・定着等支援事業」
山形大学「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」協働人材育成部会

参加者 山形大学工学部システム創成学科 57名

工 程

	企業1	昼食 (企業1の会議室利用)	企業2	企業3	対話タイム (企業3の会議室利用)
	11:20～ 12:05	12:05～ 12:50	13:00～ 13:45	13:55～ 14:40	14:40～ 15:20
グループ①	山形メタル		KEB ジャパン	新庄エレメックス	
グループ②	新庄エレメックス		ヨコタ東北	ヤマトテック	
グループ③	エッサム		新庄エレメックス	山形メタル	
グループ④	山形東亜DKK		ヤマトテック	マスコエンジニアリング	
グループ⑤	ヨコタ東北		マスコエンジニアリング	山形東亜DKK	



図1 ヤマトテック様
工場見学前のガイダンスの様子



図2 マスコエンジニアリング
工場見学の様子



図3 山形東亜 DKK 様
工場見学の様子

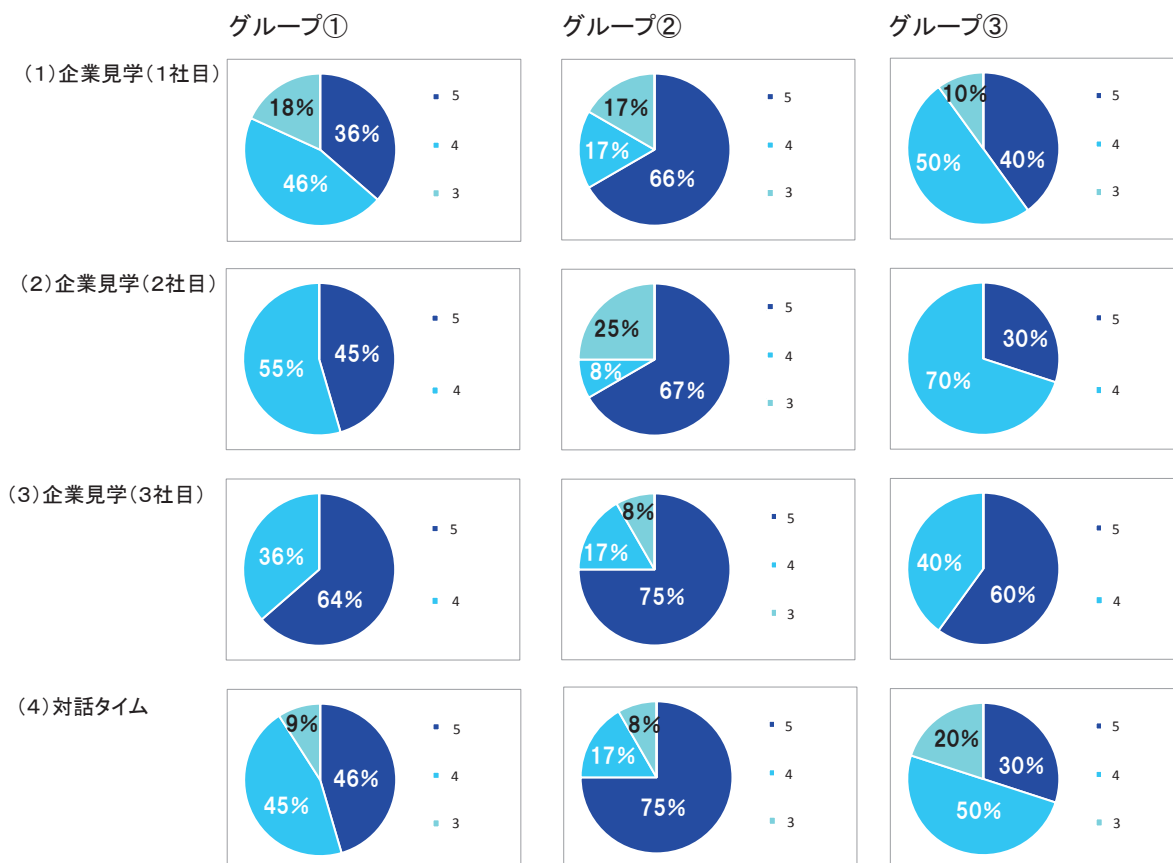


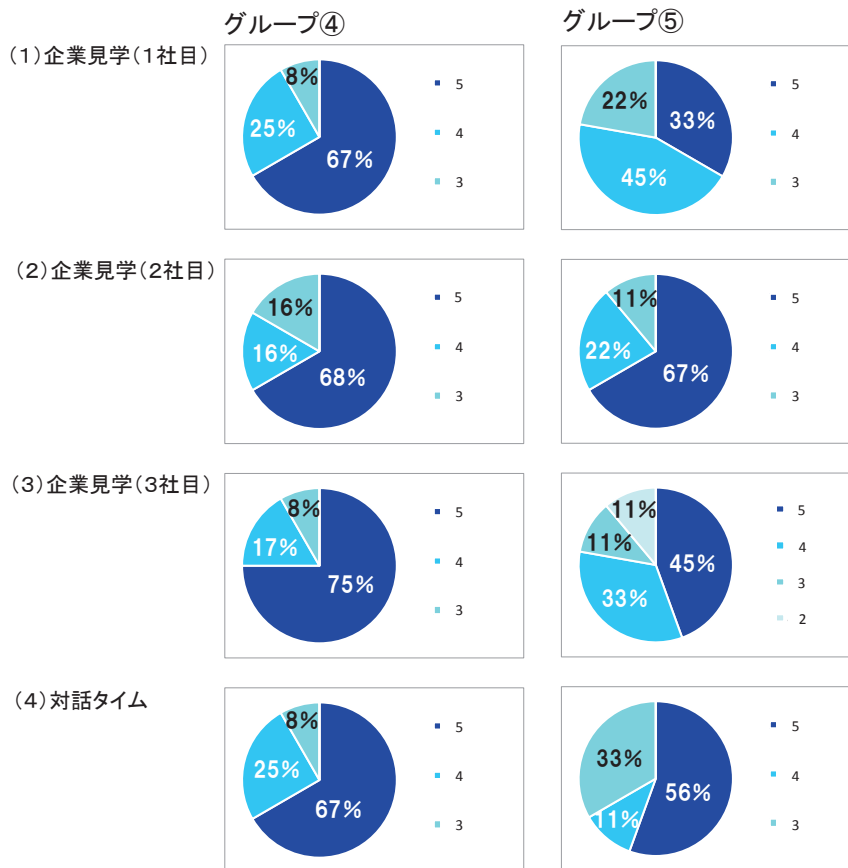
図4 マスコエンジニアリング
対話タイムの様子

参加者アンケート調査結果

企業見学を行った3社と対話タイムに対しグループごとにアンケート調査を行いました。

1) 満足度調査 満足 5 4 3 2 1 不満 (5段階評価)





2) 参加者の声

【企業見学・意見交換会に参加しての感想】一部を抜粋

- ・これから専攻を決める上でとても役に立った。
- ・山形県内にある、世界有数の企業を知る良いきっかけとなった。
- ・私たちが知らないだけで県内にも優良な企業がたくさんあるという事を知れてよかった。
- ・地元の中小企業について様々なことを学べたので就職を考える際に参考にしたい。
- ・普段見られない工場の中を見学することが出来てよかった、これからの進路を選択していくうえで今日のことを活かしていきたい。
- ・見学をして新しい分野に興味を持てたまた、地元で働くことのイメージができた。
- ・自分の将来について深く考える機会になり、とても参考になった。

3) まとめ

3月に同様の工場見学会を開催しました。参加した学生の評価は高く、好評を得ましたが参加者が6名と学生への「告知・募集方法」が課題となりました。今回は反省を踏まえてシステム創成学科長に協力を要請し、授業へ組み入れる形で一学年全員参加の形を作ることが出来ました。アンケート調査にも表れているように参加した学生の満足度も高く、次年度の開催へ繋がったことは一つの成果といえます。

また、今年度は他に企業の協力を得て1ヶ月半にわたる「有償インターンシップ」に取り組みました。参加した学生は長期間会社の中にいることで社内の雰囲気や仕事の内容などよく理解できました。学生・企業ともに満足度の高い成果を得たことで次年度も地元出身学生に対し募集を行います。

地域でこのような取り組みを推進していく中で、今回地元企業から3年前に開催した「リーダーシップ論」を受講した県外出身の工学部の学生が工場を見学し、社長の話を聞いたことがきっかけで「今年就職してくれました」とうれしい知らせがあり関係者の励みとなりました。

すぐに結果が出る事業ではありませんが「種まき型」の事業として地域で継続する仕組みをつくることが重要です。

6. 2 地域創生関連授業による地域課題への取組

1. 基盤教育科目「地方で考える(山形から考える)」1年前期

(1) 授業概要

担当 COC+推進室 東山禎夫

テーマ：人口減少先進地の山形県で現在抱える課題解決に向けて、若者の視点から産業のありかた、人の生き方を考えながら、豪雪地帯である戸沢村を事例にとり、戸沢村の魅力や課題を発見して、解決策を提示するとともに、地域の活性化、地域創生の方法について探る。

キーワード：少子高齢化、地方創生、課題解決、アイデアの創出、グループプロジェクト

受講生 27 名（人文社会科学部 10 名（内留学生 2）、短期留学生 5 名、地域教育文化学部 2 名、理学部 1 名、医学部 2 名、工学部 8 名）

外部講師：戸沢村役場総務課課長補佐 清水利枝子氏（戸沢村の現状と課題）

戸沢村訪問：1 回目：村の施設訪問 メガ団地、ポンポ館、バナナ館、廃校舎、移住者用住宅
2 回目：戸沢村住民の前でのプレゼンテーション、最上川舟下り、幻想の森

表 1 授業日程

第 1 回	山形に住むこと
第 2 回	地方の問題を考える、少子高齢化
第 3 回	少子高齢化・アイデア創出法
第 4 回	戸沢村の現状と課題の特別講義
第 5 回	解決すべき町の課題を取り上げる
第 6・7 回 (1 日)	戸沢村探訪
第 8～10 回	村の課題解決のグループ討論
第 11 回	提案用パワーポイント作成
第 12 回	発表練習
第 13 回	パワーポイントの修正
第 14 回	戸沢村ポンポ館において 提案のプレゼンテーション
第 15 回	授業の振り返り・アンケート記入



図 1 戸沢村役場総務課課長補佐 清水利枝子氏の講義（平成 30 年 5 月 7 日）

(2) 少子高齢化の現状と課題

最初の 4 週は座学である。少子高齢化の実情を学び、地方の人口減少の理由を考え、顕在化している問題を共有するとともに、地方の若者はなぜ首都圏を目指すかについて考えた。

豪雪地帯の戸沢村の課題を知るために、村役場の総務課清水課長氏による講演で戸沢村の現状を紹介してもらうとともに、(1) 人口流出を防ぐ方法、(2) 温泉、畑のメガ団地、養豚場の 3 つの施設を組み合わせた活用法の二つの課題を提示してもらった。学生たちはグループに分かれて、グループごとに取り組む村のテーマを決定した。

(3) フィールドワーク

村の課題に関する講義の翌週に戸沢村の現状を自分の目で確かめ、村の課題を実感するために、大学からバスで1時間40分の戸沢村を訪問した。最初に村役場会議室で元産業振興課長の阿部和雄専門員から、村の産業施策、特に農業振興についての説明を受けた。その後、畑のメガ団地予定地、小学校廃校舎、移住者用住宅、温泉熱を利用したバナナ栽培用ハウス、温泉施設ポンパ館を見学した。



図2 戸沢村探訪での施設見学（平成30年5月19日）

(4) グループ活動

28名の学生を出身地、学部、性別に偏りがないように、7班に分けて、講演後、それぞれの班で取り組みたい課題を話し合いにより選んだ。グループワークで解決案のアイデアを出し合うことで



図3 グループでアイデアの創出とグループ討論および教室でのプレゼン練習

7つのグループがそれぞれ3種類の解決案を考えた。

提案内容をパワーポイントスライドにまとめ、戸沢村ポンポ館の研修室において、村長、町役場担当者、村議会議員、地域おこし協力隊員、村民など計20名の前で発表を行った。この発表会において、村人からの質問や意見をもらうとともに、提案内容に対する評価を受けた。高い評価の割合が多い順に並べたものが図6である。村民が期待していて評価が高いものは既存の施設を利用した内容の提案であり、学生は新規に始める内容を高く評価していることがわかる。



(a) 渡部秀勝戸沢村長の挨拶



(b) パワーポイントによる提案



(c) 研修室での発表



(d) 村の人による評価

図4 戸沢村ポンポ館研修室での課題解決の提案（平成30年7月21日）



図5 プレゼンテーションの後の最上川舟下りと幻想の森探訪

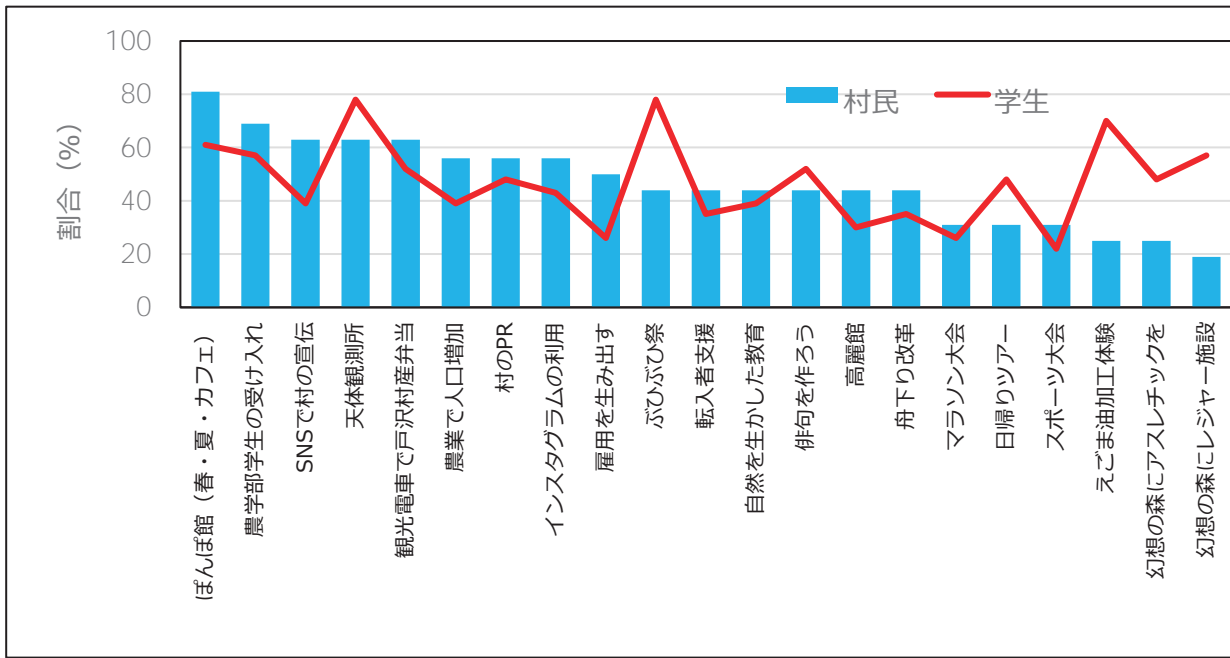


図6 5段階評価で村民により4と5の評価が得られた割合が高い順に並べた提案項目

(5) 学生の感想と自己評価

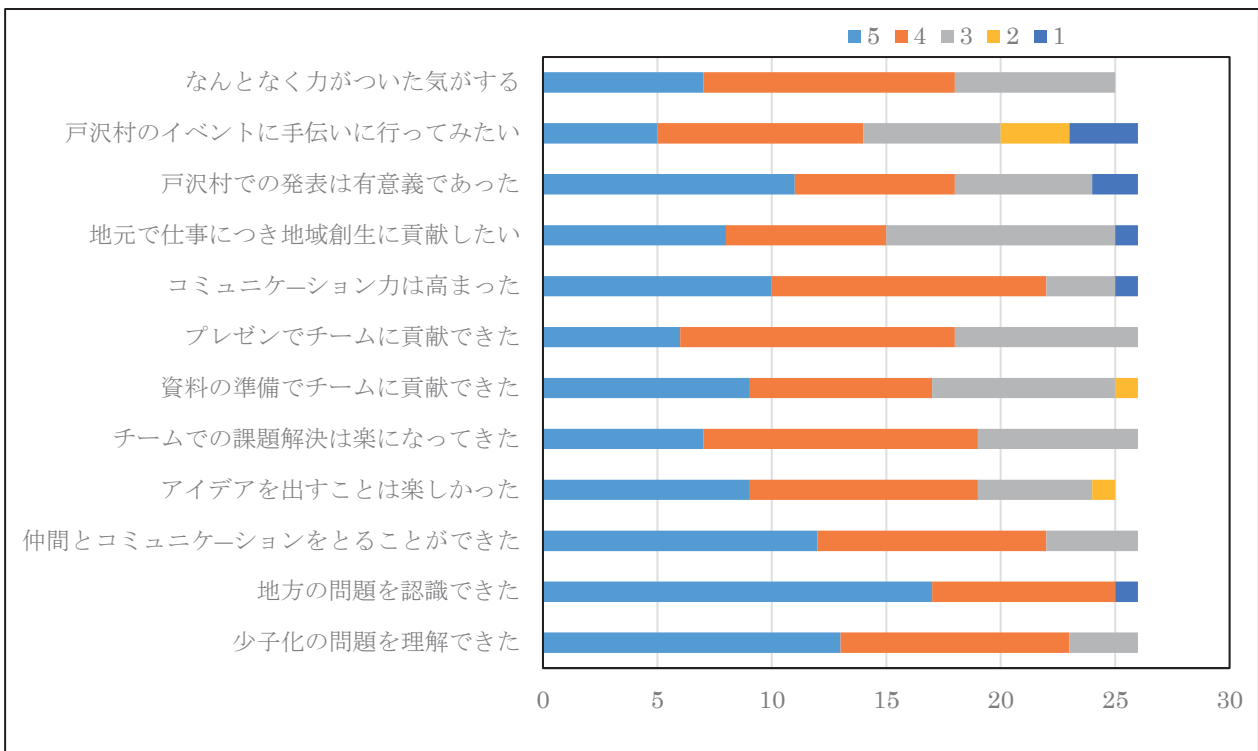


図7 授業後の自己評価

(6) 受講学生の感想

【グループワーク】

- ・初めてグループワークの形で地域の発展に関することをするので、とても新鮮な感じがあります。グループの皆と一緒に課題の解決を考える過程の中で、コミュニケーション力や考え方が変わりつ

つあった。改善すべき点については、個人的には先生はもっと入ってくればいいと思います。

- ・留学生とのグループワークは今後の人生で貴重な体験になると思うので、とてもありがたい。
- ・グループ分けで様々な立場、出身の人とグループになったので、いろいろな考え方、アイデアが聞けてよかった。
- ・この授業はとても有意義だと思います。チームワークとか戸沢村の探訪とか楽しかったです。
- ・自分の意見を発信しながらも相手の話を聞くことが授業前よりも上達した。
- ・この授業を受けて、出身地や思考の違った人との交流から様々なことに気付くことができた。戸沢村の問題がどこにあり、何が問題なのかを考えさせるようにした方がもっと色々なことを戸沢村に発表できたと思いました。
- ・将来経験するであろうグループワークからプレゼンテーションや実際の自治体に発表することをこの講義で経験できて本当に良かった。
- ・今授業を通じて、戸沢村のことをわかるようになりました。将来、地元で自分の力を貢献したいと思いました。

【戸沢村での解決案の提案】

- ・自分の村の課題を改めて確認できてよかったです。また、いろいろな視点からの解決策をきくことができたのが、住民としてよかったと思いました。知っているつもりでも自分の村についてはよく知らないこともあったので、もっと多くの人に聞いてもらいたかったです。（戸沢村出身の学生）
- ・各グループに対する課題はもっと具体的になるのはいいかもしれない。例えば、村の住民は今あるものを活用したいという意見からわかった。これに対して、ポンポ館や廃校舎どのように活用できるかというのを課題にするのはどうでしょうか。
- ・自分たちではいいアイデアだと思ったことについて戸沢村の方々に批判されたことで、自分の価値観が揺らぐような新鮮な経験をすることができた。
- ・実際に村を訪ねてから課題解決を出したりすることで行かないでイメージだけで考えるのとは大きな差があり、とても有意義な学習になった。また、他学部だけにとどまらず、留学生との交流を通じて多様なアイデアがふくらんだので、よい経験になった。戸沢村に実際に行き、地元の人たちの意見をたくさん聞いて、やはり、現地に住まないとわからないことが多かったと感じた。逆に、住んだことがないことによって、現実的でないことも提案できたり新しいことを思いついたりして、全く別の見方をプレゼンできたのではないかと思った。
- ・もう少し村の現状をよく体験してから（あと1回ほど訪問を増やす）、プレゼンをしたかった。
- ・実際に戸沢村の人に意見をもらい、自分たちの詰めの甘さを実感した。しかし、今後のプラスになるような意見を多く得られたので、有意義だと感じた。
- ・プレゼンテーションの時間やスライドはもっと多くてもよいと思った。

(7)まとめ

15 週の授業の中で、山形県戸沢村を対象にして村が抱える課題の解決提案にグループワークにより取り組んだ。村役場の担当者の話を聞き、実際に村を訪問することで、少子高齢化の真っただ中の地方の実際の状況を肌で感じることができ、また、村の持つ魅力も感じる事ができた。グループワークでは学部が異なり留学生も混じった班編成で、議論の進め方、アイデアの変容、意見を聞くこと、妥協することなど多くのことを学ぶことができていた。ただ、提案する内容は、無責任なものではなく、自治体が実際に活用したいと思わせるものを提案していく必要がある。

2. 「雪国で考える(山形から考える)」基盤教育科目 1年後期

(1) 授業の概要

担当 COC+推進室 東山禎夫

受講生 32名 (人文社会科学部 5名、地域教育文化学部 7名、医学部 4名、工学部 12名、留学生 4名)

テーマ：雪国が抱える課題解決に向けて、産業のありかた、人の生き方を考えながら、豪雪地帯である大石田町を事例にとり、若者の視点から地域の活性化、地域創生の方法について探る。さらに、雪の性質を理解し、雪問題について把握したうえで、高齢者宅の除雪ボランティアを行う。

キーワード：雪国の生活、少子高齢化、地方創生、課題解決、アイデアの創出、除雪ボランティア

外部講師：大石田町まちづくり推進課政策推進主幹 土屋弘行氏、同政策推進主査 佐々木洋平氏

大石田町訪問：1回目 雪囲い実習、流雪溝、水汲み上げポンプ場、町内の街並み、駒籠水駅跡

2回目 大石田町民の前での課題解決案の提案、駒籠地区での除雪ボランティア

表1 授業日程

第1回	山形に住むこと
第2回	雪国の問題、雪の科学
第3回	利雪・克雪・親雪
第4回	雪処理の課題
第5回	大石田町の現状と課題を聞く
第6回	ブレインストーミングにより町の課題に取り組む
第7・8回	大石田町訪問
第9～11回	課題解決案パワーポイント作成
第12回	教室で提案プレゼンテーション
第13回	発表資料のブラッシュアップ
第14回	大石田町で発表・除雪ボランティア
第15回	授業の振り返り、アンケート記入



(a) 講演を聴講する学生

図1 大石田町役場まちづくり推進課職員による村の課題についての講演

(2) 雪を知る

最初の5週は雪国、雪の科学、雪処理に関する座学である。除雪ボランティアに備えて、雪の物理的性質を理解するとともに、屋根雪や道路の除雪、屋根雪処理に伴う事故などの多さ、克服すべき課題を学んだ。

(3) 地域の課題を知る

豪雪地帯の大石田町の課題を知るために、大石田町役場まちづくり推進課職員による講演で



(b) 政策推進主幹 土屋弘行氏



(c) 政策推進主査 佐々木洋平氏

町の現状を紹介してもらうとともに、少子高齢化の問題を共有した。講演後、32名の学生を出身地、学部、性別に偏りがないように、7班に分けて、それぞれの班で取り組みたい課題を考えた。

(4) フィールドワークで町を知る

大石田町の課題について講義を受けたその週の土曜日に、バスで1時間10分の大石田町を訪問した。最初に、大石田町住民であり、除雪ボランティア協議会の二藤部久三氏宅の車庫において、雪囲いコンテストについてのスライドを見た後、雪囲いを作る木を固定するための縄の結び方を学ん



(a) 雪囲い作成時の縄の結び方を町の人から学ぶ



(b) 実際の雪囲いを間近で鑑賞



(c) 大石田町名物の来迎寺在来種そばで昼食



(d) 道路脇の流雪溝の説明を受ける



(e) 最上川から流雪溝用の水をくみ上げる地点



(f) 駒籠地区水駅の跡で学芸員から説明を受ける

図2 大石田町訪問(平成30年11月10日土曜日)

だ。その後、民家の庭先で樹木の雪囲いを観察した。開店直後の11時に予約することで、大石田名物のそばを味わうことができた。昼食後は、新幹線の停まる大石田駅を經由して、町の通りを歩きながら流雪溝の構造や深さをつぶさに見て、最上川の堤防にある流雪溝用の水の汲み上げポンプ小屋付近から川の流れを観察した。

(5) グループ活動(グループ討論、パワーポイント作成、プレゼンテーション・質疑応答)と感想

大石田町の課題解決のために、何が問題なのかを考え、それを解決するためのアイデアをグループで出し合った。グループによる話し合いを経て、パワーポイント資料を作成し、教室でプレゼンテーションの練習を行った後、さらにアイデアと提案内容を検討して、1月26日の町民の前での発表に臨んだ。



(a) グループでアイデアの創出と議論



(b) パワーポイント資料の作成

図3 大石田町の課題に対する取り組み

(6) 町での課題解決案の提案と除雪ボランティア

大石田町役場および社会福祉協議会との打ち合わせを通して1月26日に除雪ボランティアを実施した。小白川キャンパスを8時10分に出発し、9時半から大石田町虹のプラザリハーサル室において、町長、町役場職員、町議会議員、住民の前で課題解決に対する提案を行った。提案に対しては、町民からの意見や質問を受け、提案内容に対する5段階評価を受けた。提案終了後、除雪作業を実施する駒籠地区に移動し、駒籠地区公民館において区長から歓迎のあいさつを受けたあと7班に分かれて老人会の皆さんが用意した引っ張りうどんと手作りの漬物を食べながら交流を行った。



(a) グループごとにアイデアを発表



(b) 町長をはじめ町民の評価を受ける

図4 大石田町 虹のプラザでの課題解決案の発表(平成31年1月26日土曜日)

昼食後はスノーバスターズの皆さんや地区の人たちと共に、3班に分かれて2軒の高齢者宅の軒先まで届く雪の片づけと県道にたまった雪の除雪作業を行った。県道沿いの雪はスノーダンプで運び、流雪溝の網の上で細かくしてから落とす作業を続けた。流雪溝の水を流す時間が制限されており、1時間延長して作業を続けた。今冬は165 cmを超える積雪となり、やりがいのある除雪作業となった。



(a) 鍋を囲んで公民館で地元の人達と交流



(b) 引っ張りうどんと漬物で交流



(c) 除雪作業への出陣式



(d) 高齢者宅の除雪



(e) 県道沿いの雪を片付ける



(f) 県道沿いの宅地内の雪を流雪溝に流す

図5 除雪ボランティア (平成31年1月26日土曜日)

(7) 学生の提案結果と授業に対する感想

7 班の学生グループから合計 16 種類の課題解決提案が行われた。町民からの評価が高いのは「ゆるキャラ」、「食べ歩きグルメ」、「音楽フェス」で、実現可能な提案に対して評価が高く、多くの費用がかかるものやすでに身近にあるものにはあまり魅力を感じていないことがわかる。一方、学生は旅行プランやタクシーなど、提案内容の比較案が検討してあるものに対する評価が高く、「音楽フェス」や「除雪タイムアタック」など屋外での活動に魅力を感じていることもうかがえる。

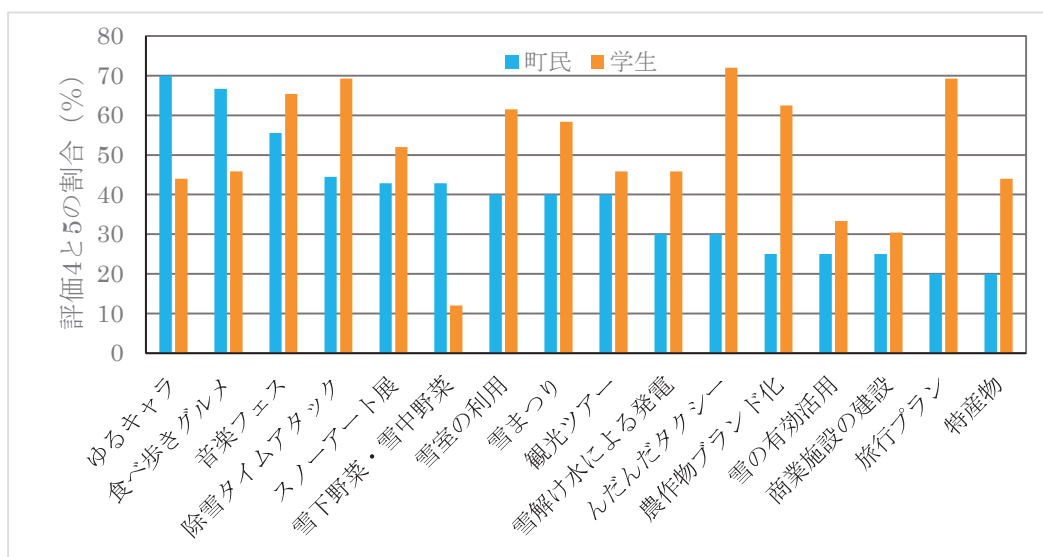


図6 5段階評価を行った町民の評価の高い順に並べた課題解決提案（学生30名、町民10名）

【グループ活動について】

- ・新しいことを考える難しさとすでにあるものを少しずつ変える大切さである。すでに存在するようなものでは意味はなく、新しいものを考えるということを常に意識していた。それは、とても難しく何をすればよいか分からなかった。しかし、「すでにあるものを少しずつ変える」ということを言われ、私たちは「タクシーを変えていこう」という結論に至った。すると次々とアイデアが湧いてきて、すでにあるものを少しずつ変える大切さに気づいた。
- ・大石田町の課題解決のグループワークを通して感じたことは、独創的なアイデアを出すことの難しさであると思った。すでに他の市町村がやっている対策やイベントを模倣するのではなく、大石田町の特徴、大石田町にしかないものを考え、新しいアイデアを捻出するということは、自分一人だけで考えなければならないという状況では難しいものであると思う。しかし、グループのメンバー全員でアイデアを出し合い、自分の考えていたこととは違うアイデアを見聞きすることで、「そんな視点もあったのか。」という自分だけで考えていては思いつくことのできない新鮮なアイデアを知ることができた。
- ・留学生の意見を聞いたり雑談をしたりという時間は良い経験となった。さらに、その解決案を実際に大石田町の方々に発表するというゴールがあったのもみんながより本気で課題解決を図った要因であると思う。現実性を帯びない突発的な案などはこのために排除され、私たちの班ではより現実性のある四つの案を発表させていただいた。それに対する役員の方達の質問も本気でなんとかしようという気持ちが伝わり、本気で考えたかいがあつたと感じ、嬉しかった。
- ・私が「雪国で考える」の授業を通してグループでディスカッションし、プレゼンテーションするという経験を通して得たものは二つある。一つ目は問題の解決に向けて論理的に考えていく姿勢

だ。大石田町が困っていること、その原因、解決策と一から自分たちで考えることで、筋道を立てて論理的に考える重要性を知った。なにかアイデアを出すとき、そのアイデアはどうして必要で、どんなメリット・デメリットがあるのかというように、根拠をつけて議論することができた。一つの事柄に関して何度も深く考えることでより良いアイデアを出すという楽しさにも気づくことができた。

二つ目は、深く考えることの重要性だ。大石田でのプレゼンテーションの発表会で、地域の方々から鋭い質問が多く寄せられた。正直、地域の方々から鋭い質問がたくさん出るので面食らってしまった。私たちが良いと思ったアイデアと町民の方が良いと思ったアイデアには差がある。私たちが大石田町の実情について深く理解していないという理由が考えられるが、もっと掘り下げて考えるべきだったと感じた。大まかなアイデアだけ出して、細かいところは町に投げ捨てるのではなく、経費や材料、時間などについてもっと詳しく考え、実現可能かどうかをもっと考えればもっと良いアイデアにできたのではないかと反省した。

【除雪ボランティアについて】

- ・除雪体験作業は、 -1°C でも汗をかくくらいとてもやりがいのあるものだった。低い位置に積もっている雪の方が固く、除雪するのに一苦労だった。さらに、雪を効率よく運ぶ作業が私にとって最も難しく、コツを掴むのに時間を要した。除雪をする中で、他の班の人たちとのコミュニケーションを取ることもでき、大変やりがいのある作業だと感じた。
- ・雪かきにやりがいを感じたことである。たまに大規模な雪かきを行ったからだと言われてしまえばそれまでだが、ほぼ全員が「あそこもきれいにしたかった。」「また来たい。」と言っていたことも事実だ。雪かきの最中もゲームのように競う場面が見受けられ、時間があつという間に過ぎていった。このように、他の班も触れていたが雪かきを楽しいものにしていくことは有効であると感じた。
- ・今回、除雪ボランティアを行った高齢者の方の家を見て思ったことは、大石田町のような豪雪地帯で一人暮らしのご老人が毎日のように雪かきをするということは非常に困難なのではないかということだ。定期的に雪かきをすれば、窓が隠れてしまうほど雪が積もってしまうことはないが、高齢者の方はそれをするのが難しい方が多い。そういった高齢者の方々の助けになるためにも、今回のような除雪ボランティアや大石田町のスノーバスターズのような団体が必要不可欠なのではないかと思った。
- ・除雪作業を通じて除雪の大変さ、また楽しさを感じることができた。中でもスコップを用いて雪を下ろす作業はいつも使っていない筋肉を用いたので疲れやすく、腰も時間が経つにつれ痛くなり、休憩がなくては続けられないほどであった。慣れていないとはいえ若者の自分でもこれだけ疲れるのだから高齢者の方は腰を痛めたり、怪我などのリスクがあったりと非常に危険だと感じた。
- ・実際に訪問して大石田町の皆さんの優しさや暖かさを感じることができ、除雪を楽しく終えることができた。お昼の交流会では方言についてなど大石田町でしか聞けない貴重な話を聞くことができ、自分の人生の中の宝物になった。

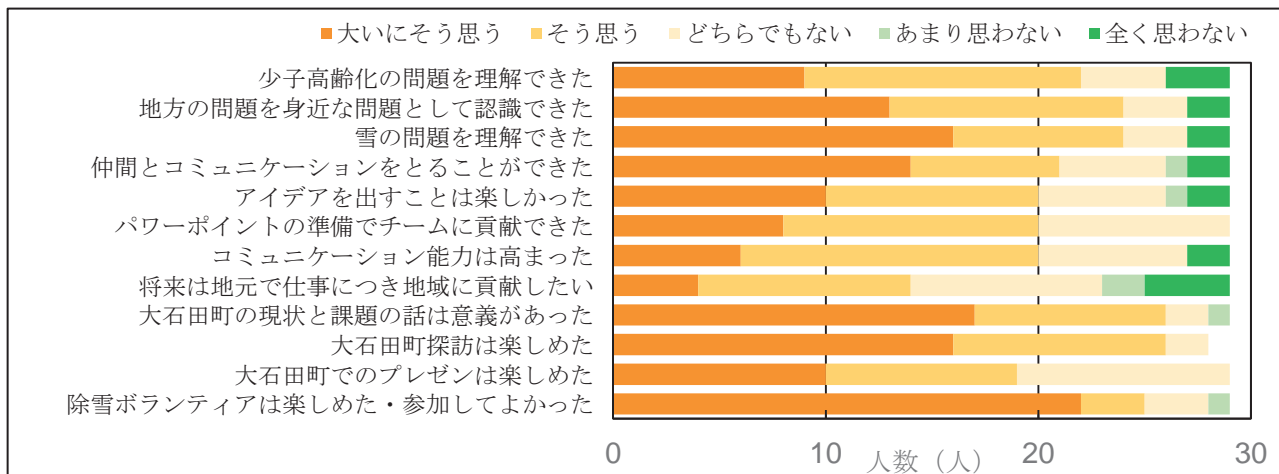


図7 講義後の自己評価

(8)まとめ

雪の密度や結合力などの物理的性質を知ったうえで、雪国に潜む屋根雪や道路の雪の問題を把握し、豪雪地帯の大石田町で除雪作業を行った。除雪ボランティアを行う過程で、大石田町の課題、特に雪に関わる問題解決や町を活性化するための方策について4～5人編成でグループワークを実施した。グループワークではグループの仲間の性格等に議論の進行具合や提案内容が影響を受ける。引っ込み思案でリーダーシップを取りにくい学生が集まる場合の議論をどのように進めるかは課題ではあるが、全体にグループワークの面白さ、アイデア出すことについて新しい発見をした学生は少なくなく、今後の学生生活や社会人になってからの生き方にも影響を与えることができたように感じる。多くの学生が除雪作業を楽しんでいた大きな要素は、単なる作業ではなく、昼食時の地元の人との触れ合いや多くの仲間とコミュニケーションをとりながらの作業であったことがあげられる。今後も、このような形態での授業を実施して、地域に対する関心を喚起していく必要がある。

7 大学生と高校生との協働活動（高大連携事業）

－平成30年度普通科高等学校におけるキャリア教育事業－

1. 目的

山形県においては高校卒業後県外に進学する割合は、大学進学者が約73%となっており、県外進学割合が非常に高く、少子高齢化が進む中、大きな課題となっている。このため、大学進学を希望する普通科高等学校生徒に対し、県内各大学と連携し、希望する学部・学科の大学生と共に学ぶことにより地域や大学の魅力に気づくことで、県内各大学への進学を促進し、卒業後は山形県の学術・産業分野を支え、活躍できる人材育成をめざすもので、山形大学COC+推進室および山形県教育委員会が主催し、山形大学校友会の支援を受けた。

2. 募集方法

山形大学をはじめとする県内各大学生との協働活動等により、高校在学中から大学の学びを深く理解し、将来は山形県の為に貢献したいと考えている普通科高校1,2年生で県内大学への進学を希望している生徒とした。県内4地域からのアクセスを考慮して、29年度に実施した山形市内の山形大学小白川キャンパス、米沢キャンパスに加え、鶴岡キャンパスにも会場を設定し、会場ごとに高校生については30名、大学生は山形大学6学部からそれぞれの会場で2名ずつ計6名を募集した。実際には、会場ごとに参加希望の高校生の数が異なり、それに応じて大学生の数も調整した、

表1 3会場の大学生と高校生との協働活動の概要

開催月日	会場 ファシリテータ	参加高校生	参加大学生学部 (3-4年,院1年)	課題	発表方法
2018年 11月23日(金)	鶴岡キャンパス 1号館会議室 農学部 藤井弘志教授	庄内地区 普通科在学学生 33名	地域教育文化2名 人文社会科学1名 理 2名 医看護 2名 工 1名 農 1名 計9名	庄内地域の 課題を見つ けて解決案 を提示	班ごとにア イデアを高 校生が ppt にまとめて 発表
12月23日(日)	小白川 キャンパス 基盤教育3号館 312教室 地域教育文化学部 三上英司教授 滝澤匡准教授	村山・最上地区 普通科在学学生 27名	地域教育文化2名 人文社会科学4名 理 2名 工 2名 計10名	村山地域の 課題を見つ けて解決案 を提示	班ごとに出 したアイデ アを大学生 が高校生に 説明
2019年 1月13日(日)	米沢キャンパス 工学部百周年 記念会館 工学部 立花和宏准教授	置賜・村山地区 普通科在学学生 14名	地域教育文化1名 人文社会科学1名 理 1名 工 1名 計4名	置賜地域の 課題見つけ て解決案を 提示	班ごとのア イデアをビ デオ画像に まとめて上 映

3. 活動内容

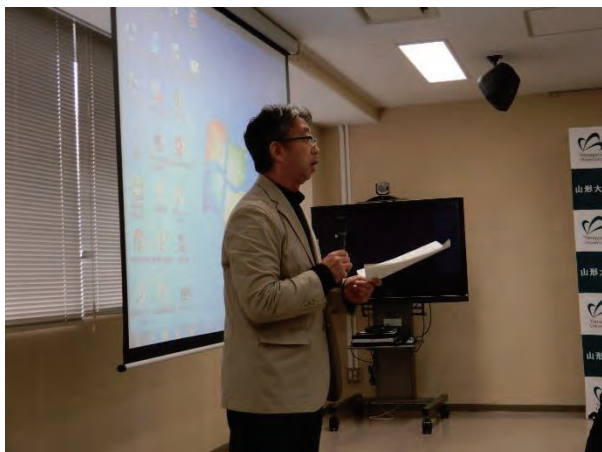
3.1 鶴岡キャンパス会場

平成30年11月23日(金)山形大学鶴岡キャンパスに鶴岡北高校9名、鶴岡中央高校9名、酒田西高校14名の計32名の高校生が集まり、山形大学学生9名が参加した。ファシリテータは農学部の藤井弘志教授でテーマは「庄内地域の課題解決」である。工学部4年生の高橋君の「高校生に送るメッセージと大学生活」についての講演の後、8グループに分かれて地域の課題について話し合い、その解決方法について議論した。昼食時間後、大学進学時の希望学部ごとに分かれ、大学生から高校生

に対し学部の説明を行うとともに、高校生の疑問に答える時間を持ち、大学生、高校生ともに中身の濃い時間を持つことができたようであった。

表2 鶴岡キャンパスの協働活動スケジュール

9:30	10:00	10:50	12:00	12:30	13:30	14:20	15:00	15:50	16:10
受付	開会式 自己紹介 学生生活	地域の 課題解 決	昼食	進学希望分 野ごとに大 学生と懇談	地域の課題 解決	パワーポ イント作 成	発表 7班	閉会式 感想 講評	解散



(a) 藤井教授による協働活動の説明



(b) 工学部4年阿部公一君による大学生活の話



(c) アイデアを出し合う



(b) 進学希望の学科の話聞く



(e) プレゼン資料の作成



(f) 最後に参加者全員で「やったぜ！」

図1 鶴岡キャンパスの大学生と高校生の協働活動（平成30年11月23日）

庄内の課題について5分間のプレゼンテーションができるように、パワーポイントスライドにまと

め、班ごとに高校生がプレゼンテーションを行い、ファシリテータの藤井教授、参加した COC+教員からの質問やコメントをもらい、最後に、班担当の大学生が高校生の活動に対してコメントを述べた。高校生の提案は身近な庄内の問題を的確につかみ、地域おこしのヒントとなる提案が多くみられた。

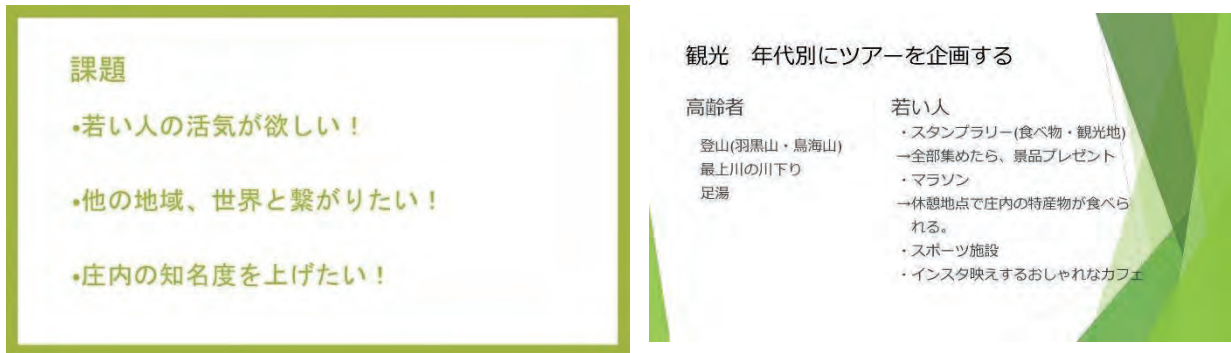


図2 庄内の課題の例と課題解決案の例

3.2 小白川キャンパス会場

平成 30 年 12 月 23 日（日）山形大学小白川キャンパス基盤教育 3 号館において実施した。山形南高校 1 名、山形北高校 3 名、上山明新館高校 14 名、寒河江高校 2 名、東桜学館高校 4 名、南陽高校 2 名、新庄北高校最上校 1 名の計 27 名の申し込みで、大学生 10 名の 7 班編成で実施した。

ファシリテータは地域教育文化学部の三上教授および滝澤匡准教授が務め、最初に、高校生が同じ班の大学生に質問を行って情報を集め、その情報をもとに、A1 判の用紙を用いて先輩新聞を作成した。その新聞を壁に貼り、高校生が他の班の高校生に大学生の紹介を行った。昼食後、大学生から自分の学部の教育や学生生活について懇談した。次に、班ごとに若者に地域に残ってもらうための案をブレインストーミングで出し合い、KJ 法で分類した後、大学生が班で議論したことを他の班の高校生に班ごとに説明し、地域の抱える課題とその解決法を共有した。

表 3 小白川キャンパスの協働活動スケジュール

9:30	10:00	10:10	12:00	12:30	13:30	15:00	15:40	16:10
受付	開会式	先輩新聞作成	昼食	山大学生の流儀	地域の課題を考える	大学生が高校生に説明	閉会式 振り返り・講評	解散



(a) 三上教授による協働活動の説明



(b) 教室内のグループ

図2 小白川会場での協働活動（平成 30 年 12 月 23 日）



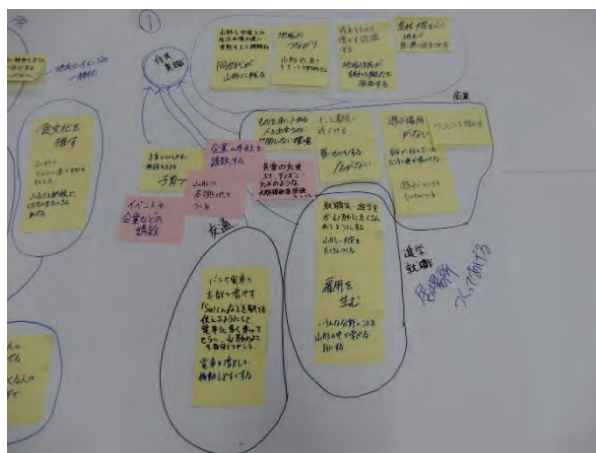
(c) 先輩新聞の作成



(d) 山大生の流儀（学部で学ぶことを知る）



(e) 山大生の流儀（学部で学ぶことを知る）



(f) 地域の課題を考える



(g) 地域の課題を他の班の高校生に説明



(h) 地域の課題を他の班の高校生に説明

図2（続）

3.3 米沢キャンパス会場

平成31年1月13日（日）山形大学米沢キャンパス工学部百周年記念会館セミナー室において、上山明新館高校6名、南陽高校8名、米沢東1名の計14名が参加し、大学生4名の4班編成で実施した。協働活動はTRPG（Table Talk Role Playing Game）の手法を用いて行われた。ファシリテータの立花准教授のオリジナルのシナリオに基づいて、8つのシーンごとに解決すべき課題が提示され、その課題を解決するため、必要な情報をスマートフォンで調査するとともに、解決案を考え出していった。

表4 米沢キャンパスにおける協働活動のスケジュール

9:30	10:00	10:30	12:00	12:30	13:20	14:40	15:30	15:50	16:10
受付	開会式 TPRG 説明	TRPG 課題解決 自己紹介	昼食	学生生活紹介 大学生と懇談	TRPG 課題解決	アニメ 作成	発表 4班	閉会式 感想 講評	解散



(a) 山形県教育庁 井家勝己指導主事の挨拶



(b) 立花和宏准教授による協働活動の説明



(c) 課題についてアイデアを出す



(d) 大学生の活動の紹介



(e) 学部の内容について話す



(f) 学部の内容について聞く

図3 米沢会場での協働活動（平成31年1月13日）



(e) 課題の発表



(f) 参加者で最後のピース

図3 (続)

TPRGでは大学生が進行役を務め、高校生はそれぞれの役を務めながら、その役であれば考えること、話すことを提示し、順にアイデアを出しながら協働活動を進めていった。教育委員会およびCOC+推進室のコーディネータもファシリテータと同様に、それぞれ一つの班に入り込み、高校生のアイデアに対する辛口コメント、老害コメントを吐きながら、アイデアを深めていった。昼食の後、山形大学人文社会科学部3年の松田悠葵君から大学での学生大使の留学経験を紹介し、その後、大学の進学希望学部ごとに分かれて、大学生に学生生活や学ぶ内容についての質問を行った。最後に、出されたアイデアのパワーポイントスライドを作成する代わりに、パソコンのビデオエディター機能を用いてアニメーションを作成し、全員の前で上映発表を行った。

4. まとめと課題

「高校生と大学生との協働活動」を鶴岡、山形、米沢の3会場でそれぞれ、11月、12月、1月に実施した。高校生74名、山形県出身大学生22名と新潟県出身大学生1名が参加し、高校生と各地域出身の大学生が地域が抱える課題と解決法を一緒に考えることで、地域に対する関心を高める機会となった。高校生にとっては進学希望の学部の内容や学生生活を地域の先輩の学生に、直接聞くことで、進学学部を固めることができる良い機会となった。

今後もこの協働活動を実施していくうえでの課題は下記の通りである。

(1) 県内出身学生の確保：山形県内の4地域出身の学生を集めることは容易ではなく、各学部の教育ディレクターの先生には骨を折っていただき、さらに、個人的ないろいろなついでで参加可能な県内出身の学生に参加してもらったのが実情である。高校生にとって地域出身のOBの話聞くことは、親近感もあり身近な先輩から語ってもらうことはロールモデルを間近にみることができるという意味では大きな意味を持つ。ただし、県内出身学生に参加してもらうことが困難な場合には、高校生に刺激を与えることができる県外の元気な学生を募集することも考慮すべきである。

(2) 高校生の希望に対応した学部・学科所属の学生の確保：高校生の希望する学部・学科に所属する大学生が参加することは、高校生にとっては必要な情報を得るという点では非常に重要であるので、高校生が希望する学部の学生を確保する時期と方法を確立しておく必要がある。

(3) 協働活動の持続性：この活動の効果はファシリテータに大きく依存する。人材の確保と高校生の現状に見合った活動方法を検討しておく必要がある。

8. 1 やまがた創生戦略協議会

やまがた創生戦略協議会は、COC+事業（地域と協働して地域を志向した教育プログラムの開発、地元就職して地域の課題解決に資する人材の養成、及び山形県全体の雇用創出と地元就職率の向上を図る。）を審議するために設置されました。

(1) 構成

別紙名簿のとおり

(2) 開催状況

○ 第1回やまがた創生戦略協議会

日時 平成30年7月6日(金)

会場 大手門パルズ3階会議室

議事

1 山形県内入学者・就職者状況について

山形大学横井委員から、各大学・高等専門学校の山形県内入学者及び就職者の状況について委細説明があった。

【本件に関する意見交換】

- ・山形県出身者の入学率が高くなると山形県内就職率も高くなるということは明らかである。(山形県立米沢栄養大学)
- ・山形県出身者を多く入学させると山形県内就職者も多くなることである。入口が重要であることを重視していきたい。(山形大学)
- ・地元企業と一緒に、新庄・最上地区全体で地域を盛り立て、地元で働くことができる仕組みを考えていきたい。(戸沢村)
- ・若者が地域の強みや弱みを知り、先ず地域を好きになることが基本であり、地元に住み続けたいような環境を作ることが行政としての役目だと考えている。(庄内町)
- ・インターンシップ参加学生は、就職内定時期が早く職業意識が高いと考えている。インターンシップを体験し働くということを知ってもらうことは重要である。(東北公益文科大学)
- ・企業側からすれば、学生がなかなか就職してくれないという問題を抱えている。将来を見据える程度人材を確保する必要がある。(山形県工業会)

2 若者の県内定着に向けた取組について 一取組事例報告と意見交換一

(1) 米沢商工会議所「人材育成・労務対策事業の取り組み」

米沢商工会議所総務企画部田中課長から、米沢商工会議所の人材育成と労務対策事業の取組状況について委細説明があった。

(2) 山形県企画振興部 「「オールやまがた若者定着推進会議」等について」

山形県企画振興部佐々木次長から、「オールやまがた人材確保・生産性向上推進協議会(仮称)」を発足する予定である等委細説明があった。

(3) 「地域創生マインド醸成を目指したモデルカリキュラム」

地域教育文化学部三上副学部長から、試行中の地域創生マインド醸成を目指したモデルカ

リキュラムについて委細説明があった。

3 平成29年度大学改革補助金(大学改革推進事業)実績報告について

山形大学横井委員から、COC+事業の平成29年度実績報告について概略説明があった。



協議会の様子



渡部戸沢村長



原田庄内町長

○ 第2回やまがた創生戦略協議会

日時 平成31年3月15日(金)

会場 大手門パルズ3階会議室

議事

- 1 平成30年度地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)の取組について
- 2 若者の県内定着推進について
- 3 平成31年度地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)の事業計画(案)について
- 4 平成31年度地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)の事業予算(案)について

やまがた創生戦略協議会名簿

平成31年3月1日

区分	委員名	
1号委員	山形大学長	小山 清人
2号委員	山形県知事	吉村 美栄子
3号委員	山形市長	佐藤 孝弘
4号委員	米沢市長	中川 勝
5号委員	鶴岡市長	皆川 治
6号委員	酒田市長	丸山 至
7号委員	上山市長	横戸 長兵衛
8号委員	長井市長	内谷 重治
9号委員	西川町長	小川 一博
10号委員	真室川町長	新田 隆治
11号委員	戸沢村長	渡部 秀勝
12号委員	飯豊町長	後藤 幸平
13号委員	三川町長	阿部 誠
14号委員	庄内町長	原田 眞樹
15号委員	遊佐町長	時田 博機
16号委員	山形県商工会議所連合会長	清野 伸昭
17号委員	山形県商工会連合会長	小野木 覺
18号委員	山形県工業会長	松村 栄一
19号委員	山形県銀行協会会長	長谷川 吉茂
20号委員	山形県信用金庫協会会長	佐藤 祐司
21号委員	山形県経営者協会会長	寒河江 浩二
22号委員	山形創造NPO支援ネットワーク代表理事	杉山 宏行
23号委員	山形県立米沢栄養大学長	鈴木 道子
24号委員	鶴岡工業高等専門学校長	高橋 幸司
25号委員	東北公益文科大学長	吉村 昇
26号委員	東北芸術工科大学長	中山 ダイスケ
27号委員	東北文教大学長・東北文教大学短期大学部学	鬼武 一夫
28号委員	山形大学副学長（社会連携担当）	大場 好弘
29号委員	山形大学COC+推進室長	出口 毅
30号委員	COC+チーフ・コーディネーター	横井 博

(敬称略)

8. 2 教育プログラム開発委員会

教育プログラム開発委員会は、地域創生に資する人材育成のために必要な教育科目の開発するために置かれました。平成30年度は、教育科目（カリキュラム）開発の責任学部である地域教育文化学部において地域創生に資する人材育成のために必要な教育カリキュラムを構築し、同科目を履修した学生に学長名による履修認定証を授与することについて検討しました。

1 メンバー（20人）

山形大学副学長（教育担当）、山形大学副学長（社会連携担当）、山形大学COC+推進室長、山形県立米沢栄養大学長が推薦した者1人、鶴岡工業高等専門学校長が推薦した者1人、東北公益文科大学長が推薦した者1人、東北芸術工科大学長が推薦した者1人、東北文教大学長・東北文教大学短期大学部学長が推薦した者1人、山形大学統括教育ディレクター（7人）、山形県COC+事業担当課長、COC+チーフ・コーディネーター、COC+コーディネーター（3人）

2 開催状況

○第1回教育プログラム開発委員会

日時	平成30年5月8日（火）10:30～10:50
場所	山形大学法人本部第一会議室（各学部TV会議室）
出席者	17人（参加大学4人、山形大学統括教育ディレクター6人）
議事	<p>（1）山形大学「地域創生カリキュラム」履修認定について</p> <ul style="list-style-type: none">・資料に基づき、地域連携科目が学部専門科目におかれている地域教育文化学部において、定められた地域創生に関する科目を9科目18単位以上履修した学生に対して、学長名による履修認定証を授与したい旨委細説明があった。・履修認定証については交付に向けて進めることとなった。・地域教育文化学部のカリキュラムをモデルケースにして、他学部でも実施することになった。・地域教育文化学部の授業科目「フィールドプロジェクト」において、地域志向性の醸成効果と学生の社会人力育成効果に関する教育効果の測定を進めたい旨説明があった。



8. 3 協働人材育成部会

COC+事業では、コーディネーターが主催する協働人材育成部会により、地域や企業等と連携して、教育プログラムの開発や地域創生の推進等に取り組んでいます。平成30年度では(平成31年3月2日現在)、本部会を延べ40回開催し、参加人数は1100人余りとなっている。以下に開催概要を、別紙によりその開催一覧を示します。

平成30年度協働人材育成部会の開催概要

協働形態	協働形態					回数	事例
	自治体 集落	企業	大学		他 (高校生、 住民等)		
			教職員	学生、 サークル			
自治体 型	○		○	○	○	23	<ul style="list-style-type: none"> ・山形県キャリア教育事業(大学生と高校生による協働活動) ・30年度科目(地域体験スタートアップ)検討会 ・ジモト大学検討会 ・地域体験スタートアップ報告会 ・庄内町における農学部演習成果発表会
企業 型		○	○	○		9	<ul style="list-style-type: none"> ・30年度科目(山形の森づくり体験)検討会 ・CO-OP教育成果報告会 ・ジモト大学検討会 ・キャリアCafé(工学部、農学部)
地域 型	○	○	○	○	○	8	<ul style="list-style-type: none"> ・オールもがみ若者定着・人材確保推進会議 ・ジモト大学 ・オーダーメイド工場見学会 ・留学生の工場見学
計						40	

平成30年度 協働人材育成部会開催状況

平成31年3月2日現在

No	開催日	開催場所	部会名称	内容	出席人数
1	4月21日	南陽市・上野地内市有林	山形の森づくり体験	フィールドワーク科目「山形の森づくり体験」の事前打ち合わせ	10人 NDソフトウェア社員(10)
2	5月1日	山形市・山形大学	地域体験スタートアップ	科目「地域体験スタートアップ」の実施にむけた打合せ	2人 山形市第八地区社会福祉協議会(2)
3	5月3日	鶴岡工業高等専門学校	春期CO-OP教育成果報告会	学生のキャリア能力向上やCO-OP教育の周知、CO-OP教育プログラムの改善を目的として、実習先の企業を招いての報告会。CO-OP実習成果発表者(7名)と意見交換	約45人 高専・大学(学生15、教員8)[鶴岡高専、公益大、山形大学]／企業(6社、20)、自治体(1)
4	5月15日	山形県最上総合支庁	オールもがみ若者定着・人材確保推進会議開催打合せ	オールもがみ若者定着・人材確保推進会議に関する打合せ	3人
5	5月24日	新庄市民プラザ	オールもがみ若者定着・人材確保推進会議	若者の地元定着と回帰に向け地域が一丸となって取り組むキックオフイベントの開催。県市町村地域づくり団体が連携した取り組み	150人 学生(10)、行政(県・市町村)8市町村の首長、PTA、民間団体(NPO)、企業
6	6月4日	庄内町役場	「庄内町グリーン・ツーリズム推進協議会、山形大学農学部連携事業」開催打合せ	「庄内町グリーン・ツーリズム推進協議会、山形大学農学部連携事業」に関する打合せ	3人
7	6月12日	庄内町清川公民館	庄内町グリーン・ツーリズム推進協議会、山形大学農学部連携事業	学生が3グループに分かれ、地域の皆さんと連携して、地域課題の整理やその解決策の検討等を実習として行う。最後にミニ卒論として取りまとめ、発表会を実施する。食農環境マネジメント基礎実習	30人 学生(16)、庄内町職員(6)、農学部教員(4)、受入地域(3)、COC＋コーディネーター(1)
8	6月15日	米沢キャンパス	新庄中核工業団地工場見学ツアー事前打合せ	新庄中核工業団地工場見学ツアーに関する打合せ	3人 山形大学システム創成工学科教員、最上総合支庁、COC＋コーディネーター
9	7月15日	西川町大井沢	中山間地域の暮らしを考え、発信しよう	ふるさと保全 公共施設の草刈り作業、地域住民と学生の交流	約40人 大学(学生11、教員3)[山形大学、跡見学園女子大学]／集落・自治体等(多数)
10	7月16日	山形県最上総合支庁	ジモト大学「主役は君だ分かる、広がるCampus Life」開催打合せ	ジモト大学「主役は君だ分かる、広がるCampus Life」に関する打合せ	5人
11	7月19日	山形県最上総合支庁	ジモト大学シゴトーク「大学に進んだその先には」工場見学編開催打合せ	ジモト大学シゴトーク「大学に進んだその先には」工場見学編に関する打合せ	5人
12	7月23日	新庄エレメックス、ヤマトテック、山形航空電子	ジモト大学シゴトーク「大学に進んだその先には」工場見学編開催打合せ	ジモト大学シゴトーク「大学に進んだその先には」工場見学編に関する打合せ	5人
13	7月31日	ゆめりあ、新庄エレメックス、ヤマトテック、山形航空電子	ジモト大学シゴトーク「大学に進んだその先には」工場見学編	最上地域の企業に仮入社し大学で学ぶべきこと、大学での研究のこと今からできることを考える。実際に工場を見学し、企業を見ながら先端ものづくり技術をさらに進化させていくために先輩従業員と一緒に学び考えてみよう。	18人 高校性(6)、他企業
14	8月2日	新庄市民プラザ	ジモト大学「主役は君だ分かる、広がるCampus Life」	世界地域をまたにかけ、多様な経験をしている山形の大学生。一緒に自身の進路や生き方に付いて学びリアルな言葉を聞くことで大学での可能性や選択肢を広げるための貴重な1日とする。	40人 agasuke 山形大学(3)、公益(1)、芸工大(2)他
15	8月7日	山形県立新庄北高等学校	ジモト大学シゴトーク「大学に進んだその先には」	最上地域の企業に仮入社し大学で学ぶべきこと、大学での研究のこと今からできることを考える。実際に工場を見学し、企業を見ながら先端ものづくり技術をさらに進化させていくために先輩従業員と一緒に学び考えてみよう。	20人 高校性(12)、新庄エレメックス(1)、ヤマトテック(2)、山形航空電子(2)他スタッフ
16	8月8日	新庄市立図書館	ジモト大学シゴトーク「若手女性従業員のリアルな話」開催打合せ	ジモト大学運営に関する打合せ	8人
17	8月9日	山形航空電子	オーダーメイド工場見学会開催打合せ	「オーダーメイド工場見学会」に関する打合せ	5人 学生(1)、山形航空電子、最上総合支庁地域産業経済課、COC＋コーディネーター他
18	9月5日	南陽市・タ鶴の里資料館	民話語り部体験	フィールドプロジェクト科目「民話語り部体験」のふりかえり	3人 現地講師(3)
19	9月7日	山形県最上総合支庁	東北地域中小企業・小規模事業者人材確保・定着等支援事業最上地域対話形式による企業・学生マッチング開催打合せ	最上地域対話形式による企業・学生マッチングに関する打合せ	8人
20	9月8日	西川町大井沢	中山間地域の暮らしを考え、発信しよう	大井沢秋まつりに参加 ・神輿巡行と夜店、湯殿山神社例大祭前日祭、わくわくドキドキ川遊び体験	約50人 大学(学生11、教員3)[山形大学、跡見学園女子大学]／集落・自治体等(多数)

21	9月9日	西川町大井沢	中山間地域の暮らしを考え、発信しよう	西川町視察 ・月山湖水の文化館、志津温泉、弓張平公園、岩根沢三山神社、月山酒造資料館等 ・跡見学園女子大学生との交流	14人 大学(学生11、教員3)[山形大学] ／集落(3)
22	9月13日	新庄市民プラザ	ジモト大学 シゴトーク「若手女性従業員のリアルな話」	先輩女性の仕事ぶりや暮らしぶりを聞いて ①最上地域で働くこと・暮らすことをイメージしてみる。 ②自分の将来を考えるひんにとにする。 ③そのために自分にできることを考える。	85人 高校生(70)、山大OG(4)他
23	9月26日	山形県最上総合支	「最上地域対話形式による企業・学生マッチング対応企業」開催打合せ	東北地域中小企業・小規模事業者人材確保・定着等支援事業 最上地域対話形式による企業・学生マッチング対応企業に関する打合せ	5人
24	9月26日	山形航空電子、ダイユー、最上世紀	留学生の工場見学	留学生の工場見学「山形航空電子株式会社、(株)ダイユー、(株)最上世紀」	36人 山形県庁(3)、山形大学(4)
25	9月27日	新庄市中核工業団地	最上地域対話形式による企業・学生マッチング	山形大学、最上総合支庁地域産業経済課、フィデア総研連携事業、システム創成工学科1年生を対象とした企業見学会	81人 学生(56)、企業(16)、他スタッフ(5)
26	10月2日	最上電機	「オーダーメイド工場見学会」打合せ	オーダーメイド工場見学会に関する打合せ	4人 最上電機(2)、最上総合支庁地域産業経済課、COC+コーディネーター
27	10月9日	最上電機	オーダーメイド工場見学会	オーダーメイド工場見学会	6人 学生(1)、最上電機(2)、最上総合支庁地域産業経済課、COC+コーディネーター他
28	10月28日	西川町大井沢	中山間地域の暮らしを考え、発信しよう	里山の生活体験-炭焼き-	17人 大学(学生9、教員3)[山形大学、東北文大]／自治体等(5)
29	11月17日	山形市・うめばち子どもの家(学童保育)	民話語り部体験	フィールドプロジェクト科目「民話語り部体験」のふりかえり	3人 うめばち子どもの家職員(3)
30	11月22日	山形大学工学部4号館2階ゼミ室	キャリアCafé(工学部)	工学部学生と県内企業9社の若手OB・OGとの面談会で、企業での仕事や就職活動等について自由に情報交換し合う場	31人 学生9名、OB・OG9、企業の人事担当者8、大学教職員3、運営協力企業2
31	11月23日	山形大学農学部1号館会議室	山形県キャリア教育事業	平成30年度 普通科高等学校におけるキャリア教育事業『大学生と高校生による協働活動』	47人 高校生33、学生9、教員5
32	12月5日	鶴岡工業高等専門学校	夏期CO-OP教育成果報告会	学生のキャリア能力向上やCO-OP教育の周知、CO-OP教育プログラムの改善を目的として、実習先の企業を招いての報告会。CO-OP実習成果発表者(6名)と意見交換	約25人 高専・大学(学生6、教職員7)[鶴岡高専、公益大、山形大学]／企業(3社、10)、自治体(1)
33	12月13日	山形大学工学部4号館2階ゼミ室	キャリアCafé(工学部)	工学部学生と県内企業13社の若手OB・OGとの面談会で、企業での仕事や就職活動等について自由に情報交換し合う場	49人 学生19、OB・OG13、企業の人事担当者9、大学教職員6、運営協力企業2
34	12月14日	山形大学農学部3号館201教室	キャリアCafé(農学部)	農学部学生と県内企業5社の若手OB・OGとの面談会で、企業での仕事や就職活動等について自由に情報交換し合う場	34人 学生19、OB・OG5、企業の人事担当者5、大学教職員3、運営協力企業2
35	12月23日	山形大学基盤教育3号館312教室	山形県キャリア教育事業	平成30年度 普通科高等学校におけるキャリア教育事業『大学生と高校生による協働活動』	41人 高校生27、学生10、教員4
36	1月13日	山形大学工学部百周年記念会館セミナー室	山形県キャリア教育事業	平成30年度 普通科高等学校におけるキャリア教育事業『大学生と高校生による協働活動』	22人 高校生14、学生4、教員4
37	2月6日	庄内町立川庁舎大会議室	山形大学農学部食農環境マネジメント学コース演習成果発表会	学生が3グループに分かれ庄内町の地域の皆さんと連携して、地域課題の整理やその解決策の検討等を発表	44人 学生16、庄内町関係者22、教員5、コーディネーター1
38	2月13日	山形大学工学部百周年記念会館セミナー室	キャリアCafé(工学部)	工学部学生と県内企業23社の若手OB・OGとの面談会で、企業での仕事や就職活動等について自由に情報交換し合う場	67人 学生22、OB・OG23、企業の事担当者13、大学教職員3、運営担当学生3、運営協力企業3
39	2月15日	山形大学農学部3号館201教室	キャリアCafé(農学部)	農学部学生と県内企業6社の若手OB・OGとの面談会で、企業での仕事や就職活動等について自由に情報交換し合う場	27人 学生12、OB・OG5、企業の事担当者5、大学教職員3、運営協力企業2
40	3月2日	山形市・東部公民館	地域体験スタートアップ	科目「地域体験スタートアップ」の報告	41人 学生1、地域住民(40)

8. 4 若者定着推進部会

若者定着推進部会は、学生の山形県内定着を実質的に協議し推進するため、やまがた創生戦略協議会の下に平成30年度に設置されました。

1 構成 (34人)

山形県、山形市、米沢市、鶴岡市、酒田市、上山市、長井市、西川町、真室川町、戸沢村、飯豊町、三川町、庄内町、遊佐町、山形県商工会議所連合会、山形県商工会連合会、山形県工業会、山形県銀行協会、山形県信用金庫協会、山形県経営者協会、山形創造NPO支援ネットワーク、山形県立米沢栄養大学、鶴岡工業高等専門学校、東北公益文科大学、東北芸術工科大学、東北文教大学・東北文教大学短期大学部の担当者(26人)

COC+推進室長、COC+チーフ・コーディネーター、COC+コーディネーター(3人)、COC+推進室(3人)

2 開催状況

○第1回若者定着推進部会(参加大学対象)

日時	平成30年4月27日(金) 13:30~15:00
場所	山形大学基盤教育1号館会議室
出席者	12人(参加大学5人, 山形大学7人)
議事	(1) 各大学の取組について ・資料に基づき、平成29年度県内就職率及びインターンシップ参加者数について報告 (2) 山形県就職率向上のための取組について ・資料に基づき、山形県就職率向上のための取組、学生の就職活動支援のための取組及びインターンシップの特徴的な取組について意見交換 (3) 平成30年度開催計画について ・平成30年度の開催時期、参加範囲及び内容について意見交換

○第2回若者定着推進部会(全機関対象)

日時	平成30年6月14日(木) 14:00~16:00
場所	山形大学法人本部第一会議室
出席者	18人(参加自治体5人, 参加大学6人, 山形大学5人, 企業2人)
議事	(1) 企業におけるインターンシップの取組—講演— ・山形放送(株)常務取締役総務局長及び(株)エム・エス・アイ企画経営室長から、インターンシップの取り組みについて講演 (2) 大学等における取組 ・資料に基づき、平成29年度県内就職率、インターンシップ参加者数、山形県就職率向上のための取組、学生の就職活動支援のための取組及びインターンシップの特徴的な取組について報告及び意見交換 (3) インターンシップ推進のための諸問題について ・資料に基づき、インターンシップ推進の問題点とそれに対する取組について意見交換

○第3回若者定着推進部会（参加大学対象）

日 時	平成30年9月28日（金） 14:00～16:00
場 所	山形大学基盤教育1号館会議室
出席者	7人（参加大学4人，山形大学3人）
議 事	<p>（1）平成30年度COC+シンポジウムについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料に基づき，平成30年度COC+シンポジウム内容について意見交換 <p>（2）平成30年度後期COC+事業の取組について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料に基づき，平成30年度後期の活動計画について報告及び課題等について意見交換 <p>（3）山形大学「地域創生カリキュラム」の履修認定について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山形大学地域教育文化学部「地域創生カリキュラム」履修認定書について委細報告及び意見交換 <p>（4）山形大学の就職について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過去4年間の山形大学学部学生(除医学科)の山形県就職者率に関するデータについて委細報告及び意見交換 <p>（5）山形大学において山形県就職者率が+10%となることについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山形県就職者と出身者の関係，山形県就職者率が+10%に近づくための方策等について委細報告及び意見交換

○第4回若者定着推進部会（全機関対象）

日 時	平成31年1月31日（木） 14:00～16:00
場 所	山形国際ホテル5階「月山」
出席者	21人（参加自治体・経済団体11人，参加大学5人，山形大学5人）
議 事	<p>（1）文部科学省「平成30年度大学等におけるインターンシップ表彰」において最優秀賞を受賞した山形大学のインターンシップについて—講演—</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山形大学松坂暢浩准教授から，「産学連携による1年次中小企業インターンシップの挑戦」と題して講演 <p>（2）平成30年度インターンシップ参加状況について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料に基づき，平成30年度県インターンシップ参加者数について報告 <p>（3）平成30年度若者定着の取組について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料に基づき，山形県就職者数向上のための取組，人材育成の取組等について報告及び意見交換 <p>（4）次年度の取組について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料に基づき，平成31年度の開催時期，参加範囲及び内容について報告



9 シンポジウム

平成30年度COC+シンポジウム ーオールやまがたによる若者定着を目指してー

日時：平成31年1月10日(木) 13:30～16:45

会場：山形国際ホテル3階富士の間

山形大学は、平成31年1月10日(木)山形国際ホテルを会場に、平成30年度COC+シンポジウム「オールやまがたによる若者定着を目指して」を開催しました。シンポジウムには、参加自治体を含む県内の自治体関係者や会社員、県内外からの教職員、学生など約100人が参加し、産学官をはじめ、各機関の強みを発揮したオールやまがた体制での連携を確認する充実の機会となりました。



文部科学省挨拶

冒頭、小山清人学長から、「山形に魅力を創り、関東地域への人口流失を食い止め、より良い山形にするため一緒に考えていきたい。」と挨拶があり、来賓の文部科学省総合教育政策局地域学習推進課香西健次課長補佐から、「東京一極集中の解消を推進し地方創生に向けて支援したい。」と挨拶がありました。



吉村山形県知事

第1部では、「オールやまがたによる若者定着を目指して」をテーマに、吉村美栄子山形県知事、清野伸昭山形県商工会議所連合会会長、小山清人山形大学長による鼎談が行われました。

小山学長が進行を務め、県内大学への進学率や地元企業への就職率など若者定着の現状と雇用の現状を踏まえながら意見が交わされ、最後に「鼎談からのメッセージ」として、若者人口の減少は地域衰退に結びつくという強い危機意識を持ち産学官が連携し事業化を目指して若者定着を具体的に推進する、とまとめました。



清野山形県商工会連合会会長

続いて第2部では、坂本静香氏（山形県最上総合支庁）、阿部和人氏（山形県中小企業家同友会）から、所属機関の若者定着に向けた取組報告が行われました。

また、県内就職者・内定者の、熊谷崇史氏（株式会社山本製作所・山形大学大学院修了）、佐藤百恵氏（株式会社ブルー・東北公益文科大学卒業）、星美沙子氏（東北芸術工科大学4年）、薄井恵氏（みどりのもり保育園・東北文教大学短期大学部卒業）から、山形で働くことや山形で暮らすこと、苦労とやりがい、仕事への向き合い方などについて報告が行われました。



県内就職者事例報告

第3部では、出口毅山形大学副学長（COC+推進室長）が進行を務め、報告者とフロアとの多数の質疑応答や意見交換が行われ、オールやまがた体制でそれぞれの立場から若者定着に向けて取り組む認識が必要であることが確認されました。



報告者とフロアとの意見交換

平成31年1月10日

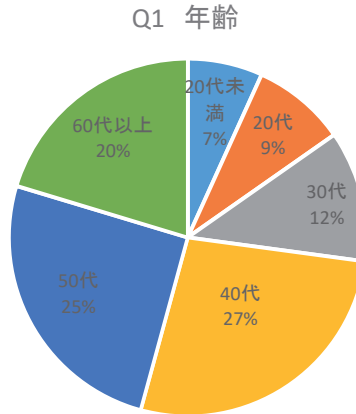
鼎談からのメッセージ “若者定着を目指して”

「オールやまがたによる若者の定着を目指して」を論議する中で、さらなる若者の定着を一步進めるために次のような共通認識に至りました。

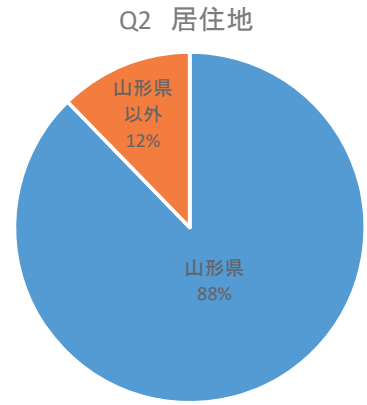
1. 若者人口の減少は地域衰退に結びつく、という強い危機意識を持って若者定着に臨んでいく必要があります。また、若者定着の課題は様々な要因が複雑に絡み合っています。その成果を見るまでに、中長期的にしっかりと取り組んでいきます。
2. 若者定着の課題に対して、“山形県を若者社会に変革していく”といった明るい展望を示しながら、オール山形で全県的に取り組んでいきます。
3. 若者定着を具体的に推進するために、産学官の多様な連携事業を模索し、事業化を目指していきます。

平成30年度COC+シンポジウム「オールやまがたによる若者定着を目指して」
アンケート集計結果

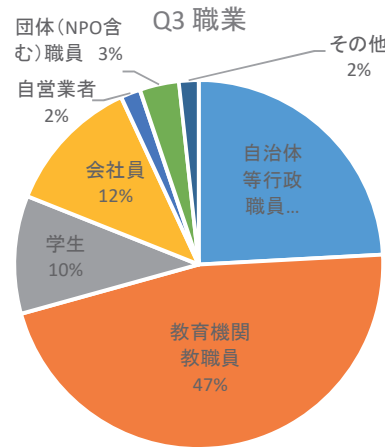
Q1 年齢(回答数59)	
20代未満	4
20代	5
30代	7
40代	16
50代	15
60代以上	12



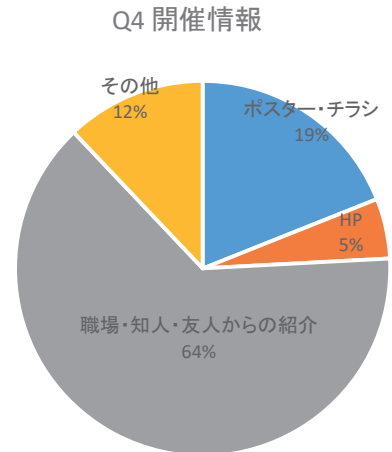
Q2 居住地(回答数57)	
山形県	50
山形県以外	7



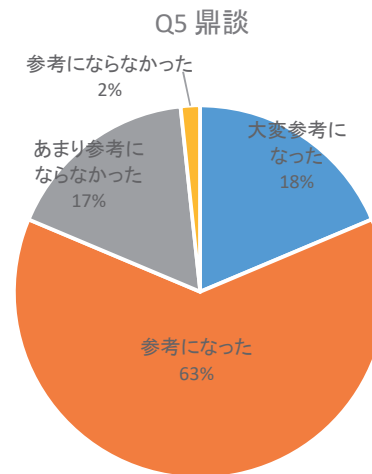
Q3 職業(回答数58)	
自治体等行政職員	14
教育機関教職員	27
学生	6
会社員	7
自営業者	1
団体(NPO含む)職員	2
その他	1



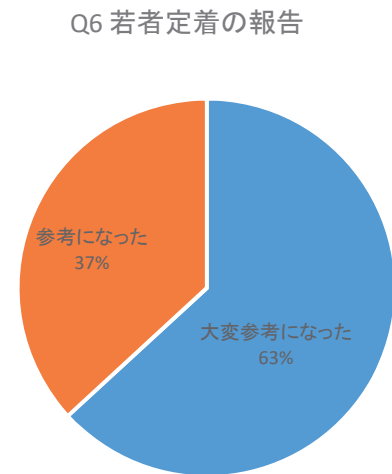
Q4 開催情報(回答数58)	
ポスター・チラシ	11
HP	3
職場・知人・友人からの紹介	37
その他	7



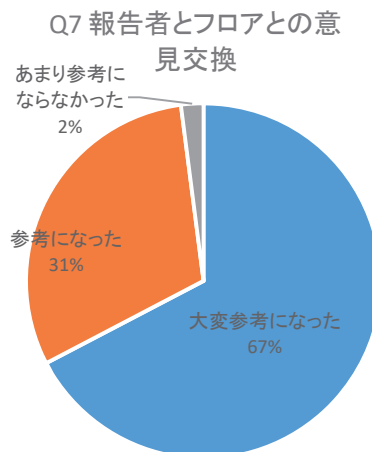
Q5 鼎談(回答数59)	
大変参考になった	11
参考になった	37
あまり参考にならなかった	10
参考にならなかった	1
その他	0



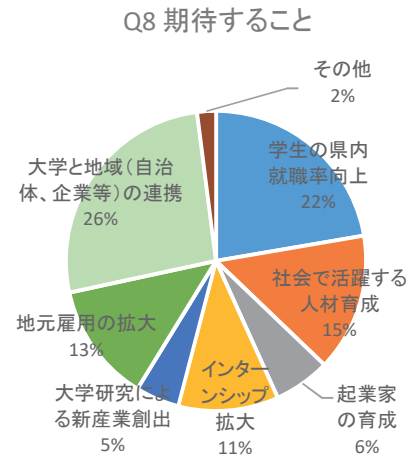
Q6 若者定着の報告(回答数57)	
大変参考になった	36
参考になった	21
あまり参考にならなかった	0
参考にならなかった	0
その他	0



Q7 報告者とフロアとの意見交換(回答数49)	
大変参考になった	33
参考になった	15
あまり参考にならなかった	1
参考にならなかった	0
その他	0



Q8 期待すること(複数回答可)	
学生の県内就職率向上	33
社会で活躍する人材育成	22
起業家の育成	9
インターンシップ拡大	16
大学研究による新産業創出	7
地元雇用の拡大	19
大学と地域(自治体、企業等)の連携	39
その他	3



平成30年度 COC+シンポジウム

オールやまがた による若者定着を 目指して

2019 **1/10** 木

13:30 ~ 16:45
(開場 13:00)

人口減少時代にあって、山形県においても近年若者の県内定着が大きな課題となっています。産業の人材確保や経済活動の衰退、コミュニティ機能の困難等の問題が言われています。その解決に向けて、県内進学・就職の促進、地域の魅力を伝える学習、あるいは新たな産業・雇用の創出等々、様々な視点があり、各部門において鋭意取り組まれています。

本シンポジウムでは、産学官のリーダーによる鼎談並びに若者定着取組事例の報告と県内就職者等からの報告、これらをとおして、「オールやまがたによる若者定着を目指して」についてご参加の皆様と改めて考えていきます。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

会場 山形国際ホテル3F 富士の間
(山形市香澄町3-4-5)

定員 150名 参加無料



12/20(木)
申込〆切

参加お申込み お申込みの際は、【参加者氏名】及び【所属(学生の方は学年も)】をお申込み先へE-mailでご連絡ください。
また、お手数ですが、件名を【COC+シンポジウム申込み】とお願いいたします。
※お申込みの事項については、本シンポジウムの開催目的以外で使用することはありません。

お申込み先 cocsuisin@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

COC+参加校 山形大学、山形県立米沢栄養大学、鶴岡工業高等専門学校、東北公益文科大学、東北芸術工科大学、東北文科大学、東北文科大学短期大学部
自治体 山形県、山形市、米沢市、鶴岡市、酒田市、上市市、長井市、西川町、真室川町、戸沢村、飯豊町、三川町、庄内町、遊佐町
経済団体等 山形県商工会議所連合会、山形県商工会連合会、山形県工業会、山形県銀行協会、山形県信用金庫協会、山形県経営者協会、山形県創造NPO支援ネットワーク

ポスターデザイン：山形大学地域教育文化学部4年横倉ゆうか

10 広報紙「やまがた創生便り」

広報紙「やまがた創生便り」は、学生目線で地方創生・人材育成を考え、大学関係機関に限らず、広く山形県内に情報を発信することを目的として、平成28年1月に第1号を発行し、平成29年度は4回、平成30年度以降は年3回の定期発行に位置付けて取り組んでいる。

「やまがた創生便り」の特徴は、学生からの寄稿を積極的に掲載し、学生が主体的に地方創生に参加している大学教育を周知するとともに、平成30年度からは、参加自治体による地域人材の育成や定着に関する取組を周知していることにある。

特に、学生による記事の執筆と参加自治体による取組の掲載は、地方創生マインドの形成と地域市民の地元定着活動の理解に繋がると期待している。

情報発信による波及効果としては、学生の地域を見る目・地域市民の学生を見る目の形成、学生のまちづくりへの寄与、大学教員の地域貢献活動の高まりと、参加自治体によるまちづくり活動への参加などが挙げられる。

現在、広報活動の一環として、平成29年8月発行の第6号から、米沢市と鶴岡市の協力を得て、同市自治会による「やまがた創生便り」の全戸回覧を実施している。また、平成30年8月発行の第10号からは、長井市と遊佐町から協力が得られ、4市町自治会による全戸回覧が実現している。

さらに、山形県商工会議所連合会並びに山形県商工会連合会のご協力のもとに、各商工会議所や各商工会への「やまがた創生便り」の情報提供を行っている。

これにより、COC+事業における参加校と参加自治体の取組や成果の更なる周知と地域市民・企業への理解促進が図られ、多様な波及効果が期待できると考えている。

今後、更に地域市民と意識の共有を図り、地域市民による外部評価等もCOC+事業に取り込んでいきたい。

『やまがた創生便りURL: http://www.yamagata-u.ac.jp/coc/coc_plus/publish/index.html』

やまがた創生便り 第9号

2018.3.19

“地域創生マインド”を醸成する地域志向教育の展開

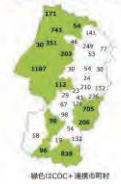
COC+事業では、県内就職率の向上を目的に、学生の“地域創生マインド”を醸成する地域志向教育を実施しています。そこでは自治体や産業経済団体等に幅広くご協力いただきながら、地域社会や県内企業の魅力にふれる様々な学習を展開しています。

平成29年度は県内全域で200以上の科目・活動が実施され、参加学生数はのべ6798名にのぼっています。事業を開始した昨年度に比べて3割近い約1500名増加しています。

具体的な教育活動については、今号の米沢栄養大学および東北文化短期大学による報告のほか、やまがた創生便りを通じて今後もお伝えしていきます。

※地域創生マインド：地域の現状と課題を理解し、地域の将来を担う存在となる志

のべ参加学生数：6,798名



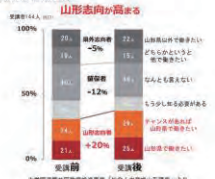
地域志向教育は県内就職へつながるのか？

このような教育の成果について多くの方が関心を持たれたことと思われます。しかしながら、スタートから2年目の本事業で就職への成果を問うのは尚早ですので、本事業と同様に地域志向性の向上を目的とした過去のプロジェクト「社会人力育成山形講座」の成果を例としてご紹介します。

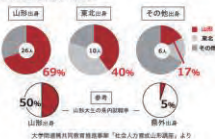
このプロジェクトは平成25～28年にかけて山形県内の高等教育機関が連携し、毎年約30の地域体験型科目を実施しました。そのなかで、学生の山形への就業志向を調査した結果、受講により山形を希望する学生の割合が増加しました(棒グラフ)。さらに最終年度の卒業生を対象に行なった就業地調査では、比較的高い割合で山形県内へ就職していました(円グラフ)。

地域を活用した教育が学生の地域創生マインドを育み、結果として県内就職へつながることが期待されます。

【就労地志向】



【受講者の就職先】



第9号(平成30年3月発行)

やまがた創生便り 第10号

2018.8.24

COC+参加大学等で行っている地方創生に関連する取組を報告いたします。

▲東北芸術工科大学

デザイナー(中学校デザイン選手権大会)を通じて地元中学校にデザイン思考を

本学では2016年度より山形県内の中学校を対象としたデザインコンペ、「デザイナー」(中学校デザイン選手権大会)を開催しています。「デザイナー」は毎年、「身近な問題解決から世界を豊かにしよう!」をテーマに、中学生の視点で問題点や課題を見つけてもらい、その解決方法を募っています。

2回目の2017年度は前年度比3.7倍の117チームの応募があり、入賞5チーム、入選6チームを輩出。2018年3月3日の決勝大会では入賞チームが順位を競いました。審査員には、中学校とも連携してデザイン思考を研究している本学教員6名のほか、そのデザイン活動が評価されている卒業生2名もゲストとして参加しています。

この大会を通じて本学は中学校教育におけるデザイン思考の重要性を説いていますが、今後はその活動に共働してくれた地元中学校の教員の方々が、自ら研究会等を組織し、この運動を更に育ててくださることを期待しています。



参加中学校教員の声

客観的な評価を生徒の学びにつなげたい

山形県立東桜学園中学校 教諭 木村聡子

本校では、総合的な学習の時間の中で、未来創造プロジェクトとして探究型学習に取り組んでいます。昨年度はその成果をもって「デザイナー」にエントリーし、準優勝チームを輩出いたしました。学習の成果として、大学の先生方から客観的な評価をいただくことで、生徒たちのさらなる学びにつなげていくために参

加しています。本校では探究型学習を進めるにあたり、デザイン思考を取り入れてスタートしました。生徒の課題意識、論議が、進めれば進めると、空回りしたり、壁に当たったりしますが、それ自体が学びののだと思っています。今後は、論議のつかみ方や教諭のわらいのとり方をもっと考えたいと思っています。「デザイナー」は、探究型学習やデザイン思考が今後の教育に重要であることを考えていただくにも、意義ある大会だと思います。

第10号(平成30年8月発行)

やまがた創生便り 第11号

2018.11.27

山形県内の高等教育機関は、文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に取り組みながら、地域の活性化を創出する取組の一つとして県内人材育成事業を展開しています。「やまがた創生便り」では各高等教育機関および連携自治体が実施している地方創生に関する取組を報告いたします。

鶴岡高専

地域企業訪問研修

鶴岡高専では、県内企業の皆さまにご協力いただき、「地域企業訪問研修」を実施しております。

これは、本校のOB・OGが技術者として勤務する企業を訪問し、少人数での工場見学や交流・懇話を通して学生に実社会で役立つ社会人としての知識や技術者の心構えなどを学んでもらうことを目的に開催しているものです。

毎月様々な企業の皆さまにご協力いただき、9月28日には航空機内装品や生糸製品の製造を行っている松岡株式会社(酒田市字仲町)を訪問させていただきました。はじめに、会社の概要や生糸製品から航空機内装品の製造も行うことになったきっかけなど、歴史や沿革についてのお話を伺い、続いて工場内部を見学させていただきました。工場では普段は見ることのできない生糸製品の自動操縦機や航空機内装品の製造機械を拝見し、それぞれの工程についての説明を受けました。

その後、本校OB・OGの皆さまとの懇話の時間が設けられ、担当業務や製品については、就業の様子などについての質問にも答えていただき、学生には仕事や会社を知る良い機会となり、先輩から多くの教訓を受けた様子でした。このように会社や地域を知る機会を大切に、自らの就業意識を高めるとともに地域理解の一助としてもらうことを期待しております。

ご協力いただいた企業の皆さまにこの場をお借りして改めてお礼申し上げます。

受講学生の声

地域企業訪問研修 参加学生の感想

地域企業訪問研修に参加して、学生達からは次のような感想がありました。
・企業の雰囲気を感じ取り、具体的に働く姿を想像することができました。進学を希望していました。地元就職も良い選択だと思いました。
・製品の品質向上やミスを防ぐための工夫が見られ興味深かったです。

・少人数での見学のため、しっかりと工場を見ることができ、OBの方との距離も近く感じました。とても参考になりました。
・懇話会ではOBの方々から、入社理由や学生生活で力を入れるべきことを聞くことができ、とても貴重な時間でした。先輩方の経験を参考に今後の行動を考え直したいと思いました。また積極的に参加したいです。



工場内見学の様子

やまがた創生便り 第12号

2019.2.20

山形県内の高等教育機関は、文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に取り組みながら、地域の活性化を創出する取組の一つとして県内人材育成事業を展開しています。「やまがた創生便り」では各高等教育機関および連携自治体が発している地方創生に関する取組を報告いたします。

山形県立米沢栄養大学

山形市学校給食センターを見学して

山形県立米沢栄養大学 山口光枝

米沢栄養大学では、在籍する学生全員が管理栄養士を目指して勉学に励んでいます。また、一部の学生はさらに教職課程を履修し、栄養教諭免許も取得します。栄養教諭は、採用された自治体によって勤務場所が小中学校あるいは給食センターになりますが、いずれの場合も大規模な学校給食の経営管理に携わる可能性があるため、在学中に実際の現場を知ることは重要です。

このたびの訪問では、山形市学校給食センター見学と山形市の管理栄養士さんとの面談が実現しました。2万食規模の食事を調理する巨大な施設や調理器具類は圧巻で、安全性を重視した衛生管理体制は驚かされたものでした。学生にとって最も大きな収穫は、理学科では実感しづらい現場の臨場感や、スタッフの方々の仕事への使命感を感じ取り、資格取得への決意を新たにする機会になったことだと思います。貴重な経験させてくださった山形市学校給食センターの皆様改めて御礼申し上げます。



参加学生の感想

見学に参加した学生たちからは、次のような感想がもたらされた。

・今回の見学で強く印象に残っているのは、大型のフライヤーで揚げ物の温度を細かく調整されていたことです。大量調理において、少しの温度の差が美味しさに大きな影響を及ぼすのだということがわかり、小さなことにも気を配る必要性を学びました。今回学んだことを生かし、これからは勉学に励んでいきたいです。

・これまで単独視察現場を見たことはありませんでしたが、共同調理場は見ることができませんでした。大量に調理することには驚きを感じていますが、その中で子どもたちを笑顔にするのが一番の喜びを感じて調理されている姿に感動しました。本当に貴重な経験になりました。

・実際に作業している様子を見させていただきながら、管理栄養士の方にはお話を伺ってその都度答えていただいたので、とても理解が深まりました。見学に伺う前の印象や考えがガラリと変わったように感じました。

第11号(平成30年11月発行)

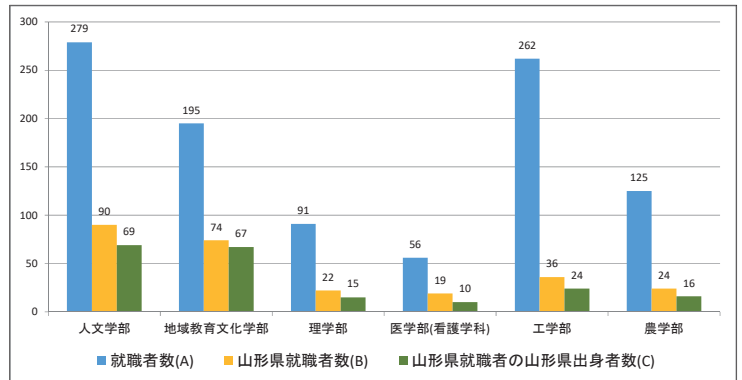
第12号(平成31年2月発行)

1.1 調査

1.1.1 山形大学就職調査

1 平成29年度の就職状況

・理系の学部（工学部、農学部）の山形県就職者率が低くなっている。

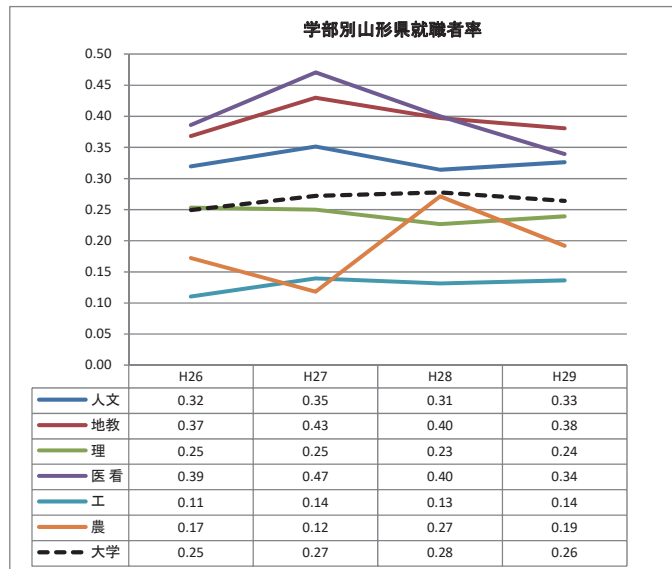


	人文学部	地域教育文化学部	理学部	医学部(看護学科)	工学部	農学部	大学
山形県就職者率 B/A	32%	38%	24%	34%	14%	19%	26%
山形県就職者の山形県出身者率 C/B	77%	91%	68%	53%	67%	67%	76%

2 山形県就職者率^(注)の推移

(注)「山形県就職者率」とは、山形県への就職者数を全体の就職者数で除した割合。

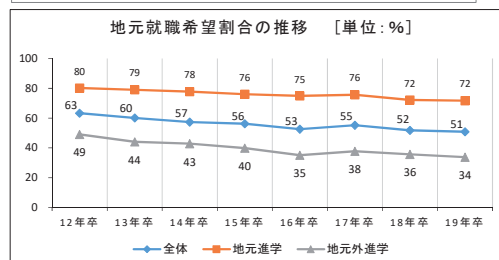
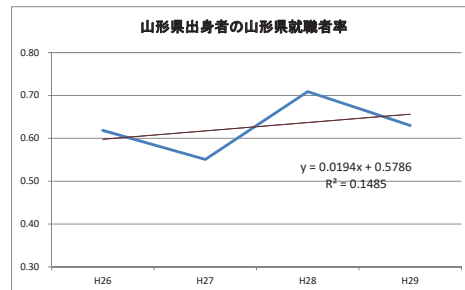
- ・大学全体としては、ほぼ一定で推移し、増加傾向にあるとは言い難い。
- ・学部別にみると、農学部や医学部看護学科では大きな変化(±10%超)が見られる。



3 山形県出身者の山形県就職者率の推移

- ・山形県出身者の山形県就職者率は、ほぼ一定で推移している。
- ・マイナビ調査^(注)結果によれば、「地元就職希望(最も就職したい都道府県が卒業校都道府県と一致)の割合の全国平均が逡減傾向にある」が、山形大学では上記のことから必ずしもそのようなことは言えない。

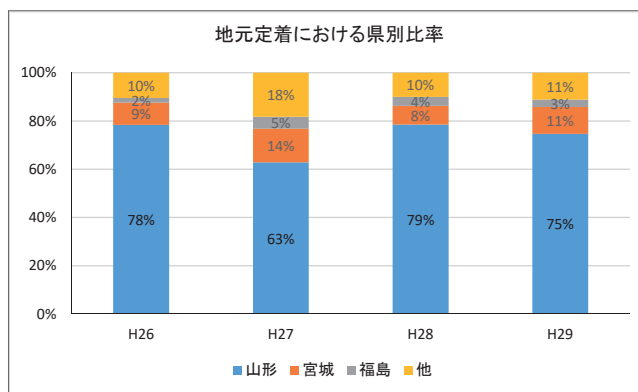
(注) ㈱マイナビ「2019年卒 マイナビ大学生Uターン・地元就職に関する調査」



引用：㈱マイナビ『2019年卒 マイナビ大学生Uターン・地元就職に関する調査』

4 山形県就職者に占める各県の比率

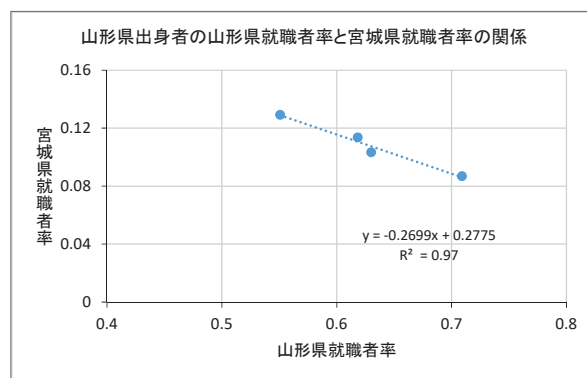
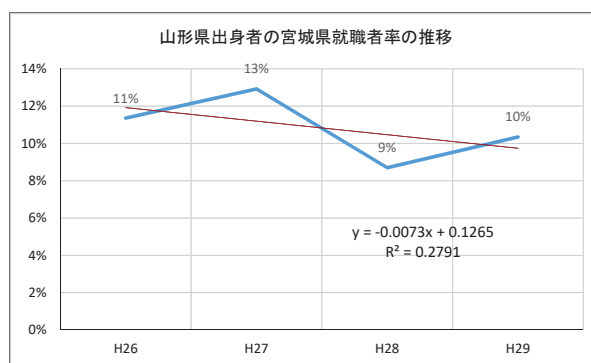
・山形県就職者の各県構成については、山形県がほぼ4分の3を占め、宮城県と福島県の3県でほぼ90%を占める



5 山形県出身者の宮城県就職化

・マイナビ調査では、“志望する企業の地理的範囲を隣接する都道府県まで”と回答する学生が39%に及んでいる。これは山形県出身者の宮城県就職化という現象ともいえる。しかしながら、これについては、実態的にははっきり示されていない。

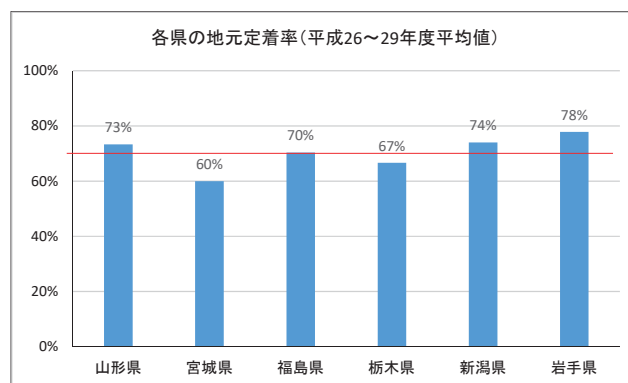
・一方で、山形県出身者の山形県就職者率が低下すれば、同宮城県就職者率は高くなるという関係があり、「弱い宮城県就職化」が進んでいるといえる。



6 各県の地元定着率

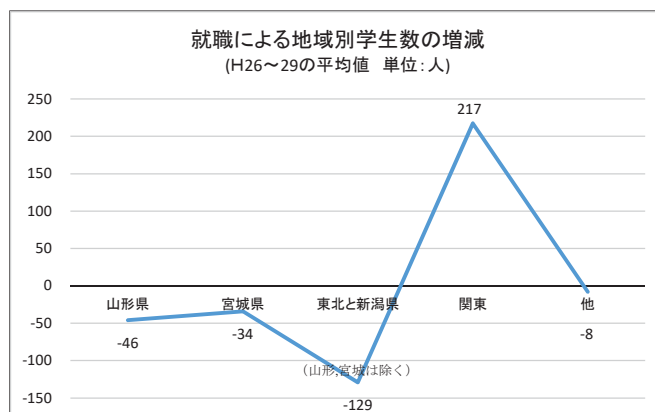
・例えば「山形県の地元定着」とは、「山形県出身者が山形県に就職すること」をいう。

・入学者が多い上位6県の地元定着率については、平成26～29年度のその平均値は70%であり、宮城県を除いて山形県のレベルにある。



7 就職による地域別学生数の増減

- 山形県への就職に伴い入学時点と比較した学生数の増減は、[(山形県への就職者数) - (全就職者のうち山形県出身者数)] として示すことができる。他の地域についても同様に学生数の増減を把握できる。このことについて平成 26～29 年度の平均値で見ると、右図のようになる。
- 関東地域(特に東京都)においてのみ学生数が増加している。

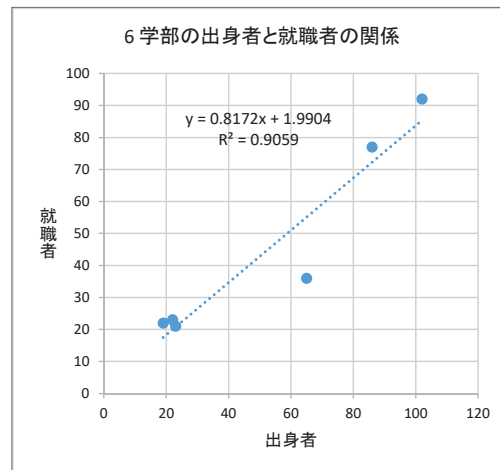


● 山形県就職者率+10%による山形県出身者の増加推計

COC+事業では山形県就職者率を+10%とすることを目標としている。しかしながら、その目標達成は容易でないのだが、その要因はどこにあるのか、を把握するのが非常に難しい。それは、就職者数の増減要因は、入学者数であったり、さらには大学教育、企業の雇用動向、地域の雇用力、地域文化等の多様な要因が想定されるためと考えられる。ここでは、次の(1)で示されるように、就職者数と出身者数が強い相関関係にあることを利用して、山形県就職者率+10%によって山形県出身者はどれだけ増加する必要があるのか、という推計を試みる。なお、当然のことではあるが、その結果になれば山形県就職者率+10%が達成されるというものではない。

(1) 就職者と出身者の関係

各学部の、平成 26 年度～29 年度の山形県就職者と山形県出身者を基にして、6 学部の山形県就職者と山形県出身者について相関関係を見ると、右図のように、強い正の相関関係にあることが分かる。



(注) 6 学部の各数値は平成 26 年度～平成 29 年度の各平均値

(2) 山形県就職者率+10%による平成 29 年度山形県出身者の増加推計

上記(1)の相関分析における 1 次回帰式を利用して、山形大学の平成 29 年度の場合に当てはめながら、山形県就職者率+10%となれば山形県出身者数はどのように増減するのか、について推計する。その結果、山形県就職者率+10%による山形県就職者の増加(+102 人)に伴って、山形県出身者は+124 人を必要としている。すなわち山形県出身者率でみれば+12%となるように必要としている、となる。

(3) 山形県就職者率+10%による平成29年度山形県学生数増減の推計

就職者と出身者の相関関係が強い関係であることを前提として、就職者が α 人増えた場合に山形県の出身者が β 人増える、と想定する。この時の山形県の学生数増減は $(\alpha-\beta)$ となり、 $\alpha > \beta$ であれば学生数は従前よりも増加する。山形県就職者率が+10%となる場合の $\alpha-\beta$ を推計すると、平成29年度の例では、-50人から-22人となる。

このようなことから、山形県就職者率が+10%となれば、山形県学生数増減のマイナス幅が小さくなる、と推計される。

(4) 関東の学生数増減と山形県の学生数増減との関係

上記(3)における山形県の学生数増減が-22人というのは平成28年度レベルであるが、前年度の平成27年度と比較した平成28年度の学生数増減は、山形県+13人、関東-19人、それ以外+6人となる。山形県の学生数増減は関東のその影響を強く受けていると思われる。

同様に、平成27年度、29年度についても前年度比較を行うと、山形県と関東の前年度比較学生数増減は強い負の相関関係にある($R=0.89$)。山形県の学生数増減は関東のそれに正反対の関係で増減する、と推測される。同時に、このことから、関東の学生数増減が減少すれば、山形県出身者が減少する場合でも山形県就職者の増加が生じることもある、と推測される。

(5) 山形県就職者率が+10%に近づくための大学における方策

今までの検討から、山形県就職者率を+10%とすることは非常に困難であることが分かるが、それに近づくための大学における方策について、現在の取組も含めて、概略を記す。

①山形県出身者(入学者)率を高めることの方策

- ・ 高大連携
- ・ 山形県出身者の入学者を高める特別な方策

②山形県出身者又は他県出身者の山形県就職者率を高めることの方策

- ・ 1年次も含めてインターンシップ者の増加
- ・ キャリアCafé
- ・ 1年次山形志向科目学習の強化
- ・ 専門科目課程における山形志向科目学習の強化

1 1. 2 就職意識調査

1 調査の概要

(1) 趣旨

山形大学地域教育文化学部学生の就職意識を以下の視点で把握するために調査を行う。

○就職意識

ここでは、就職意識を「就職先を選定する際の考え方」として、進路検討時期、進路検討に影響を及ぼした情報、就職先選定時理由、地元就職理由、親の関係の5項目について調査を行う。

また、地元志向については、先行研究^(注)があり、そこで把握された傾向が山形大学においても確認できるのか等について把握する。

(注) 平尾元彦、重松正徳 2006、「大学生の地元志向と就職意識」『大学教育』3：161-168

○大学教育と就職意識

就職に影響を与える大学教育とはどのようなものがあるのか、を把握するために、地域創生カリキュラムや地域学習の進路影響度並びにインターンシップの受講状況について調査を行う。県内・県外就職者の比較から県内就職者の特徴を把握する。

(2) 調査方法

- ・別紙の質問紙による。
- ・調査時期は平成31年1月30、31日である。

(3) 回答状況

- ・調査対象者は地域教育文化学部卒業予定者270人である。
- ・回答者は234人(回答率87%)であった。そのうち、就職者202人、進学者22人、その他10人である。

2 調査の結果

以下、調査結果は、「回答者全体」(以下、全体)、「山形県出身者で山形県就職者」(以下、山形就職者1)、「山形県以外出身者で山形県就職者」(以下、山形就職者2)の組み合わせで示す。

[調査結果の要約]

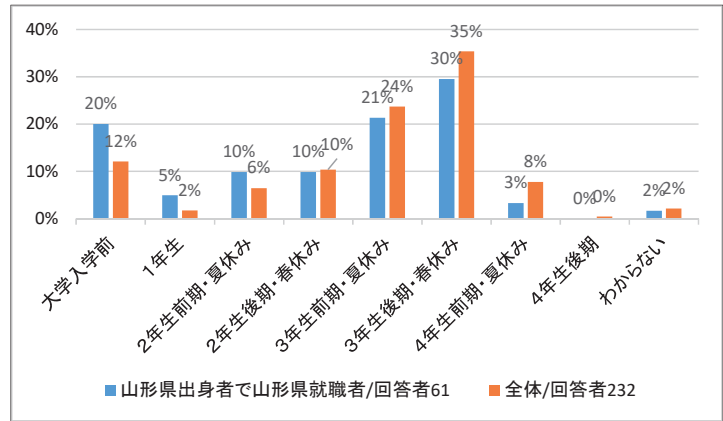
- ・進路検討時期は約60%が3年次で、就職に影響するのは「大学教育」「家族・友人」である。
- ・山形県出身者で山形県就職者は企業要素よりも地元要素を選択理由とする傾向にある。地元就職の理由は、家族要素23%、地元要素57%に及んでいる。また、就職活動における親との関係は、「就職については親と意見が合わなかった」が14%というように、濃密になっている。
- ・90%程の就職者は意欲的に、難しい状況を乗り越えて就職活動を行った
- ・進路に影響を与えた上位5科目は、「フィールドプロジェクト」「キャリア教育」「“山形に学ぶ”科目」「生涯学習論」「社会体験」となっている。また、進路に影響を与えた学習は、現状把握学習>調査・分析学習>相互作用的学习という順に進路影響度合いが低くなっている。
- ・インターンシップについては、参加率は約40%、参加日数は1dayが主で、参加時期は約80%が3年次であり、74%が就職への影響はあるとしている。

(1) 進路検討時期

全体の進路検討時期は次のとおり。

大学入学前	12%
1年次	2%
2年次	16%
3年次	59%
4年次	8%

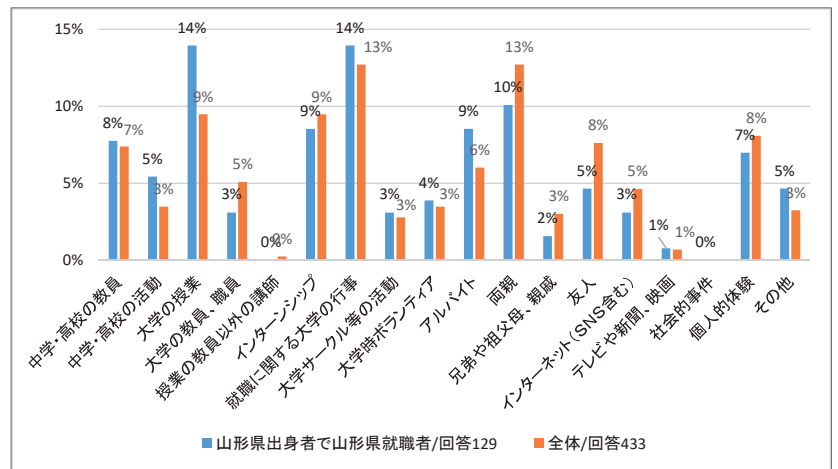
大学入学前～2年次の時期では、「山形就職者1：全体」は「45%：30%」となり、山形就職者1が早期に検討している。



(2) 就職に影響した人・活動等

全体については、次のように要約され、「両親」「就職に関する大学の行事」「大学の授業」が強い影響力をもっている。

大学前教員等	10%
大学教育	36%
大学時活動	12%
家族・友人	24%
メディア	6%
個人的体験等	11%

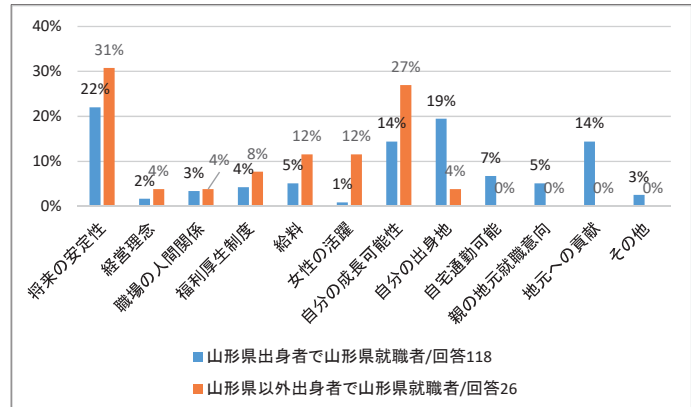
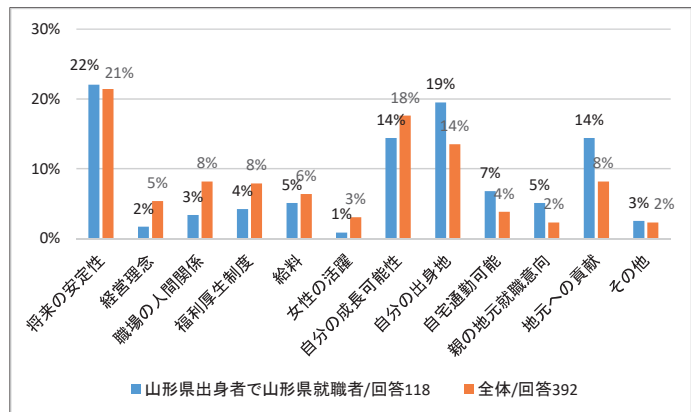


(3) 就職先の選択理由

理由のうち、「将来の安定性」から「女性の活躍」までを企業要素とすると、全体の方が山形県就職者1よりも企業要素を選択理由とする傾向が強い。

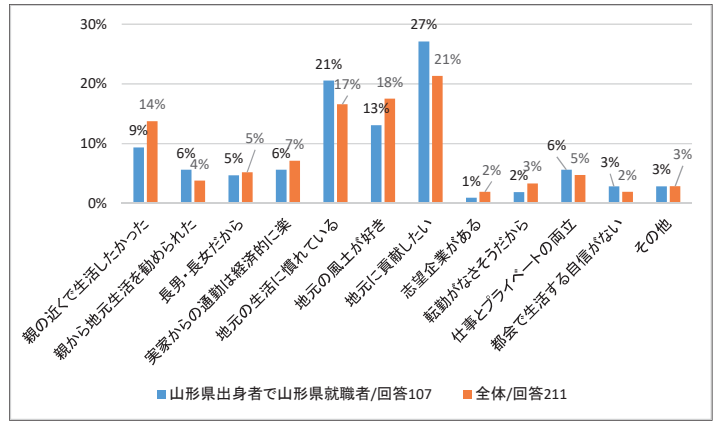
山形就職者1は企業要素よりも、「自分の出身地」「地元への貢献」等の地元要素を選択理由とする傾向にある。

また、山形就職者1と山形就職者2とを比較すると、当然ながら、「自分の出身地」「地元への貢献」といった地元に関わる理由に大きな違いが見られる。



(4) 地元就職の理由

理由のうち、「親の近くで生活したかった」「親から地元生活を勧められた」「長男・長女だから」を家族要素、「地元の生活に慣れている」「地元の風土が好き」「地元で貢献したい」までの地元要素とすると、全体では、家族要素は23%、地元要素は57%に及び、山形県就職者1の地元要素は61%に達する。

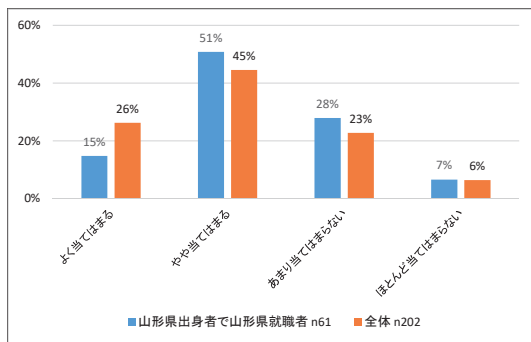


この理由については、『2019年卒 マイナビ大学生Uターン・地元就職に関する調査』から引用しているが、上位5番目までの理由について調査結果を比較すると次のようになる。ほぼ類似した傾向にあることが分かる。

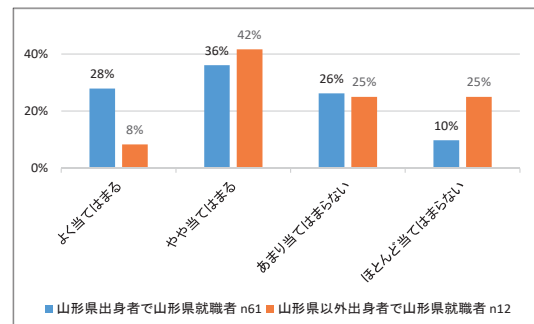
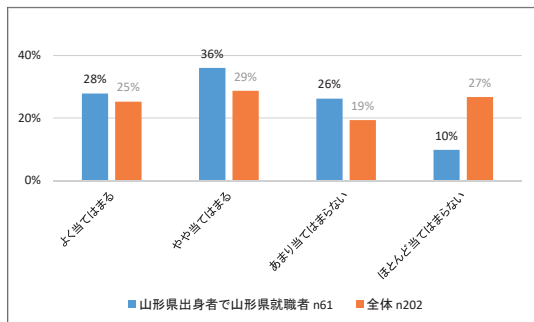
2019年マイナビ調査	山形大学調査 (回答者に対する%)				
	全体		山形県就職者		
親の近くで生活したいから	47%	地元で貢献したい	37%	地元で貢献したい	48%
実家からの通勤は経済的に楽だから	41%	地元の風土が好きだから	30%	地元の生活に慣れているから	36%
地元の風土が好きだから	39%	地元の生活に慣れているから	28%	地元の風土が好きだから	23%
地元の生活に慣れているから	36%	親の近くで生活したいから	24%	親の近くで生活したいから	16%
仕事とプライベートを両立させたいから	25%	実家からの通勤は経済的に楽だから	12%	実家からの通勤は経済的に楽だから	12%

(5) 就職活動における親との関係

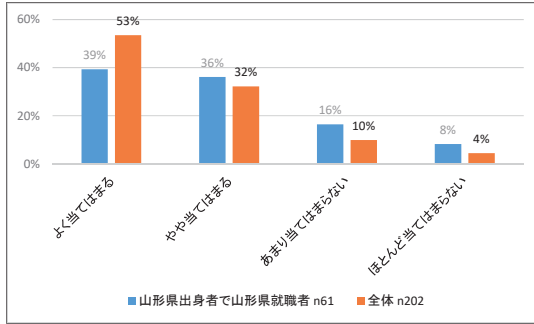
① 「親と就職の話をよくしたか」



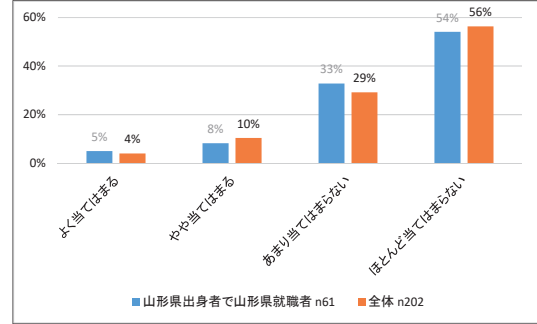
② 「親は地元での就職を勧めたか」



③「親から好きにきなさいといわれたか」



④「就職については親と意見が合わなかったか」



就職活動における親との関係については、「70%近くが親と就職の話をしている」「山形就職者1では60%を超えて親は地元就職を勧めているが、山形就職者2では50%程がそうではない」「80%前後で親から好きにきなさいといわれている」「親と意見が合わなかったのは14%である(ほとんどが親と意見が合っている)」となる。

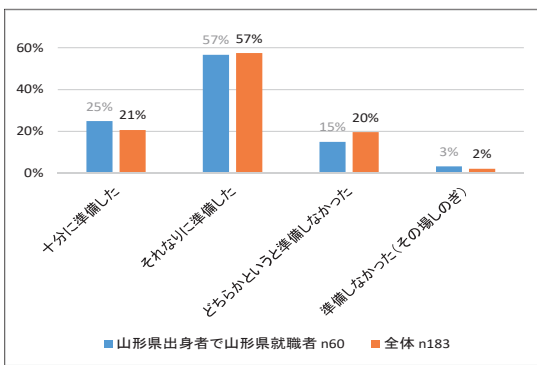
このようなレベルがどのようなものか、について、先行研究(注)にある山口大学と比較すると次のようになり、さらに親との関係が濃密になっていることが見えてくる。

質問事項	山口大学 2005年 n 409	山形大学 2019年 n 202
親と就職の話をよくしたか	53%	71%
親は地元での就職を勧めたか	43%	54%
親から好きにきなさいといわれたか	58%	85%
就職については親と意見が合わなかったか	13%	14%

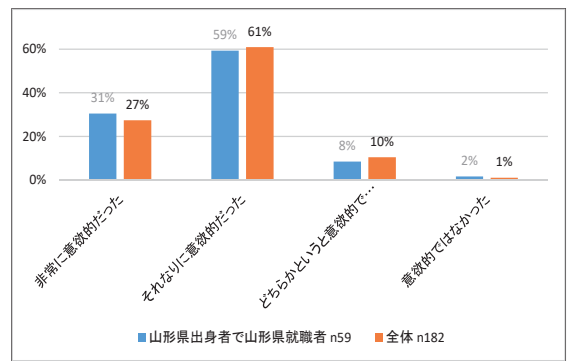
(注) 平尾元彦、重松正徳 2006、「大学生の地元志向と就職意識」『大学教育』3 : 161-168

(6) 就職活動の取組方

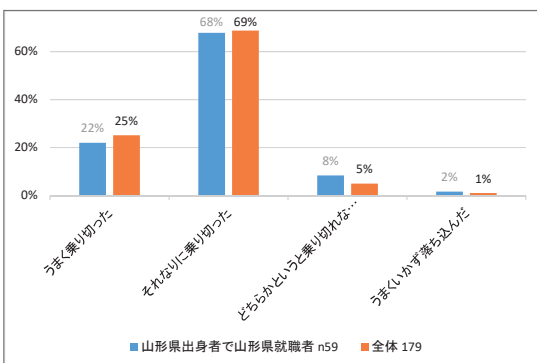
①就職活動の準備状況



②就職活動の意欲



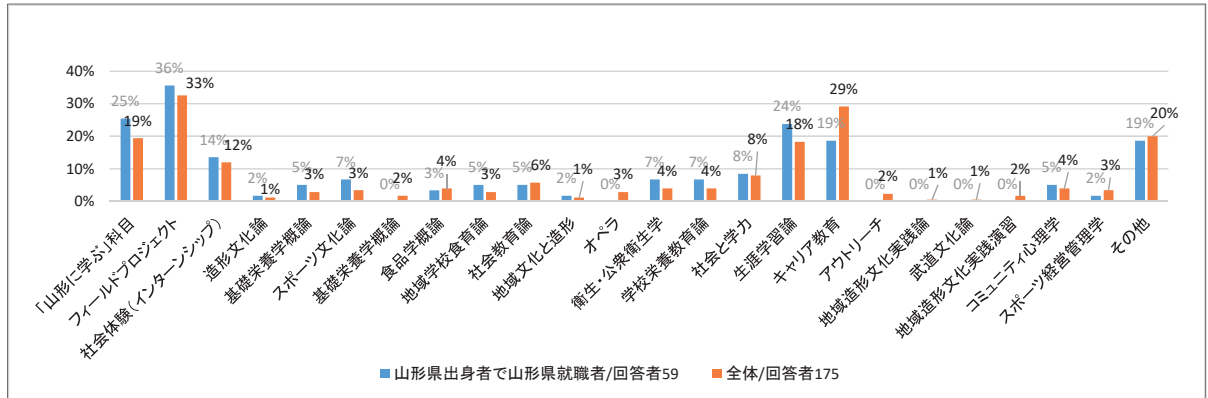
③難しい情況の対応



ここでは、結果として就職活動の取組方をどのように思っているのか、ということについて聞いている。回答の前提としてある就職状況にも考慮すべきなので、結果を鵜呑みにしてはいけないのだが、その点についてはひとまず置くとする。

それぞれの回答結果を見ると、全体として、90%程の就職者はそれなりの手応えを感じて就職したと思われる。

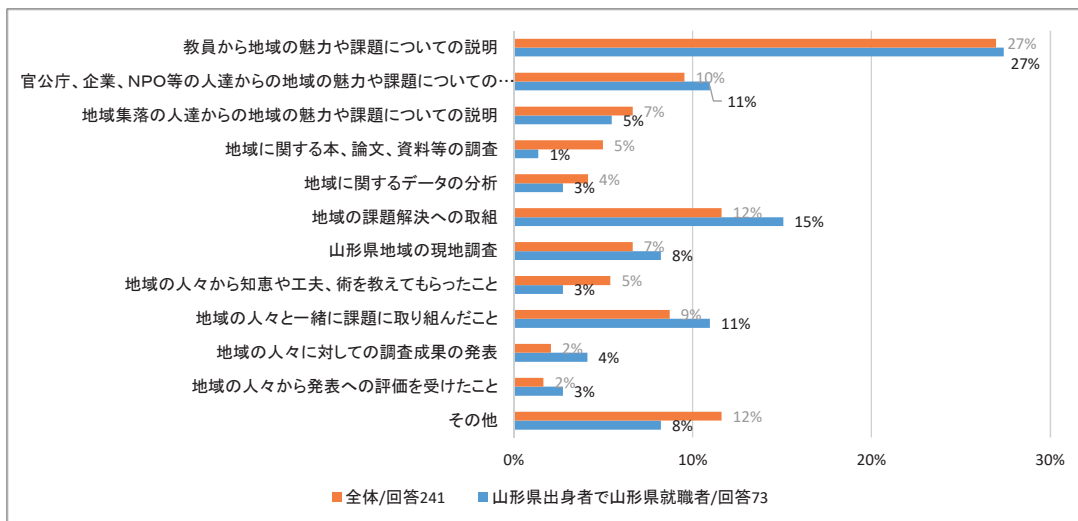
(7) 進路に影響を与えた科目



ここでは、地域創生マインドを形成するために地域創生カリキュラムを設定しているが、そのカリキュラムの科目が進路を考える際にどのように影響したのかを見ようとした。

進路に影響を与えた上位5科目は、「フィールドプロジェクト」「キャリア教育」「「山形に学ぶ」科目」「生涯学習論」「社会体験」となっている。いわゆるキャリア形成科目が並んでいる。それでは、他の専門科目は影響が小さかったのかというと、そうではないだろう。全学部的に学ぶか否かで数値は変わるし、進路を専門的に考える（体験する）が進路に影響を与えていると意識されにくい、ということもある。なお、地域創生マインドを形成する科目をカリキュラムとしてどのように設定するかは、進路影響に限らず、キャリア形成や社会人力育成の視点から再考する必要性はあるだろう。

(8) 進路に影響を与えた学習



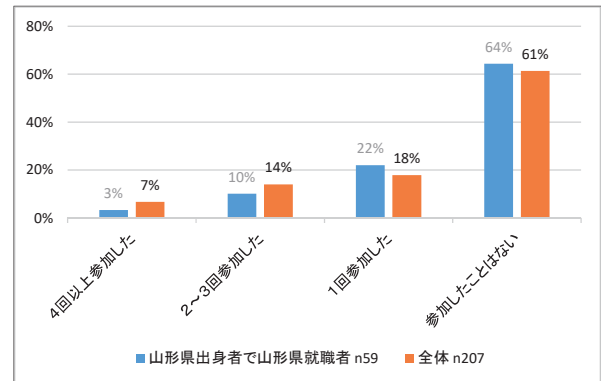
地域志向科目の学習には様々な形があるが、ここでは、現状把握（知識の習得）（「教員・・・」から「地域集落・・・」まで）、調査・分析（「地域に関する・・・」から「山形県・・・」まで）相互作用的学習（「地域の人々から知恵・・・」から「地域の人々から発表・・・」まで）というプロセスを想定し、11の学習を提示し、それに対して進路に影響を与えた度合いを把握することとした。その結果は、現状把握学習＞調査・分析学習＞相互作用的学習という順に進路影響度合いが低くなっている、ということを示している。地域志向科目にディープ・アクティブ学習を期待するならば、この結果は問題を提起していると思われる。

(9) インターンシップ

①参加状況

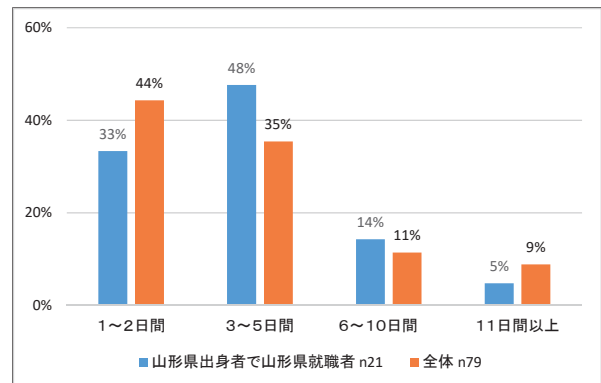
インターンシップの参加状況は、全体で 39% となっている。先行研究^(注)によれば 55% であり、低いレベルと見て良いのかもしれない。

(注) 松坂暢浩 2017、「山形県内大学に通う大学生のインターンシップ参加状況の調査」『自立分散型（地域）社会システムを構築し、運営する人材の育成 平成 29 年度報告書』49-50



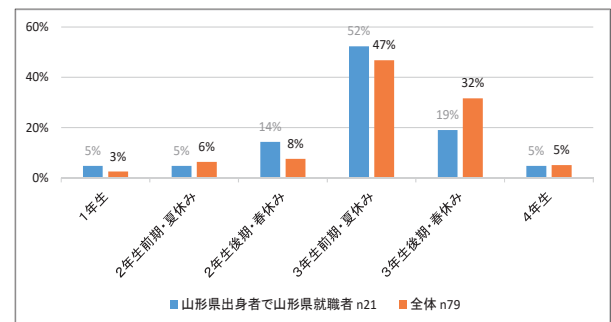
②参加日数

参加日数については、上述の先行研究によれば、1 day インターンシップ 32% であり、「1~2 日間」の割合がやや高いと思われる。したがって、それ以外の参加日数の割合はやや低いとなる。



③参加時期

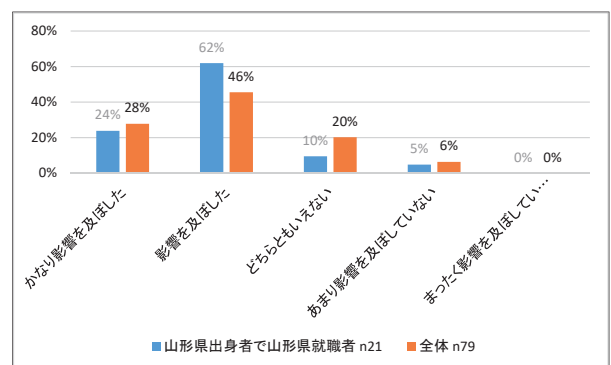
参加時期については、3 年生以降が 80% を超えている。このレベルについて比較考慮するデータがないが、インターンシップのねらいや効果を念頭に置くと、早期のインターンシップが望ましいものであり、2 年次に前倒した取組を検討する必要があるように思える。



④影響度

インターンシップの参加が及ぼした就職への影響は、74% と高い。山形県就職者 1 においてはさらに高くなる。

このようなインターンシップの効果をさらに広めるために、まずは参加状況を拡大していく必要がある。



(文責 横井博)

別紙

1 あなたの進路や出身地、就職先についてお伺いします。
 (1) 進路について、該当するものに✓をつけてください。 就職／進学／その他
 (2) 出身地（保護者の居住地） 都道府県
 (3) 就職先（勤務地） 都道府県

2 大学卒業後の進路について本格的に考えるなどの進路検討（会社・大学等情報収集や就業体験、親や教員らとの相談等）を、いつ頃から始めましたか。該当するものに✓をつけてください。
 大学入学前／1年生／2年生前期・夏休み／2年生後期・春休み／3年生前期・夏休み／3年生後期・春休み／4年生前期・夏休み／4年生後期／わからない

※以下の3～7については、「1で進路を就職」と下方が記入してください。（8以降は全員）

3 就職について考える際に、影響を受けたのは次のどれですか。当てはまるものを三つまで選択し、✓をつけてください。
 中学・高校の教員／中学・高校の活動／大学の授業／大学の教員・職員／授業の教員以外の講師／インターンシップ／就職に関する大学の行事（セミナー・合同企業説明会等）／大学のサークル等の活動／ボランティア／アルバイト／両親／兄弟・祖父母・親戚／友人／インターネット（SNS含む）／テレビ・新聞・映画／社会的事件／個人的体験／その他（ ）

4 就職先を選択した理由は次のどれに当たりますか。該当するものを二つまで選択し、✓をつけてください。
 安定性・将来性／経営理念／職場の人間関係／福利厚生制度／給料／女性の活躍／自分の成長可能性／自分の出身地／自宅通勤可能／親の地元就職意向／地元への貢献／その他（ ）

5 就職地が出身地である方（1の（1）と（2）が同じの方）にお伺いします。次の中（注1）から該当するものを二つまで選択し、✓をつけてください。
 親の近くで生活したかった／親から地元生活を勧められた／長男・長女だから／実家からの通勤は経済的に楽／地元の生活に慣れている／地元の風土が好き／地元へ貢献したい／志望企業がある／転勤がなさそうだから／仕事とプライベートの両立／都会で生活する自信がない／その他（ ）

6 就職活動をする際の親との関係（注2）について、該当するものを選んで、✓をつけてください。
 (1) 親と就職の話をよくした よく当てはまる／やや当てはまる／あまり当てはまらない／ほとんど当てはまらない
 (2) 親は地元での就職を勧めた よく当てはまる／やや当てはまる／あまり当てはまらない／ほとんど当てはまらない
 (3) 親から「好きにしないさい」といわれた よく当てはまる／やや当てはまる／あまり当てはまらない／ほとんど当てはまらない
 (4) 就職については親と意見が合わなかった よく当てはまる／やや当てはまる／あまり当てはまらない／ほとんど当てはまらない

7 就職活動を振り返り、自身の取組方は次のどれに該当しますか。該当するものに✓をつけてください。
 (1) 情報収集や事前学習など就職活動のための準備はどのようなものでしたか。
 十分に準備した／それなりに準備した／どちらかという準備しなかった／準備しなかった（その場しのぎ）
 (2) どのような意欲で就職活動に取り組みましたか。
 非常に意欲的だった／それなりに意欲的だった／どちらかという意欲的ではなかった／意欲的ではなかった
 (3) 困った時や難しい状況に直面した際にはどのように対応できましたか。
 うまく乗り切った／それなりに乗り切った／どちらかという乗り切れなかった／うまくいかず落ち込んだ

※以下の8～10については全員が記入してください。

8 今まで履修した授業科目の中で、進路を考える際に影響を受けたと思われる科目は次のどれですか。該当するものを三つまで選択し、✓をつけてください。
 「山形に学ぶ」科目（基盤共通教育科目）／フィールドプロジェクト／社会体験（インターンシップ）／造形文化論／基礎栄養学概論／スポーツ文化論／基礎栄養学概論／食品学概論／地域学校食育論／社会教育論／地域文化と造形／オペラ／衛生・公衆衛生学／学校栄養教育論／社会と学力／生涯学習論／キャリア教育／アウトリーチ／地域造形文化実践論／武道文化論／地域造形文化実践演習］／コミュニティ心理学／スポーツ経営管理学／その他（ ）

9 今までの地域学習の中で、進路を考える際に影響を受けたと思われる学習（注3）は次のどれですか。該当するものを二つまで選択し、✓をつけてください。
 教員からの地域の魅力や課題についての説明／官公庁、企業、NPO等の人達からの地域の魅力や課題についての説明／地域集落の人達からの地域の魅力や課題についての説明／地域に関する本、論文、資料等の調査／地域に関するデータの分析／地域の課題解決への取組／山形県地域の現地調査／地域の人々から知恵や工夫、術を教えてもらったこと／地域の人々と一緒に課題に取り組んだこと／地域の人々に対しての調査成果の発表／地域の人々から発表への評価を受けたこと／その他（ ）

10 インターンシップ（「教育実習」は含みません）についてお伺いします。
 (1) 今までに企業、学校、官公庁などへのインターンシップ（単位にならないものや1日のものも含む）にどの程度参加しましたか。該当するものに✓をつけてください。
 4回以上参加した／2～3回参加した／1回参加した／参加したことはない

※以下の（2）～（4）については、（1）で「参加した」と回答した方が記入してください。

(2) 参加したインターンシップの中で一番長い日数は次のどれに該当しますか。該当するものに✓をつけてください。
 1～2日間／3～5日間／6～10日間／11日間以上

(3) 最初にインターンシップに参加した時期は次のどれに該当しますか。該当するものに✓をつけてください。
 1年生／2年生前期・夏休み／2年生後期・春休み／3年生前期・夏休み／3年生後期・春休み／4年生

(4) インターンシップへの参加は就職等進路を考える際にどの程度影響を及ぼしましたか。該当するものに✓をつけてください。
 かなり及ぼした／少し及ぼした／あまり及ぼしていない／まったく及ぼしていない

（注1）回答欄の選択肢は、『榊マイナビ「2019年卒 マイナビ大学生リターン・地元就職に関する調査」』を引用。

（注2）回答欄の選択肢は、『平尾元彦、重松正徳 2006、「大学生の地元志向と就職意識」『大学教育』3：161-168』を引用。

（注3）回答欄の選択肢は、『小山治、2016、「県内就職を促進する効果的なカリキュラム・授業開発—徳島大学を事例として」平成27年度とくしま政策研究センター委託調査研究事業 成果報告書、徳島総合大学校、1-15』を引用。

12 アドバイザリーボード

平成 30 年度のCOC+事業取組についてアドバイザリーボード委員に報告し、本事業の進捗等について点検・評価を行い、本事業の目的・目標の達成に向けてさらなる取組に資することを目的として開催した。

1 日時 平成 31 年 2 月 21 日 (木) 13:00~14:45

場所 山形国際ホテル

2 出席者

[アドバイザリーボード委員]

(学外委員) 大山 正征 株式会社ユアテック相談役

佐藤 洋樹 寒河江市長

成沢 俊子 ピーキューブ株式会社代表取締役社長

(学内委員) 安田 弘法 山形大学副学長 (教育・学生支援・国際交流担当)

大場 好弘 山形大学副学長 (EM・入試・社会連携担当)

[事業協働機関]

(参加大学等) 梅津 正春 鶴岡工業高等専門学校産学連携コーディネーター

武田真理子 東北公益文科大学地域共創センター長

須藤 知美 東北芸術工科大学キャリアセンター課長

永盛 善博 東北文教大学子ども教育学科准教授

(参加自治体等) 金田 瑞枝 山形県企画振興部企画調整課調整主査

我妻 秀彰 米沢市企画調整部長

五十嵐一憲 鶴岡市企画部政策企画課課長補佐

柴田 知弘 西川町政策推進課企画調整係長

(参加団体等) 松村 英一 山形県工業会長

安部 幸裕 山形県銀行協会(山形銀行総合企画部山形成長戦略推進部長)

杉山 宏行 認定NPO法人山形創造NPO支援ネットワーク代表理事

[山形大学] 出口 毅 COC+推進室室長

横井 博 チーフコーディネーター

東山 禎夫 コーディネーター

滝澤 匡 コーディネーター

土井 敬真 地域教育文化学部准教授

佐々木 究 地域教育文化学部准教授

3 会議の概要

(1) 大学からの報告

- 山形大学 (横井チーフコーディネーター、滝澤コーディネーター、東山コーディネーター)

協働・循環型「やまがた創生」人材育成(COC+)事業の概要、COC+事業目標値と実績値の経緯等について、地域創生カリキュラムについて、県内就職率が低い工学部及び農学部を対象にキャリア Café の実施について、地域創生関連授業について及び山形県教育委員会と協働で実施した大学生と高校生による協働活動について等について、資料に基づき説明があった。

- 山形県立米沢栄養大学 (資料のみ)

○ 鶴岡工業高等専門学校（梅津産学連携コーディネーター）

2年生から実施する企業訪問研修、3年生から実施するCO-OP教育を中心に取り組みを実施している等、資料に基づき説明があった。

○ 東北公益文科大学（武田地域共創センター長）

COC+事業目標値・実績値及び分析、地域で実践する応用演習科目の開講、学生の質保証に向けた取り組み、地域共創コーディネーター養成プログラム実施による地域との交流等について、資料に基づき説明があった。

○ 東北芸術工科大学（須藤キャリアセンター課長）

COC+事業目標値・実績値及び分析、リニューアルした単位認定インターンシップ、キャリアカフェ、県内企業見学バスツアー、キャリアサポーターによる県内企業を知る冊子の発行・配付等学生が県内就職に意識を向けるための取り組みについて、資料に基づき説明があった。

○ 東北文教大学・東北文教大学短期大学部（永盛准教授）

山形県内出身者が多くその殆どが県内に就職している状況であり、これ以上の県内定着を図ることは難しく高校生・中学生に対して働きかけを実施した等について、資料に基づき説明があった。

(2) 委員からの指導・助言等（案）

○ 学生の県内定着を高めるために

COC+事業目標値と大きく乖離している現状である。様々な原因があると思うが、このまま従来のことを続けていくのか、活動を見直し目標値に近づけるのか、という問題に直面している。考え方としては、補助金の交付が終了しても継続すべき事業内容であり、最終的には、目標は変えずに目標達成に向けて努力する必要がある。

そのためには、まず、地元出身者の地元定着率は高いという説明があったように、大学と高校と更に連携し、山形県出身者を高める特別な方策が必要である。例えば、医学部では地元枠を設けているが、地元の若者がある程度優先して入学できる特別枠を広げていけば地元定着率も高まるということが、単純に考えればあると思う。また、地域枠とか推薦入学や奨学金とか様々な方策がとられている中で、地元の若者を優遇することができるか否かを、やまがた創生戦略協議会で議論してもらう必要がある。さらには、大学だけでは無理があり、高校や中学校からいろんな形で地元愛を強めていくことが長い目で見ると効果が出てくるものと思われるし、小中高や家庭での郷土愛を育む教育が企業の競争力も上がることにつながるのではないだろうか。

加えて、新規雇用の創出のために、昔から言われているのは企業誘致である。地方分散という意味で企業誘致を進めることも重要な方策である。

なお、大企業の場合は、首都圏本社採用でカウントされその後山形県に戻る者も多く、実体数としてはかなり高いと見込まれる。企業では公表しないため実体数把握の工夫が必要である。

○ 現在の取組のさらなる充実した展開のために

(1) 連携事業の進め方

本事業の目的として、産学官金連携で雇用促進を進めるとあるが、数値等具体的な活動状況について、例えば、共同研究による雇用創出等について把握することに努めてほしい。

共同研究は年々増加しているが、それが雇用につながるにはもう少し時間がかかる。地元企業の競争力と受け皿の拡大には山形県や市町村の支援を受けながら継続的に行うことが必要である。共

同研究に関するデータは本会議にぜひ提示する必要がある。

また、連携強化については、各大学がそれぞれ素晴らしい取り組みを行っている中で、それを総合的に把握する仕組み作りについて、もう少し議論する必要があると感じている。また、産学官連携については、産学官金の連携表記もあり金融機関の活用も必要ではないかと思う。

(2) インターンシップの取組方

鶴岡工業高等専門学校の報告の中で、CO-OP教育の課題の一つに学生の通勤困難を上げているが、あるカーディーラーでは企業と知恵を出し合い新たな通勤カーシェアリング・システムを導入しており、こういう方法を導入することを検討してみてもどうか。

また、山形大学では、インターンシップが直接就職に結びつかないと考えている方が多いと見受けられる。アメリカの大学の例では、4年間の各学期にインターンシップ必修としており大学の方針としてパートナーシップ契約を結び実務を経験させ地元企業に貢献する等の潮流があり、参考に値すると思われる。

現状としては、インターンシップでその効果を上げることについてはたやすいことではないと思われるが、その対応として、ひとつには、大学教育と連動できるインターンシップ参加企業・団体の発掘が有効であること、また、インターンシップ参加は1年次から、保護者・教員が関わってやるべきことだと思われる。

(3) 留学生への関わり方

国際化に伴い海外の人も活用する時代であるが、大学そのものは留学生の受入があまり進んでいない。山形県は留学生が極めて少なく下位に甘んじている。グローバルにビジネスを展開する意識を持つべき時代にそういう人がいないということを深刻に受け止めないと様々なチャンスを失う。そのような状況ではあるが、留学生も山形を愛して盛り上げてくれる文化になれるような取組も必要ではないかと思う。

○ 事業継続のために

この取組の中で、最上地域の取組はCOC+事業の目指す姿ではないかと思う。小学生から大学・社会人までを対象として進めていることは素晴らしい体制である。特に母親の影響力は大きいので保護者の参加も得ながら進めてほしい。

また、COC+シンポジウムにおいて、鼎談からのメッセージが表明されたが、今後具体的にこのメッセージはどこでどういうふうに詰めてCOC+事業として実施していくのか、という課題がある。事業継続のための重要な土台ともいえるものなので、産学官のリーダーによる3人の議論を深めるとともに、多方面からの検討を行いながら組織的に積極的に進めていただきたい。



平成 27 年度「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」
協働・循環型「やまがた創生」人材育成事業

平成 30 年度成果報告書

平成 3 1 年 3 月 発行

発行者 国立大学法人山形大学

問合せ先 山形大学COC+推進室

〒999-3101 山形県上山市金瓶湯尻 19-5

山形大学総合研究所 5 階

[TEL] 023-695-6264

[E-mail] cocsuisin@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

